


令和4年9月3日

意見書

椋山女学園大学

学長 黒田由彦 

意見書陳述者の履歴（学歴および職歴）、専門領域、学位および災害関連の研究

業績

1 履歴

1-1 学歴

1980年3月 名古屋大学文学部社会学研究室卒業

1982年3月 名古屋大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程修了

1984年3月 名古屋大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程中途退学

1-2 職歴

1984年4月～1987年3月 名古屋大学文学部社会学研究室助手

1987年4月～1991年3月 椋山女学園大学人間関係学部専任講師

1991年4月～1993年9月 名古屋大学教養部専任講師

1993年10月～2001年3月 名古屋大学情報文化学部助教授

2001年4月～2010年10月 名古屋大学大学院環境学研究科社会学講座助教授

2010年11月～2017年3月 名古屋大学大学院環境学研究科社会学講座教授

2017年4月～2022年3月 椋山女学園大学文化情報学部教授

2022年4月～現在 椋山女学園大学学長

2 専門領域…地域社会学、都市社会学、災害社会学

3 学位…博士（社会学）（論環境博第48号、名古屋大学）

4 災害関連の研究業績

4-1 著書・論文等

黒田由彦, 2012, 「『ポスト 3.11 の地域社会』を問うことの意味」地域社会学学会  
会報 No.175.

黒田由彦, 2012, 「『愛知県に広域避難された方の支援のあり方を考えるためのア  
ンケート調査』の結果概要」,

<http://aichi-shien.net/modules/d3downloads/index.php?cid=6>, .

黒田由彦・浅井南, 2013, 「『広域避難をされた方々の現状を正しく理解し今後のより有益な支援等につなげるためのアンケート調査』調査結果のご報告」,

<http://aichi-shien.net/modules/d3downloads/index.php?cid=6>, .

黒田由彦, 2014, 「災害復興のビジョンと現実」地域社会学会会報 No.186.

黒田由彦, 2014, 「特集に寄せて」『東海社会学会年報』第6号, 5-6.

黒田由彦, 2014, 「解題 東日本大震災：復興の課題と地域社会学」地域社会学会年報, 第26集.

黒田由彦, 2015, 「『ポスト3.11の地域社会』の成果と課題」地域社会学会年報, 第26集.

黒田由彦編, 2015, 「『脆弱性とプリペアードネス』研究会活動報告書』科学研究費・基盤研究(B) (研究代表者：黒田由彦) 報告書.

自治体間支援研究会編, 2015, 「東日本大震災 自治体間支援調査報告書』科学研究費・基盤研究(B) (研究代表者：黒田由彦) 報告書.

KURODA, Yoshihiko, 2016, The Great East Japan Earthquake and Change of Disaster Management in Japan: Toward Community-based Approach, International Comparative Study on Mega-earthquake Disasters: Collection of Papers Vol.1.

黒田由彦, 2018, 「『名古屋市南区における防災に関する社会調査』報告書 [概要版]」.

田中重好・黒田由彦・高橋誠・室井研二, 2018, 「東海地方における災害・防災研究—歴史と現在」『東海社会学会年報』第 10 号.

田中重好・黒田由彦・横田尚俊・大矢根淳編, 2019, 『防災と支援—成熟した市民社会に向けて—』有斐閣.

黒田由彦・辻岳史, 2019, 女川町の復興と原発——原発と地域社会, 吉野英岐・加藤眞義編『震災復興と展望—持続可能な地域社会をめざして』有斐閣.

黒田由彦, 2019, 「区域外避難の合理性と被害」『環境と公害』2019 年 1 月号.

黒田由彦, 2021, 「女川の復興と原発再稼働」『環境と公害』2021 年 4 月号.

#### 4-2 学会報告等

黒田由彦, 2012, 愛知県における避難の現状と支援, 社会学系 4 学会合同集会「原発避難を捉える／考える／支える」(2), 法政大学.

黒田由彦, 2013, 異郷の被災者——愛知県における広域避難者の現状と被災者支援, 山口大学研究推進体公開シンポジウム「東日本大震災 3 年目の課題」, 山口大学.

黒田由彦, 2013, 東日本大震災における自治体間支援の研究 I —問題意識と分

析視角，地域社会学会第 38 回大会，立命館大学.

黒田由彦，2013，復興の何が問題か—東日本大震災からの復興プロセスとガバナンス，地域社会学会第 38 回大会，立命館大学.

黒田由彦，2014，災害復興のビジョンと現実，地域社会学会 2014 年度第 1 回研究例会，首都大学東京.

辻岳士・黒田由彦，2014，原発立地地域における復興と「再稼働」—宮城県女川町・石巻市および女川原発 UPZ30 km圏の自治体を事例として—，日本社会学会第 87 回大会，神戸大学.

辻岳士・黒田由彦，2015，地域復興と生活再建に対する住民の評価と意識—宮城県女川市における質問紙調査から—，日本都市社会学会第 33 回大会，静岡県立大学.

辻岳士・黒田由彦，2016，原発立地地域住民の災害経験と原発への態度—宮城県女川町における質問紙調査の分析，地域社会学会第 41 回大会，桜美林大学.

黒田由彦，2016，支援の創発性を生む社会的条件—災害支援の新しいかたち（大会シンポジウム報告），日本社会学会第 89 回大会、九州大学.

黒田由彦，2017，南海トラフ巨大地震被害予想地域における住民の防災意識と防災対策の現状と課題，第 107 回地域調査研究会、名古屋大学.

黒田由彦・若山幸大，2018，「南海トラフ巨大地震被害予想地域におけるコミュ

ニティ防災の現状と課題——名古屋市南区の事例」, 第4回震災問題研究交流会, 早稲田大学.

KURODA, Yoshihiko, 2018, Community-based Disaster Management in an Expected Damaged Area by Nankai Megathrust Earthquake: the Case of Minami-ku in Nagoya, 中日巨灾后的复兴重建讨论会, 中国地震局地球物理研究所 (北京).

KURODA, Yoshihiko, 2018, Post-disaster Reconstruction of Town after the East Japan Earthquake: A Case Study of Onagawa-cho in Miyagi Prefecture, Experiences of Post-disaster Reconstruction from China and Abroad, Chinese Academy of Science and Technology for Development (CASTED), Media Center in Beijing.

黒田由彦, 2020, 大規模災害からの復興の地域的最適解に関する総合的研究 2020 (2) — 「地域的最適解」概念再考, 第93回日本社会学会大会、オンライン (松山大学主催).

## 目次

1. はじめに
2. 避難継続の合理性
  - 2-1. 名古屋地方裁判所の判決について
  - 2-2. 平成23年12月に原発事故が収束に向かっていることが確認できたといえるか
  - 2-3. 当時の公衆被曝に対する線量限度の基準と避難継続の合理性
  - 2-4. 一度避難すれば、帰還は容易ではなくなること
3. 避難がもたらした被害（損害）
  - 3-1. 福島第一原発事故がもたらした避難は「強いられた避難」
  - 3-2. 避難の最中の恐怖と不安という被害（損害）
    - 【被曝が健康被害をもたらすのではないかと恐怖と不安】
    - 【過酷な避難途中の体験】
    - 【地域での生活が根底から崩れていくのではないかと不安】
  - 3-3. 被曝の恐怖と不安という被害（損害）
    - 【被曝したことで将来にわたって健康が損なわれるのではないかと恐怖と不安】
    - 【被曝を少しでも避けるために日常生活に自ら制限をかける日常生活の自由と不安】
    - 【不自由な日常生活が家族の中に軋轢をもたらし、精神的苦痛を味わう】
    - 【将来、子どもの健康に深刻な被害が生じるのではないかと恐怖と苦痛】

### 3-4. 避難先での慣れない生活をもたらした被害（損害）

【慣れない土地で生活リズムが狂い心身に不調を来す】

【病気になって通院や退院を余儀なくされ、精神的に苦しむ】

### 3-5. 経済的な被害（損害）

【避難生活は、経済的負担をもたらす】

【二重生活に伴う経済的負担をもたらす不安】

【福島に定期的に帰るための経済的・精神的負担】

【避難地での再就職にともなう収入の減少と職場での苦勞】

### 3-6. 思い出の喪失という被害（損害）

【思い出を喪失したことによる苦痛】

### 3-7. 人間関係に関する被害（損害）

【家族・親戚・友人・知人との突然の別離をもたらした精神的苦痛という被害（損害）】

【親戚との決裂をもたらした精神的苦痛という被害（損害）】

【家族の中に生まれた埋められない溝をもたらした精神的苦痛という被害（損害）】

【離婚の危機をもたらした苦痛という被害（損害）】

【突然の死別や葬儀に参列できなかった無念をもたらした精神的被害（損害）】

【地域の間人間関係を喪失したという被害（損害）】

### 3-8. 避難に伴う二次被害（損害）

【避難したことに対する自責に苦しむという被害（損害）】

【避難先における偏見を避けるために警戒しなければならないという精神的負担と苦痛という被害（損害）】

### 3-9. 人生計画が狂わされたという被害（損害）

【自然環境を普通に享受する暮らしができなくなったという被害（損害）】

【子どもが自分の将来を自ら狭めることを目の当たりにするという苦痛】

【これまでどおりの生活ができなくなってしまった絶望感に苛まれる被害（損害）】



## 1. はじめに

平成30年8月24日付意見書を提出したが、名古屋地方裁判所の判決を受け、補足して意見を述べる。

以下、本意見書の本文は、大きく分けて、「2. 避難継続の合理性」と「3. 避難がもたらした被害（損害）」の2つから構成されている。

本文とは別に、付録として、「陳述書の内容分類・引用リスト」を添付する。これは、原告の陳述のなかにおいて、どのような被害（損害）が語られているかを示したリストである。

リストの第1列は、本文の引用に付した証拠番号（たとえば「甲 C4 第1号証」）と原告番号である。第2列は頁番号、第3列はその被害がどのような種類のものかを示したものである。第4列は陳述書からの被害（損害）が語られている部分の引用である。

本文中の「3. 避難がもたらした被害（損害）」では、このリストに基づいて論述している。本文で触れた被害（損害）は原告が被った被害（損害）のごく一部にすぎないことが、この長大なリストは物語っている。

## 2. 避難継続の合理性

## 2-1. 名古屋地方裁判所の判決について

名古屋地方裁判所の判決（以下「一審判決」という）は、帰還困難区域、旧居住制限区域、旧避難指示解除準備区域、自主的避難等対象区域のすべての住民について、避難の合理性を認めた。

一方、避難継続の合理性については、帰還困難区域は判決時までの避難継続の合理性を認めたが、大熊町を除く旧居住制限区域と大熊町及び双葉町を除く避難指示解除準備区域については居住制限区域または避難指示解除準備区域が解除されてから1年後の平成30年3月31日まで、旧緊急時避難準備区域と自主的避難対象区域の妊婦及び子供については平成24年8月31日まで、自主的避難対象区域の妊婦子供以外の避難者については平成23年12月31日まで認め、それ以降は避難継続の合理性を認めなかった。

しかし、一審判決が上記のように避難継続の合理性を認める時期を制限した理由には科学的根拠がなく、社会学的にも上記の期間以降は避難継続の合理性がなくなったと言いがたい。

以下、特に短期間しか避難継続の合理性を認めなかった旧緊急時避難準備区域と自主的避難対象区域について、社会学的見地から述べる。

## 2-2. 平成23年12月に原発事故が収束に向かっていることが確認できたとい

えるか

一審判決は、旧緊急時避難準備区域と自主的避難対象区域の避難継続の合理性を制限する根拠として、平成23年12月16日に「放射性物質の放出が管理され、放射線量が大幅に抑えられている」というステップ2の目標達成と完了を確認したことが発表されたことをあげ、同年12月には原発事故が収束に向かっていることが確認できたといえるとしている(512頁、513頁)。

しかし、問題はその時点において、旧緊急時避難準備区域と自主的避難対象区域に居住していた人々が「ステップ2の目標達成と完了」をもって安全な環境が実現したと考えたか、ということである。当時、冷温停止したとは言え、管理されているとはいえ、放射性物質の放出は続いており、さらに使用済み核燃料プールは依然脆弱で、特に4号機のプールで事故が発生することが憂慮されていた。このような状況下でステップ2が完了したからと言って、安全な状態がその後も続くか否かは誰にもわからず、安全になったと言える状況ではなかった。

先の意見書に記載したように、人間は事後的に振り返って確認された「客観的事実としての現実」に生きているのではなく、その時点で認知可能な情報を元に集合的に構築された「社会的現実」のなかで生活している。当時どう判断すべきであったか、どう行動すべきであったかは、事後的に振り返って検討するのではなく、当時の「社会的現実」の内容に即して判断されるべきである。ステップ2

が完了したことにより原発事故の収束に向かっていると判断する一審判決にはこの視点が完全に欠落している。

確かに、ステップ 2 の完了によって原発事故の収束に向かっているという国の発表を無批判に信じる人はいただろう。しかし、国民の大多数はそのように信じてはいなかった。この時点でも避難した人は多くいたし、既に避難していた人々の大多数は、国の発表を受けても直ちには帰還しなかった。この事実自体が、多くの人々にとってはステップ 2 の完了によって原発事故が収束に向かっているとは信じられていなかったことを示している。先の意見書に記載したとおり、原発事故以来、国の発表は二転三転していた。時間の経過とともに避難指示区域が変化し、原発事故以前には通常時の一般公衆に対する線量限度は年間 1mSv とされていたが、事故後に年間 20mSv に引き上げられ、その合理的な理由も示されなかった。このような状況から、政府の発表が正しいと無条件に考える人が多数を占めていたとは考えられない。

そのことは、世論調査でも確かめられる。内閣府、全国紙（読売新聞と朝日新聞）、国立環境研究所、日本原子力学会などによる世論調査の結果を分析した岩井紀子・宍戸邦章によれば、放射性物質の健康への悪影響に対して、原発事故から半年後の調査では 68% が心配だと回答し、1 年後には 66% と微減するが、2

年後には69%と、不安は払拭されるどころか1年後よりも高まっている<sup>1</sup>。原発事故から2年後の2014年3月の時点においても、原発事故被災地の住民を含む国民全体の三分の二に被爆することへの不安があったわけであり、2011年12月の「ステップ2の目標達成と完了」をもって避難継続の合理的な理由がなくなったとする一審判決は、当時の国民の意識の実態と明らかにかけ離れている。

### 2-3. 当時の公衆被曝に対する線量限度の基準と避難継続の合理性

一審判決515頁は、100 mSv以下の被曝線量による発がんリスクの増加傾向を証明することが難しいことを指摘しているが、だからといって安全と言える訳ではない。先の意見書に書いたように、放射線被曝によって生じるガンの罹患という被害は、確率は大きくないかもしれないが、発生すれば当該個人にとっては取り返しのつかない重大な被害である。その事態を避けるための予防的措置として、避難者が生活環境の被曝水準が原発事故前の基準に戻るか、年間1 mSv以下になるまで避難を継続することは合理的と評価できる。

避難継続の合理性というのは、個人の行動の合理性を問題にしているのだから、社会全体のリスクを問題にしているのではないことを理解しなければな

---

<sup>1</sup> 岩井紀子・宍戸邦章、2013、「東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故が災害リスクの認知および原子力政策への態度に与えた影響」『社会学評論』64(3)420。

らない。発生確率が低いがもしも実際に発生したときの被害が自分の人生（あるいは子どもの人生）にとって甚大だと予想できる場合、当該個人が避難を継続することに合理性はある。

#### 2-4. 一度避難すれば、帰還は容易ではなくなること

一審判決は、自主的避難対象区域について、妊婦及び子供以外の避難者の避難継続が認められるのは平成23年12月31日までとし、その理由として、原発事故からステップ2の完了により本件事故が収束に向かっていることが確認された平成23年12月まで約9か月しか経過していないため帰還が比較的容易としている。

しかし、本件原発事故から9か月ほど経過していれば、避難者は避難先で学校や就職など、新たな生活基盤を築き始めていた。ようやく軌道に乗りかけたそれらを捨てて帰還することは精神的に容易ではない。また、先の意見書に書いたように、避難によって避難元での人間関係が決裂していれば避難の期間が短かったとしても帰還は困難になる。

避難者は避難の際にそれまでの生活基盤を清算し、避難先で新たな生活基盤を作り始めていた。その新たな生活基盤や人間関係を再度清算して戻るために

は、相当の労力や負担を要することになる。それでも帰還すべきであったとするのであれば、その労力や負担に応じた補償を行うべきである。一審判決は放射線量だけを基準とし、このような社会生活や避難者の実態を考慮していない。

### 3. 避難がもたらした被害（損害）

#### 3-1. 福島第一原発事故がもたらした避難は「強いられた避難」

続いて、避難することによって、どのような被害（損害）がもたらされたかについて意見を述べる。

最初に一つ確認しておきたいことは、原発事故に伴い避難した人々にとって、避難は決して望んだものではなかったということである。避難指示区域以外の避難は「自主避難」と呼ばれることがあるが、それは極めて誤解を招く言い方である。というのは、「自主避難」というと、あたかも自分から望んで避難したかのような印象を与えるからである。事実は、慣れ親しんだ土地を離れた人はいなかった。福島第一原発事故に伴う避難者は、危険を回避するために、不本意ながら泣く泣く避難したのである。その意味で、それは「強いられた」避難であった。このことは、避難指示区域内の避難であろうが、区域外の避難であろうが、原発事故が「強いられた」避難という現象を生んだという事実が変わりはない。

一審判決によれば、原子力損害とは、原子炉の運転等と相当因果関係のある損害全てがこれに含まれると解される。原子力損害とは、不法行為における損害と同様に、「核燃料物質の原子核分裂の過程の作用又は核燃料物質等の放射線の作用若しくは毒性的作用」が発生しなければあったであろう状態と現状の差額を金銭的に評価したものであると解される（一審判決 505 頁）。

福島第一原発周辺地域において、原発事故が勃発しなければあったであろう状態とは、年間 1mSv 以下の被曝という条件のもとで安全安心に社会生活を送るという状態である。したがって、一審判決の上の指摘に従えば、年間 1mSv 以下の被曝という原発事故以前の条件が回復されるまで、避難がもたらす被害（損害）は続くと考えなければならない。被害は賠償されなければならない、被った精神的苦痛に対しては慰謝料が支払わなければならない。

換言すれば、仮に年間 1mSv 以下の被曝という原発事故以前の条件が回復後にも、避難生活を継続するのであれば、それは避難者の自発的選択であり、その選択の結果生じる様々な損害に関して自己責任原則を適用するのが妥当である。しかし、年間 1mSv 以下の被曝という原発事故以前の条件が回復されない以上、自己責任原則を適用するのは法的に妥当とはいえない。

以下、避難がもたらした被害（損害）について、原告の陳述書を引きながら、具体的に指摘する。



### 3-2. 避難の最中の恐怖と不安という被害（損害）

原発事故発災当時、刻々と変化する原発事故の状況について、十分な、かつ混乱のない首尾一貫した情報が、原発周辺地域の住民に対して、責任ある主体からタイムリーに与えられたわけではなかった、ということである。住民はTVなどマス・メディアやパーソナル・ネットワークを通して得られる断片的な情報を頼りにする以外に選択肢がなかった。

さらに、時間の経過とともに、避難指示区域が変化したことで、放射性物質の飛散に関してどのような状況にあるのか政府が把握しきれておらず、対応が後手後手に回っているという印象を与えた。3月11日に福島第一原発の半径3km圏内に避難指示、3～10km圏内に屋内退避指示が出されたが、翌日には半径20kmに避難指示が拡大した。3月15日には屋内退避指示が20～30km圏内に拡大され、4月22日には計画的避難区域と緊急時避難準備区域という新たな区域が設けられ、福島第一原発から30km以上離れた飯舘村等が指定された<sup>2</sup>。

加えて、事故直後における当時の政府のリスク・コミュニケーションが稚拙だ

---

<sup>2</sup> 原発災害・避難年表編集委員会編『原発災害・避難年表-図表と年表で知る福島原発震災からの道』すいれん舎、2018年、27頁。

った。原発事故発生後、政府は原発周辺地域の住民および国民に対して、「(原発事故は周辺住民に対して) 直ちに健康に被害を及ぼすものではない」というメッセージを送り続けた。しかしながら、避難指示区域が頻繁に変更され、政府の現状把握能力と対応力に疑問符がつけられている状況のなかで行われたために、「直ちに影響はないが、将来的にはあるかもしれない」という疑念を原発周辺地域の人々の心のなかに生み出したと考えられる<sup>3</sup>。

#### 【被曝が健康被害をもたらすのではないかという恐怖と不安】

上記のような中で避難が行われたわけであるが、多くの人々が被曝による健康被害に対する恐怖と不安、言い換えれば、すでに被曝してしまったのではないかという恐怖と不安に苛まれた。しかも、どれだけ被曝したかを確かめる手段がなかったことが不安を増幅した。

飛行機に乗る前には放射線の検査がありました。検査をしていた人は、ごついマスクをつけて防護服を着ていました。私は、その姿をみて、自分がそれほど放射線を浴びてしまったのかと思い、非常に怖い思いをしました。(甲 C4 第 1

---

<sup>3</sup> 社会的コンテキストの変化を考慮に入れず、同じメッセージを発すると、意図したことは反対の効果をもたらすというの、コミュニケーションに関する社会学の公理である。

号証 p.4)

**【過酷な避難途中の体験】**

避難という行為そのものが、容易なものではなかった。ガソリンは逼迫し、家族が寝る場所もなく、厳冬のなかで暖房もなく車中泊せざるをえないという苦痛を味わった。

郡山市の避難所は中に入れてくれませんし、・・・ガソリンがないので駐車場に留まらざるを得ませんでした。また、車の中の避難だったので・・・。雪が降っていてとても寒かったですが、ガソリンを無駄にできないということで、エンジンも切っていました。(甲 C11 第 2 号証 p.5)

**【地域での生活が根底から崩れていくのではないかという不安】**

時間の経過とともに、原発事故周辺地域では、自分が慣れ親しんだ地域社会から人々が避難して行き、通常ならば店に並んでいる商品もなくなっていく。安全安心な日常生活が失われていく不安に悩まされる状態に陥った。

みんなが続々と避難し、いわき市全体が空っぽになって行く・・・。原発事故

の影響でいわき市には、支援物資はおろか、ガソリン、スーパー等の品物も届きません。・・・家に残っているものを食べて2週間ほどかろうじてしのいでいました。私は、このままここで生活ができるのか、無事に子どもを産めるのか、不安で不安でたまりませんでした。(甲 C9 第 1 号証 p.5)

### 3-3. 被曝の恐怖と不安という被害（損害）

【被曝したことで将来にわたって健康が損なわれるのではないかとという恐怖と不安】

原発事故は、周辺地域の人々を、被曝によって自分と家族の健康が損なわれるのではないかとという恐怖と不安から逃れることができない状態に陥らせた。

私と夫は、3月13日以降は大阪に避難していたのです。原発事故の詳細が分からず、また放射能についての知識もなかったため、大阪にいても原発の影響があるのではないかと不安になり、恐怖のために何日も眠られず食事もとれない状態が続きました。(甲 C2 第 1 号証 p.3)

【被曝を少しでも避けるために日常生活に自ら制限をかける日常生活の不

## 自由と不安】

被曝したことによる健康への不安は、家族の日常生活の過ごし方に自ら制限をかけるという行動様式を生んだ。

私たち家族は南相馬市で生活するようにはなりましたが、放射能汚染の不安が常につきまといまいます。特に食材選びが心配で、本当だったら他県の食材を購入したいのですが、経済的に苦しく、気にしすぎては生きていけないので、やむを得ず福島県内の物も口にしています。(甲 C3 第 1 号証 p.10)

## 【不自由な日常生活が家族の中に軋轢をもたらし、精神的苦痛を味わう】

不自由な行動様式自体は家族、特に子どもとの間に精神的軋轢をもたらし、家族が苦痛を味わうことになった。

妻も福島にいたときは、外で遊びたい長女を外で遊ばせず、窓も開けないようにして生活していました。妻は、空気清浄機を購入して使用したり、洗濯も部屋干し、食べ物も地元の物は避けネットで遠方の食材を購入し、水も宅配を使用しました。そんな不便な生活に私ももちろんですが、私以上に妻や子どもらは相当疲れていました。(甲 C10 第 1 号証 p.7)

**【将来、子どもの健康に深刻な被害が生じるのではないかという恐怖と苦痛】**

将来、子どもの健康に深刻な被害が生じるのではないかという恐怖は、著しい苦痛を生み出した。

現時点において、長女と長男の甲状腺嚢胞が本件事故によって生じたとは証明できないとしても、本件事故の影響がないとは言い切れません。・・・私たちは、今後も、被ばくの不安を感じながら甲状腺の治療と健康診断を継続して生活をして行かざるをえず、著しい苦痛を受けています。(甲 C30 第 1 号証 pp.11-12)

避難直後の平成 23 年 3 月に県が無料で行った甲状腺の検査を家族全員で受けました。しかし、その検査は外から機械を当てて計測するだけの簡単なものでした。結果は異常なしと言われましたが、本当にきちんと検査できているのか、不安です。(甲 C22 第 1 号証 p.19)

福島で自分たちの子供を産み、育てることが、その子の将来のために本当に正しいことなのか、悩みました。悩みながら、何故、私たちがそのようなことで

悩まなければならないのかとも憤りを感じました。(甲 C16 第 1 号証 p.5)

### 3-4. 避難先での慣れない生活をもたらした被害 (損害)

#### 【慣れない土地で生活リズムが狂い心身に不調を来す】

予想外の避難だっただけに、避難先での生活にはなかなか慣れなかった。言葉のニュアンスが異なり、避難先の人々の何気ない言葉に傷ついたり、料理の味付けに慣れたりするのにすら苦勞した。とくに避難先で人間関係がうまくつくれず、引っ込み思案になっていくこともあった。

岡崎での生活は、米・みそ・醤油・野菜は共通でも、味付け等で、東北圏と名古屋圏では相当異なり、慣れるのに大変苦勞しました。・・・食べ物ばかりでなく、言葉も違うため、気苦勞で夜は眠りが浅くなり、朝も早くから目が覚めてしまうようになりました。(甲 C21 第 1 号証 p.5)

言葉のニュアンスが岐阜と福島では違うため、おそらく相手の意図するところではないでしょうが、私にはきつい言葉を言われたと感じ、傷つくこともありました。・・・うまくコミュニケーションが取れないことがあったため、引っ込

み思案となり、人との付き合いや活動が消極的になってしまいました。(甲 C33

第 1 号証 p.9)

**【病気になって通院や退院を余儀なくされ、精神的に苦しむ】**

はなはだしい場合は、体調を崩して病気になり、通院や入院を余儀なくされることもあった。

平成 23 年 4 月初旬、私たち夫婦は、当初、名古屋市提供の市営住宅に入居しましたが、エレベーター等がなく、毎日階段の上り下りを強いられたほか・・・、旧式のお風呂の段差が激しかったことから・・・、妻は、股関節を痛め、平成 24 年 1 月、人工股関節置換術を余儀なくされました・・・。(当該住居に入居するまで)妻が股関節の痛みを訴えるなどしたことは、一度もありません。(甲 C20 第 1 号証 p.6)

母が入退院を繰り返すだけでなく、姉がメニエール病を発症して倒れ入通院をしたり、長男が原因不明の発作を起こして倒れたり、私自身も仕事や人間関係の変化から心療内科に通院するなど、避難当初約 1 年くらいは全く気の休まる時間がありませんでした。(甲 C27 第 1 号証 p.5)



言うまでもなく、このような身体的・精神的苦痛は、原発事故が起こっていなければ、経験することはなかったものである。

### 3-5. 経済的な被害（損害）

#### 【避難生活は、経済的負担をもたらす】

避難生活は、経済的負担をもたらす。着の身着のまま避難したので、生活に必要な物資をすべて買い直さなければならなかったし、地域の事情がよくわからないことが余分な経済的負担をもたらした。

経済的にも、生活用品や家財道具はもちろんのこと、運動服・体操服、上履きなど小学校で必要な物もまた一から買い直す必要が出たため、手間と経済的負担が大きかったです。（甲 C36 第 1 号証 p.6）

どこの病院へ通えばいいのかも分からず、病院を探すのにも苦勞をしました。さらに、福島では車で通院できていましたが、避難先では病院へ行くにも交通手段がなく、地理もわからないため、やむを得ずタクシーを利用することが多

くて経済的に大きな負担でした。(甲 C15 第 1 号証 p.5)

### 【二重生活に伴う経済的負担がもたらす不安】

原発事故が勃発した時点では、避難生活がいつまで続くかに関して見通しがたたない状況であった。それ故、避難生活を始めてはみたものの、福島での生活も同時に維持するという選択をした家庭も少なくなかった。それは、避難先と福島の二つの拠点での生活を維持するというコストがかかる状況を生んだ。

南相馬のアパートも帰ってくるつもりでしたので解約せず、その家賃も請求されており、二重生活の上に仕事がないという状況で将来への不安は膨らむ一方でした。(甲 C24 第 1 号証 p.6)

### 【福島に定期的に帰るための経済的・精神的負担】

生計を維持するために主たる「主たる生計維持者」である夫が福島に留まり、母と子が避難するというように、分かれて暮らさざるをえない家族もあった。三世家族の場合、同居する父母は福島に留まり、子ども夫婦と孫は避難するということもあった。どちらのケースにせよ、面会のために定期的に福島に帰省した。また避難はしたものの、住んでいた家はまだある。誰も住まない家は急速に劣

化していくので、定期的に一時帰宅し、家屋の状態を維持する必要があった。

以上のような定期的な福島への帰省は、経済的かつ精神的負担をもたらした。

面会や一時帰宅のためにかかる移動時間や費用ですが、片道 700 キロメートルの距離を車で移動するので、休憩時間を除くと 7 時間かかり、到着してホテルで 1 泊し、翌日に帰宅するという 2 日の行程です。(甲 C41 第 1 号証 p.9)

#### 【避難地での再就職にともなう収入の減少と職場での苦勞】

一家で避難した家庭において、「主たる生計維持者」が幸い再就職できたとしても、収入が減少することが普通であった。仕事に適應することにも苦勞した。

夫が名古屋に戻り幸い、愛知県内で仕事を見つけることは出来たのですが、以前より収入が少なくなりましたし、道路も分からず、仕事の段取りも福島にいたときとは異なるため、とても苦勞をしていました。(甲 C3 第 1 号証 p.7)

### 3-6. 思い出の喪失という被害 (損害)

#### 【思い出を喪失したことによる苦痛】

福島の家を処分して避難した家庭もある。避難や生活をするために、処分せざるを得なかったのである。事故がなければ、思い入れのあるものや住居を手放す必要は生じなかった。使い慣れたものや写真を廃棄せざるをえなかった。思い出というかけがえのないものを失うという苦痛を味わった。

私は被曝を避けるため、平成24年2月3日に自宅の家財道具や家電を処分しました。処分したものの中には、タンス職人であった私が結婚した際に妻のために作ったケヤキ玉杻漆塗りの和ダンスや、実母が長年使用していた物など、思い出の物も多くありました。(甲C18第1号証 p.13)

引っ越しを極力スムーズにするため、使い慣れた物を捨てざるを得ず、精神的にもつらかったです。(甲C23第1号証 p.8)

すぐに戻るつもりだったので、アルバムなど何も持ってくるできない状態で、母が残しておいてくれた幼稚園の時に作った作品や、小学校・中学校でもらった賞状や成績表など全て雨漏りのためぐちゃぐちゃになってしまいました。何一つ子供のころの思い出は持ってこれませんでした。(甲C11第2号証 p.11)

### 3-7. 人間関係に関する被害（損害）

【家族・親戚・友人・知人との突然の別離がもたらした精神的苦痛という被害（損害）】

原発事故によって、家族・親戚・友人と突然離れて暮らさざるを得なくなった。

・・・いったんは、双方の実家の両親等を含む親族一同で避難を開始したのですが、夫らは、福島県内の仕事を辞めるわけにもいかず、また、母らは高齢であることもあって、結局、私と長女らだけが、名古屋市内での避難生活を続けることになったのです。（甲 C38 第 1 号証 pp.5-6）

・・・まさかその後約 1 年間半も孫達と離れ離れの生活を送るとは思っておらず、心の準備ができないまま、離れて生活を送ることとなってしまいました。いわき市に戻ってから孫達に会えなかったのはとても苦しかったです。（甲 C33 第 1 号証 p.4）

愛知県という慣れない土地で、周囲に親戚や知り合いもおらず、私たち夫婦も

子ども達もとても寂しい思いをしました。(甲 C3 第 1 号証 p.9)

**【親戚との決裂がもたらした精神的苦痛という被害（損害）】**

福島第一原発事故は、福島から避難する人と福島に留まる人の間に溝をつくった。避難した人は、福島を裏切って出て行ったと見なされた。その感情は、家族や親族の中でより激しく表出された。避難した人は、福島に留まった家族から非難され、恨まれた。被曝から家族（とくに子ども）や自分の身を守るという当事者にとってやむにやまれぬ選択が、家族や親族から理解されず、逆に感情的な拒絶を惹起し、深い溝をつくった。それは双方に大きな精神的苦痛を与えた。感情的な衝突が原因でできた溝は、容易に元には戻らないしこりを生んだ。

いわき市には、父方の親族も、母方の親族もあり、お正月やお盆には集まって、親しく交流していました。・・・親戚の一部からは、私や兄や妻・・・さん達が両親をそそのかしていわき市を捨てさせ、岐阜に連れきたと思われているらしく「恨んでやる」ということまで言われたそうです。(甲 C36 第 1 号証 pp.13-14)

**【家族の中に生まれた埋められない溝がもたらした精神的苦痛という被害（損害）】**

害)】

避難をきっかけとする人間関係の悪化は、目に見える形ばかりではない。人間関係があからさまに決裂したり、不仲になったりすることもあったが、そうではなくて、決定的に決裂しないよう不満を口にして対立を表面化させることを避けることもあった。しかし、逆にそれが家族の中に溝を生み、苦痛をもたらした。

私は故郷にいる両親や友人らとの関係が壊れてしまいつつあることを感じており、故郷の人間関係が修復不可能になる前にいわきに戻りたいと思う……。私だけ福島へ帰ろうかと実はこれまで何度も思ったこともあるのですが、妻にはわかってもらえませんでした。妻とは、帰還のことについては何度も話をしていますが、どうしてもお互いにわかり合えない部分があり不満が残ってしまっています。(甲 C39 第 1 号証 p.10)

妻からは、地元に一時的にでも行くようであるなら、子供は絶対作らない。いわき市に行くならその覚悟でいて欲しいと(長男は)言われているそうです。実際に、長男は結婚後にいわき市の友人の結婚式に招待されましたが、行きませんでした。…あるとき、長男は私に「1回はいわきに行ってみたいよなあ。」と漏らしました。…もちろん、長男の妻を恨んでいるわけではありません。

私の心にあるのは、福島がそのような恐怖の地にされたことに対する怒り、  
悲しみです。(甲 C36 第 1 号証 p.14)

**【離婚の危機がもたらした苦痛という被害（損害）】**

避難がもたらした人間関係に対する被害（損害）の中で、最も深刻だったのが  
離婚である。実際に離婚に至ったケースもあるが、離婚に至らないケースについ  
ても、当事者たちに精神的な苦痛を与えた。

以前は一戸建ての生活をしており、団地での生活は初めてでとまどうことば  
かりで、先が見えない不安から夫と夫婦喧嘩が絶えない状態でした。(甲 C3  
第 1 号証 p.8)

私たち夫婦は、本件事故後、妻が避難しようと提案したとき、福島と愛知で  
離れて暮らしていたとき、それまで話題にもあがらなかった離婚という話も  
何度もしました。私たち夫婦にとって離婚話は、本当に切実で精神的にも大  
きな負担でした。なんとか離婚の危機を乗り越え、今夫婦として生活してい  
ますが、本件事故がなければ、離婚の話もなく、円満な夫婦関係でした。(甲  
C10 第 1 号証 p.11)



【突然の死別や葬儀に参列できなかつた無念がもたらした精神的被害（損害）】

配偶者が突然亡くなった。福島に留まった家族が亡くなったにも関わらず葬儀にも参列できなかつた。長年かわいがってくれた「おじいちゃん」の死に目にも会えず、最後の別れ際にも顔を見ることもできなかつた。それらは、取り返しのつかない喪失感を生んだ。

・・・こうした生活を送っているうちに、平成 28 年 12 月に突然妻が心筋梗塞で倒れ、そのまま亡くなってしまいました。・・・そして、私と妻は再度一緒に住めるようになることのないまま・・・。無念な気持ちでいっぱいです。（甲 C11 第 1 号証 p.9）

・・・祖父は妻のことを小さい頃からとてもかわいがってくれたようで、妻は祖父のことを大変慕っていました。そのため、妻は父母から祖父の死の連絡を受けた時、葬式に行きたがっていましたが、父母から「避難しているんだから葬式に来なくてよい。」と言われたそうです。・・・妻は大好きだった祖父の死に目に立ち会えず、最後の別れ際も顔を見ることができず、今でも大変残念がっており心残りだと言っています。（甲 C32 第 1 号証 p.7）

### 【地域の間人間関係を喪失したという被害（損害）】

地域の人々との関係は、避難することで疎遠になる。一人の個人がもつ人間関係は、家族・親族や親友のような濃密な人間関係だけではなく、軽い友人や知人、隣人のような濃密とは言えないような人間関係によっても構成されている。往々にして後者は軽視されがちであるが、社会学者マーク・グラノヴェッターが指摘したように、実はそのようなルースな絆は重要な意味をもちうる<sup>4</sup>。それが失われたということが結果する被害（損害）は、見落とされがちであるが、無視しうるものではない。

・・・（長女が生まれた）この頃から、私たち家族は実家から車で10分くらいの借家に引っ越して父母とは別居しました。その家は古かったですが、6部屋くらいあり広々していて、畑もありました。・・・地域の集まりについても、川の堤防の草刈りや神社のお祭りには私はよく参加していました。地域の人も多くが参加していました。こういった場につながった地域の人とは助け合いが多く、よく野菜をもらったりしていました。地域の方は高齢の方が多く、何かと

---

<sup>4</sup> Mark S. Granovetter, 1973, "The Strength of Weak Ties", American Journal of Sociology, Vol.78, No.6(May, 1973), pp.1360-1380.

面倒を見てもらっていました。近所のおばあちゃんに子らをお風呂入れてもらうのを手伝ってもらうようなこともありました。ある時は、上の子が足にまないたを落としたことがありましたが、近所の人が病院に連れてくれていったこともありました。(甲 C39 第 1 号証 pp.4-5)

### 3-8. 避難に伴う二次被害 (損害)

避難という現象は、避難しなければ存在しない二次的被害 (損害) を生み出した。以下、説明する。

#### 【避難したことに対する自責に苦しむという被害 (損害)】

避難した人々の中には、避難する際に、または避難した後に罪悪感に苛まれた人がすくなくなかった。具体的には、親類や職責を放り出したことへの罪悪感、あるは福島を離れることさえなければ迷惑をかけなかったことへの自責の念である。子どもの被曝を避けるために、やむを得ず避難せざるをえなかった。しかしそれは福島を捨てることだった。そのことに対する罪悪感である。

福島第一原発事故がなければ、このような感情に苛まれて苦しむことはなかったことを改めて指摘しておく。

私たちは、・・・いま長女のためにできる最善のことをしたつもりでした。でも、それは福島の人を捨てて来た、整体院のお客さんを捨てて来た、故郷を捨てて来たことになるのです。罪悪感で一杯でした。・・・心の中はとても複雑で、その気持ちは今も続いています。(甲 C9 第 1 号証 p.14)

母には、父の残した家と墓を守らなければならないという強烈な使命感が今なお残っており「できることならもどりたい。」といつも言っています。(甲 C27 第 1 号証 p.7)

事故がなく福島に住み続けられていれば、・・・両親に余計な心配はかけずに済んだうえに、身内（妻の妹）の見舞いにもすぐに行けたでしょうから、妻は大変やるせない思いを抱いていました。(甲 C32 第 1 号証 p.14)

**【避難先における偏見を避けるために警戒しなければならないという精神的負担と苦痛という被害（損害）】**

避難者は避難先で好奇の目で見られたり、偏見を持たれたりした。そういう経験をすると、他人や周囲の言に敏感になり、交流することに躊躇するようになった

た。その結果、人間関係が限定されることになり、なぜこのような生活をしなければならぬのかと苦痛に感じた。

私は、特に避難当初、福島県からの避難者ということで好奇の目で見られたり、長女がいわれのない偏見を持たれることを気にして、一緒に避難生活を送っている自身の親族(次女親子、四女)以外と、あまり交流が持てなくなっていました。(甲 C38 第 1 号証 p.7)

近所の方にも、福島から避難していると話さざるを得ず、そうすると放射線で被曝しているなど、あまり気持ちのいいことは言われず、原発事故がなければ、こんな生活をする事もなかった、なんでこんな目に遭わないといけないのかとも思いも日に日に大きくなり、心身ともに限界がきつつありました。(甲 C24 第 1 号証 p.5)

### 3-9. 人生計画が狂わされたという被害 (損害)

福島第一原発事故にともなう避難は、人々が持っていた人生の計画を狂わせた。

**【自然環境を普通に享受する暮らしができなくなったという被害（損害）】**

原発事故以前には、畑や庭をつくったり、井戸水を汲んだり、川や山に入って子どもを遊ばせたりする生活が、当たり前のように繰り広げられていた。原発事故は、生活のそのような楽しみを奪った。放射性物質に汚染された環境は、身の危険を感じるほどよそよそしい対象と感じてしまうようになった。

・・・家の周りは 0.2 から 0.3 マイクロシーベルト/h と高い線量であることがわかりました。工場や自宅の雨樋周辺、水たまりなどは、5 マイクロシーベルト/h を超えることもあり、けたたましく鳴り続けました。線量計がピーピーと鳴る音がとても怖かったです。（甲 C33 第 1 号証 pp.5-6）

・・・現在、私の自宅ではきのこ類、たけのこ、山菜の摂取や出荷が禁止されています。・・・井戸水も使用できません。この様な状況で、私たち家族は、今でも事故前の生活に戻ることができたとは到底感じていません。（甲 C30 第 2 号証 p.6）

**【子どもが自分の将来を自ら狭めることを目の当たりにするという苦痛】**

子どもが「親に迷惑をかけたくない」と経済的に負担の少ない道を選んでいくが、親はそれを知ってもどうにもしてやれない。原発避難は、親として最もつらい気持ちを味わわされる状況を生んだ。

・・・私たち一家が広野町といわき市に戻れる見通しが見つからない23年8月、長女は「いつまでもこんなこと(=休学)をしてても仕方ないし、経済的にもたいていへんだから、私、大学を退学して働く。」と言い出しました。「放射能被害か大学か」の選択を迫られている中では、長女は「大学」をとることができなかつたのです。(甲 C7 第 1 号証 p.8)

【これまでどおりの生活ができなくなってしまった絶望感に苛まれる被害(損害)】

原発事故に伴う避難は、愛着のある地元これまでと同じように住み続けていくという希望を打ち砕いた。思い描いていた楽しく穏やかな老後は、原発事故によって実現不可能となった。これまでの普通の生活を失うことがどれほどの苦痛を引き起こすか、それを「手や足を失う」という表現で綴る避難者もいる。

長男、二男は地元いわき市の小学校、幼稚園に通い、同居する両親に育児のサ

ポートも受けながら、順風満帆に家族で生活をしていました。当然、子供たちは、いわき市の地元で友人がたくさんおり、子らだけではなく、子らを通じて、両親も仕事だけではない地域の人々の繋がりをもつことができていました。そのような生活の基盤であり、愛着のある地元でこれからも住んでいけることに何らの疑念も持っていませんでした。私は、仕事や地域のつながりを父から少しずつ引き継いできたのと同様に、自分の子どもにも、引き継がせたいとの夢を抱きながら、懸命に仕事をしておりました。(甲 C32 第 1 号証 p.4)

私たち夫婦は、老後を、風光明媚な東北地方で、近隣の温泉地等をめぐりながら、楽しく穏やかに過ごしたいというささやかな夢を抱いていたのに・・・生活が絶たれ、また、老後のために蓄えてあった預貯金も、長期化する避難生活によって取り崩すなど、本件事故により、私たちが抱いていた老後の人生設計は、全て打ち砕かれてしまいました。(甲 C20 第 1 号証 p.6)

・・・安住の地を失う、生活の根拠を失うことが人生にとってどれほど大きいことかを理解してほしいと思います。目には見えないものですが、事故や病気で手や足を失うことと同じくらい大きなことなのです。私たちは、経験して初めて知りました。(甲 C10 第 1 号証 p.14)



次の陳述は、避難生活の過酷さを集約している。避難が望んだことではなかったこと、知らない土地での不安や恐怖、頼れる人のいない中での生活の心細さ、ストレスによる身体の不調、病院にもいけないほどの経済的困窮、そして社会的孤立等々—原発事故が避難した人々に強いた物質的・精神的被害は甚大なものだったのである。

私たちは自分の意思で避難を決断はしましたが、それは決して望んでいたことではありません。・・・避難をしてからも、つらくて大変で悲しいことばかりでした。知らない土地での不安や恐怖。周りは頼れる人もいない。ストレスで頭の毛は抜けて外へも出られない。お金もなくて病院にも行けない。食べ物を口にすることも不安。そのような日々を今まで送ってきました。また、報道で避難者へのいじめ問題が大きく取り上げられていますが、私も、名古屋で知り合った人にどこの出身かを聞かれても、正直に答えることに躊躇してしまいます。そのため、なかなか人と打ち解けた話をすることができず、友達も作りにくいです。(甲 C15 第 1 号証 p.10)

#### 4. おわりに

前回の意見書においても述べたことであるが、意見書陳述者は原理的に原子力の平和利用に反対する者ではない。原子力の平和利用のために研究を進め、事業を展開することは、わが国だけではなく、グローバル社会全体にとっても意義のあることだと考えている。

しかし、原子力利用には大きなリスクがともなう。つまり原子力発電所にひとたび重大な事故が起これば、最悪の場合、当該地域はもとより広汎な周辺地域に深刻な災禍を人の一生を越える長期間にわたって引き起こすというリスクである。

したがって、原子力使用に付随して起こる事故は、その事故がどれだけ深刻な事故かについての科学的・客観的判断に基づき、通常事故とは異なる次元において捉えられなければならない。今回の福島第一原発事故のように、数十年にわたって帰還できない地域住民が存在するほど深刻な事故を、交通事故のようなすでに賠償と慰謝料の算出方式がほぼ確立されている通常事故の延長線上において捉えることはできない。原発事故に関する損害賠償と慰謝料の算出に関しては、被害者の尊厳と人権が最大限保護されるように、独自の方式が創り出されるべきである。

わが国は国策として原子力の平和利用を進めてきた。現在もその方針に変わりはない。原子力を利用するのであれば、極めて低頻度であっても想定外の事故が起こりうるという認識の下に、事故がもたらす被害を補償する制度を社会に整備しておかなければならない。起こりうる事故に対して事前に補償制度を整備することは、国民の生命と財産を守る政府が自国民に対して当然果たすべき義務である。

一審判決で認められた避難者が被った被害は、その期間があまりに短く、またその内容はあまりに狭い。このような司法判断がこれから先の未来における原発事故に伴う損害賠償と慰謝料算出の基準となれば、今回の裁判の当事者だけでなく、全国の原発立地地域で生活する地域住民のなかに政府に対する失望と不信を生むだろう。さらに、原発立地地域だけでなく、国民全体のなかに、原発に賛成する者と原発に反対する者の間の分断を深める方向に作用するだろう。

福島第一原発事故の社会的処理は、国際世論の注視のもとで行われている。諸外国は、深刻さの度合いが最高レベルの原発事故に対して、日本政府がどのような政治理念に立脚し、どのように法的に処理するかを注視している。誇張ではなく、原子力の平和利用という人類史的な挑戦に必然的に付随するコスト（原発事故）をどう処理すべきかに関して、他の諸国からモデルとされるよう

な創造性をわが国の裁判所が生み出せるかどうかがこの裁判で問われていると考える。

## 陳述書の内容分類・引用リスト

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
1-2 (甲C1第1 号証)	4	希望	私の両親は、将来、私が同社の跡を継ぐことを希望していましたし、私自身も、跡を継ぎ事業を継続していきたいと思っていました。
	7	避難時の恐怖	私が妊娠していたこともあり、私たちがまず心配していたのは、胎児への影響でした。また、長女もまだ小学生だったため、影響を心配しました。
	10	分離	しかし、このとき(平成23年3月12日：引用者挿入)は、一時的に念のため少しでも遠くに行く、という感覚でした。私は、会社の従業員がみな被災していたため、出勤できる者も限られていましたし、業務再開のため、やることが山積していましたから、すぐに仕事へ戻らなくてははいけませんでした。夫も、店の片付けをしなければいけない状況でした。そのため、長女だけ白河の両親へ預け、夫と私は、13日の夜には、白河から須賀川へ戻りました
	13	喪失	長女はもちろん転校を望んでいませんでしたし、友達と離れたくないと訴えていました。
	13-14	経済的な損害	私たちは、福島に、住宅を建てるための土地をローンで購入していました。しかし、その土地の上に住居を建てる目途がつかないまま、ローンの支払いを続けることができず、結局、土地を600万円で売却し、ローンを完済しました。評価額は2000万円を超える土地だったのですが、ゆっくりと買主を探すこともできなかったため、安く売却せざるを得ませんでした。さらに、夫はハローワークへ通い、収入を確保するため、平成23年5月に、とにかく就職しました。飲食店のアルバイトでした。しかし、避難前と比べると、世帯収入が半分以下になってしまいました。どうかしなければいけないと感じましたが、夫もすぐにはよい仕事が見つかりませんし、私は妊娠中でしたので、当面はどうにもなりませんでした。
	14	分離	平成23年10月11日、私は、一宮で、次女を出産しました。慣れない一宮での出産は、とても大変でした。また、福島にいれば双方の両親が近くに来てくれて、たくさんのお手伝ってくれていたはずですが、一宮ではそういうわけにもいかないので、夫が産前産後のいろいろなことをやらざるを得ませんでした。そのため、夫は、一宮のハローワークで見つけた仕事を、平成23年7月末で、いったん辞めました。
	14	健康	出産前後、私たちは、食事はかなり気を付けました。産地を細かく調べたり、放射能検査しているか問い合わせたりしました。一つ一つ、大丈夫なものかそうでないものを判断しました。何とせよ子供たちを守らなければいけない、と思いました。
	14	健康	でも、こんなことをしているうちに、いつまでこんなことが続けばいいのだろうか、精神的にまいってしまいました。私は、情緒が不安定になり、涙が出たり、頑張らないと思ったりの繰り返しで、疲れてしまいました。そのためか、私は、産後の回復がよくありません。しばらくの間、不正出血に悩んでいました。
16	分離	夫と私の両親は、今も福島に残っています。そこで、年に2回程度一時帰宅をしています。	

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	16-17	健康	私たちは、一宮に避難した後、定期的に、甲状腺検査を受けています。夫、私、次女には特に変わった結果は見られないのですが、長女は、検査のたびに、嚢胞の値が増えているそうです。短期間で嚢胞の値が増えることは珍しいことだ、と言われました。・・・もちろん、嚢胞が増えているからといって、異常かどうかはわからないそうです。ましてや、放射線が影響しているかどうか、まったくわかりません。でも、長女が事故直後に白河市で過ごしていたことと、長女の甲状腺検査の値が珍しい変化を示していることは、事実です。親としては、この間に何か関係があるのではないか、また、今後、長女の体に何か悪いことが起きないのだろうか、と、とても不安になります。
	17	分離	夫と私の両親は、今でも福島に暮らしています。避難前は、日常的に交流がありましたが、今は年に2回程度しか会えません。福島にいたときは、双方の両親は子供の学校行事にも参加してくれていましたが、愛知県に避難した後は、これもできません。
	17	喪失	夫も私も、福島にたくさんの友人がいました。しかし、愛知県に避難することで、多くの友人とのつきあいは途切れてしまいました。
	18	喪失	長女は、福島の小学校でたくさんの友達に囲まれ、楽しい学校生活を送っていました。しかし、愛知県に避難することによって転校を余儀なくされ、友達とのつきあいが途切れてしまいました。
	16	経済的な損害	避難前、私たちは、両親から野菜や穀物を頻繁にもらっていました。しかし、避難後は、これらをもらうことができなくなり、食費が上がりました。
2-2 (甲C2第1号証)	2	希望	それまでは夫の仕事の関係で転職をすることが多かったのですが、夫の定年退職を機に空気の良い自然の中で生活をしようと考え、日本中を探して浪江町の土地を見つけました。そして業者と協力をしてログハウスを製作し、自分たちで重機を運転して整地をし、時間をかけて多数の樹木を植えるなどして少しずつ理想の住居を作り上げていきました。
	2	希望	浪江町に住み始めてからは、私も夫も定職には就いておらず、現金収入は年金だけでしたが、自分たちで山林の開墾・手入れをし、農作業を行い、自給自足の生活を送っていました。また、近隣の住民の方ともとても仲良くさせていただき、食べ物をいただいたりすることもよくありました。ですので、金銭的に不自由したことはありません。
	2	喪失	ログハウスの周囲には山林が広がり、敷地内には川が流れており、私の子どもや孫達もログハウスに遊びに来ることをとても楽しみにしてくれました。この浪江町の土地があったからこそ、私たちと孫は強く結びつき人生の重要な時間を共有できたと言っても過言ではありません。
	3	健康	私と夫は、3月13日以降は大阪に避難していたのです。原発事故の詳細が分からず、また放射能についての知識もなかったため、大阪にいても原発の影響があるのではないかと不安になり、恐怖のために何日も眠られず食事もとれない状態が続きました。
	3-4	健康	私たちとしては、この愛西市での生活は一時的なものと考えていましたので、それから時間を作っては定住地となる土地を探し回りました。私も夫も若くないため、慣れない土地での生活に加えて、遠くまで土地を見に行く生活は肉体的にも過酷なものでした。その後、夫は体調を崩し、肝臓癌を患って平成25年11月13日に亡くなりましたが、私は避難生活中の肉体的精神的負担が大きな影響を与えたことは間違いないと思っています。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	4	健康	特に夫が亡くなった後は、たった一人で生活することはとても不安で、その気持ちは今も変わりません。そのため、私は夫の死後にストレスで鬱状態になり、大阪に転居をした後、一時入院生活を送らなければならないほどでした。
	4	喪失	浪江町では私たち夫婦の理想とする田舎の生活を手に入れるため、何年もかけて樹木を植え、庭の手入れをしてきました。そして、ようやく自給自足の生活を送ることが出来るようになりましたし、近隣の方とも良好な関係を築き、毎日充実した生活を送れるようになっていました。
	4	健康	せつかく私たちの故郷ができあがったのに、慣れない土地で新しい人間関係を築くことはとても大変です。原発事故の長時間の避難生活と人間関係のストレスにより夫は体調を崩しましたし、私も難聴になってしまいました。
	4	思い出の喪失	本当は、私一人でも、夫の思い出を感じながら浪江町で生活できるならば幸せなんだろうと思いますが、それも適いません。
	5	健康	私と夫は、避難後の肉体的精神的負担だけでなく、原発から漏れ出た放射能により被曝をしてしまい、健康に影響が出るのではないかと不安を抱えていました。
	5	希望	浪江町の土地とログハウスは、私と夫の余生を送る理想の土地でした。3500坪の土地に、ログハウス、ツリーハウスを造り、近所の人たちが楽しみに見学に来てくれるような様々な花の園庭にお金を全てつぎ込んで、今後は年金だけで十分に生活していけると将来を楽しみにしていました。また、離れて暮らす孫たちが遊びに来ることがなによりも幸せでした。ところが、原発事故により、夫婦で作りに上げてきた大切な空間は奪われ、孫達との思い出の場所も失うことになったばかりか、孫達からも故郷を奪う結果となってしまいました。
3-2 (甲C3第1号証)	4	避難時の恐怖	病院着くと、3つある入り口の2つが閉鎖され、正面玄関には線量を測定するメーターを持った職員が防護服を着て立っていました。放射線量を測定すると、私の靴が異常に高い数値を示し、このままでは建物に入れられないと言われ靴を洗淨し院内へ入ることができました。その時、病院の裏にある警察署と消防署では敷地に入る際に、車を一台ずつ高圧洗淨しており、放射能の強い影響が出ているのだと恐怖心を感じました。
	5	自責	病院に患者さんを残して避難をすることにすごく罪悪感を感じていましたが、唯一の情報源であるテレビ等の報道を見れば見るほど不安になってきました。
	6	避難時の恐怖	しかし、着の身着のまま家を出てきたので、3月24日にいったん南相馬市の自宅に戻り、子ども達の学用品や着替えを車に積み込みました。ところが、ガソリンがないため、給油をするために結局三日間を費やし自宅に留まらなければなりませんでした。この三日間は、寒い中なのに暖房はなく、被ばくするのではないかと、原発がまた爆発するのではないかとという恐怖があり、子どもたちは外に出さないようにし、私と夫も必要がない限りは屋内にいるようにしていました。常に緊張感と恐怖心が続いている状態で、夜になってもゆっくりと眠ることは出来ませんでした。
	7	分離	夫も、5月ころから仕事のために福島へ一人で戻っていました。
	7	喪失	(夫は)長年勤めていた職場をやめて愛知県内で仕事を探すことを余儀なくされました。仕事で今まで積み上げてきたキャリアや人間関係を絶たざるを得ない状況はとても辛いものであったと思います。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	7	社会的世界	夫が名古屋に戻り幸い、愛知県内で仕事を見つけることは出来たのですが、以前より収入が少なくなりましたし、道路も分からず、仕事の段取りも福島にいたときは異なるため、とても苦勞をしていました。
	7	周囲への警戒心	子ども達は避難先で学校に通うようになりましたが、長男は私たちに心配をかけたくないと考えていたようで学校のクラスメートと馴染めず苦しい思いをしていることを伝えられずにいたことを最近、長男より聞きました。・・・長男は学校では、原発に関連して同級生から心ない言葉を言われたり、インターネットに書き込みをされるなどして心を痛めている様子でした。
	7	分離	長女も地震の恐怖がぬぐえず、「いつ帰れるのか」「友達や祖父母に会いたい」と毎日繰り返す毎日でした。
	8	貧困	子どもながらにお金のことを心配して必要な学用品は自分の小遣いで買おうとしたりするなど、色々和我慢を強いられました。南相馬市で生活していた時のようなのびのびした面は失われ、無理をしている様子が見て取れました。
	8	健康	名古屋市で生活をしてからは近所づきあいもあまりなくなり、毎日引きこもるような生活をしていましたため体重が約16キロ増大し腰痛に悩まされていました。
	8	喪失	以前は一戸建ての生活をしており、団地での生活は初めてでとまどうことばかりで、先が見えない不安から夫と夫婦喧嘩が絶えない状態でした。
	8	思い出の喪失	南相馬市へは年に2回くらい一時帰宅していましたが、元の家は住むことができない状態になっており、平成27年夏に久しぶりに家に入ると廃墟のように荒れ果てていて、とても怖かったと覚えています。
	8-9	健康	私と家族を含め、原発事故後は常に放射能の影響による病気への不安がつきまといました。愛知県で生活していた時はもちろんのこと、福島県に戻った現在はなおさら不安な思いを強めています。子ども達は、平成23年12月に福島医大で甲状腺検査をしたのですが二人とも5 mmから20の嚢胞が見つかりました。
	9	喪失	愛知県という慣れない土地で、周囲に親戚や知り合いもおらず、私たち夫婦も子ども達もとても寂しい思いをしました。
	10	健康	私たち家族は南相馬市で生活するようにはなりませんが、放射能汚染の不安が常につきまといます。特に食材選びが心配で、本当だったら他県の食材を購入したいのですが、経済的に苦しく、気にしすぎては生きていけないので、やむを得ず福島県内の物も口にしています。
	11	周囲への警戒心	避難生活をしていると、初対面の人にもお金をたくさんもらっているかのように言われることもあります。実際には、東電からの賠償は私たちの損害を補うには到底足りず、収入の減少や転居等で費用がかさんでいるのに、そのような誤解をされることがとてもイヤです。このように私たち家族を含めた避難をしている人は、不慣れた環境の中で周囲の誤解を受けつつ毎日つらい生活を強いられているのに原発事故は収束したかのような政府の対応や世間の雰囲気がとても怖いのです。
	10	社会的世界	私たちと同じように除染がされないままの土地はたくさんあるはずですので、結局、除染作業によっても、地域の放射線汚染は全く改善されていないのではないかと不安になります。



原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	10	社会的世界	南相馬市に戻りはしたものの、以前に住んでいた自宅は、震災の影響と長期間人が住んでいなかったためにそのままでは住むことが出来ない状態であり、新たに家を建て直しました。建て替えにあたっては、土壌の放射能による汚染が心配なため80cm土盛りをしました。ところが、人手不足のため施工期間は1年かかってしまい、その間は仮設住宅での生活を強いられ、家族四人で生活するにはとても狭く、とても不自由で息の詰まる思いをしました。また、震災後は帰還困難地域の方達が南相馬市に移り住む傾向にあり、建築費用も高騰して、私たちも当初予定していた予算を300万円超えてしまいました。
4 (甲C4第1号証)	3	分離	私は急いで家に戻り、前夫と避難について話し合いました。前夫は、放射線が危険なことは多分分かっていましたが、「死ぬならこの家で死ぬ。一緒に中国には行かない。」と強く言うので、私はやむなくひとりで避難することを決め、すぐに家を出ました。
	4	避難時の恐怖	飛行機に乗る前には放射線の検査がありました。検査をしていた人は、ごついマスクをつけて防護服を着ていました。私は、その姿をみて、自分がそれほど放射線を浴びてしまったのかと思い、非常に怖い思いをしました。
	5	分離	前夫とは原発事故以来、ずっと別居していましたが、その前夫が病気になる、老人ホームに入ることになりました。このとき、私が籍に残ったままだと私が前夫の面倒を見なければならなくなるというので、私にそのような負担をかけまいと前夫の方から離婚の話を切り出してきたのです。そのような経緯があって、平成25年4月、私は前夫と離婚しました。この離婚については、原発事故があってから離れて暮らすようになった私のことを、前夫なりに気づかった結果だと思います。もし原発事故がなかったら、前夫と離れて暮らすこともありませんでしたし、離婚に至ることもなかったと思います。
	5-6	健康	平成28年初めの頃、歩いていてめまいがすることがありました。その後、血圧が高いことが分かり、7月24日に気になって検査を受けたところ、「甲状腺右葉の低エコー腫瘍に微小石灰化を多数認め、malignancy (悪性) が否定できない」という結果が出ました。・・・今後、甲状腺がんなどの健康被害が出ないかと非常に不安になっています。
	6	社会的世界	平成23年6月4日に愛知県に来てからの生活は、最初困ったことがたくさんありました。・・・特に夏場の蒸し暑さには本当に参ってしまいました。・・・身近に知っている人がおらず、スーパーなどもどこにあるか全然分からなかったため、人生で一番困ったと思いました。それに川俣町に比べて物価が高いと思います。
	7	周囲への警戒心	私の車に付いている福島ナンバーを嫌がる人がいて、非常に嫌な思いをしました。
	7	社会的世界	また、川俣町とは違い、こちらの町内会活動は非常に厳しいように思います。町内会費を支払い、2ヶ月に1回は必ず近所の草取りをするほか、様々なことについて協力を求められました。協力しなければ皆さんに迷惑をかけてしまうという思いでやっていたのですが、心理的に負担だったことは否めません。
	7	喪失	川俣町にいたときに勤めていた会社は、休みの日にみんなで温泉に遊びに行くなど、仲が良かったのですが、こちらに来てからはそのようなことが全然なく、厳しい職場環境だと感じています。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
5-1 (甲C5第1 号証)	5	避難時の恐怖	私は、(愛知県に在住だが、援助しに来た；引用者挿入)母を新潟県まで車で迎えに行き、その後、私達と母は、福島市の自宅に戻り、放射線の影響におびえつつも、自宅で一泊しました。この際も、私たち夫婦は、子どもたちを可能な限り放射性物質に晒さないようにするために、屋外に出ることを禁止し、また、自宅屋内に放射性物質が入り込まないように、窓及び戸を締め切るなど、不安な気持ちのまま、その時点でなしうと思われる対策をとっていました。
	6	分離	子どもたちを私の実家に預ければ、家族は離れ離れで暮らすこととなります。私としても、家族が離ればなれになることは、できれば避けたいと思いました。しかし、子どもたちを放射線から守るためには、迷ってははいられないと思いました。・・・一生心するか、一年苦しむかの選択だと思いましたので、私は、一年苦しむ方を選びました。妻は、私よりも強く、子どもたちと離れて暮らすべきではない、と考えていました。そのため、子どもたちだけを愛知県に避難させることには、私よりも大きな迷いがあったようです。しかし、妻も、最終的には、子どもたちを愛知県に避難させることに同意してくれました。
	6	分離	できることなら、私たち夫婦も、子どもたちと一緒に避難したいと思いました。でも、私たちには、小学校教諭という責任ある仕事がありました。小学校の生徒たちを残し、自分たちだけ、自分の子どもたちと一緒に避難することはできませんでした。
	7	避難時の恐怖	子どもたちは、途中で寝たりもしましたが、とにかく「はやく阿久比に着きたい」「まだ着かないの」と口にしていました。
	8	喪失	子どもたちにも、長男は幼稚園の生活に慣れており、4月からの年長の生活をとても楽しみにしていたにも関わらず、突如、住み慣れた福島市から愛知県知多郡阿久比町に引っ越すことになり、・・・。
	8	分離	また、長女は、当時まだたったの2歳でした。自分ひとりではできることは非常に限られた状態であり、とりわけ母親が恋しい時期だったのに、突然、事情もわからず、両親のいない状況での生活に放り込まれました。
	8	経済的な損害	子どもたちの精神的負担を少しでも減らせたらと思い、私たち夫婦は、まだ幼い子どもたちに会うために、二重生活が始まってから、手分けして、2人合わせて平均して毎月6回程度、福島市と愛知県知多郡阿久比町を往復しました。もちろん、このためには多額の費用もかかりましたし、体にも負担がありましたが、子どもたちのことを考えると、この負担を惜しんではいられませんでした。
	9	社会的世界	妻は、職場の小学校に行っている間は気が張っていたのでなんとかなりましたが、帰ってくると無気力になってしまい、何もできない状態だと話していました。また、妻は、常々、自分としては本当は、家族と一緒に暮らすことを優先したかった、とも言っていました。
	10	自責	周りの友人知人たちは、普通に子どもと一緒に福島で暮らしているのに、どうしてうちができないんだと苦しかった。妻は週末、愛知に行っても、私の実家で自分の居場所や役割がないと感じていたようです。
	10	喪失	今までの福島での生活がなくなってしまうようだった。自分がしてあげたいこともできなかった。あくまで私(夫；引用者挿入)の意志で自分の子を見てもらっているわけではなかったもので、いろいろ言われるのもつらかったし、すぐにでも連れて帰りたかった。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	10	喪失	このように、私と妻の考えは、何を一番に優先させるかで、一致しませんでした。二人とも、子どもたちの幸せを大切にしていました。でも、私はそのためには、まず放射線から避難させることを優先したいと思いましたし、妻は家族が一緒にいることを優先させたいと思っていました。妻と意見が合わなかったのは、私にとって、一番つらいことでした。妻も苦しんでいました。
	10-11	希望	私たち夫婦は、福島に一生住むつもりで家を建て、二人ともがきちんと安定した仕事につき、やりがいを感じて楽しみながらがんばって生きていました。そのため、私たち夫婦としては、できることなら、もう一度福島市で家族揃って生活したいと考えていました。特に妻は、福島で生まれ育ち、両親も福島にいますので、福島に戻って家族揃って暮らすことを強く求めています。
	11	社会的世界	福島市の除染は一向に進みませんでした。また、原発事故以降の福島の行政(県、市、教育委員会、学校)の対応は、正直、信じられませんでした。県や市が言っていることも信じられませんでしたし、それ以上に、教育委員会や学校などが、誰も子どもをたちを守ろうとしないように感じられて、信じられない気持ちでした。とはいえ、私も組織に入ると、結局何も言えなくなってしまいました。「がんばろう」「きずな」などとスローガンをはりあげ、具体的な根拠もなく「安心・安全」だと思い込ませようとする雰囲気が耐えられませんでした。
	11	自責	そんな雰囲気の中で、心から「がんばろう」「大丈夫」と言えない自分は「福島の教員としては失格だ」と思いました。
	12	健康	子どもは、決まったぬいぐるみを離さなくなりました。一緒に暮らすようになった今でも、そばにないと不安定になります。私たちが愛知に引っ越して来てからも、日曜日の夕方になると「今日は福島に帰っちゃうの?」と不安そうに聞いてきたことがありました。今も時折、手紙を書くことがありますが、その中には「ずっといっしょにしようね」という言葉が多く使われています。
	17	健康	平成23年3月11日直後には、これからどうなるか分からない中、特に子どもたちを放射線の影響から守りたい(触れさせたくない、吸わせたくない)の一心で、先の見えない恐怖感・不安感が募り、家族を守るため必死に対処策を考え、精神的に疲れ果てました。
	17	自責	また・・・、いつ勤務先から呼び出しがあるかも分からず、勤務先から呼び出しがあれば、妻や子どもたちを置いて教員として職責を全うすべきとも思っていましたので、「夫として、父として家族を守ること」と「一教員として仕事を全うする職務」との間で葛藤がありました。
	17	分離	平成23年3月から平成24年3月まで約1年もの間、子どもたちとの別居を余儀なくされました。事故が起きるまでの私は、家族と一緒に暮らしていくことを当たり前のように考えていました。しかし、この事故によって、子どもたちを放射線の影響から守るため、1年間の間、子どもたちと離れて暮らさざるを得ませんでした。
	18	経済的な損害	この事故が起きるまで、私たち家族は、一生住むつもりでローンを組んで自宅を建築し、教員という安定した仕事につき、仕事にやりがいを感じて楽しみながらがんばって生活していました。しかし、この事故により、人生の方向性は根底から崩されてしまいました。今では私は、福島県にある自宅の住宅ローン約672万円の返済だけでなく、愛知県の実家のリフォーム代のローン1290万1636円も負っており、家計がひっ迫しています。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	18-19	希望	私の希望のとおり、愛知県に引っ越すことになりました。しかし、結果として、妻は小さい頃から夢見てきた教員を退職せざるをえなくなりました。そのうえ妻は、今まで実父母の援助のもとフルタイムで仕事をしていたのに、愛知県に引っ越した後は、舅姑のもと、慣れない場所で専業主婦(現在は兼業主婦)をすることとなりました。妻にとっては、場所の点でも、仕事の有無の点でも、実父母と離れる点でも、舅姑との関係の点でも、急過ぎる生活の変化であり、彼女は今も、戸惑いや憤りに苦しんでいます。そして、このような妻の様子を見て、私も苦しんでいます。
6-1 (甲C6第1号証)	3	自然的世界	妻の実家は浪江町にあり、妻の父、妹2人と弟、祖母が浪江町に住んでいました。妻の実家で作った米や野菜を送ってもらっていたので、農薬の心配をせず安心して食べていました。
	3	喪失	妻は、高校卒業までと就職後半年浪江に住んでおり、結婚後も2、3か月に1回、子どもを連れて2週間くらい浪江に帰っていました。
	3	喪失	福島県内には私達夫婦の親戚や友人がたくさんいました。私は会社の先輩や同僚、後輩とゴルフや麻雀、飲み会等に行くこともよくありましたし、バスケットボールやフットサルのサークルに入って楽しんでいました。妻の友人も多くいました。子どものいる親戚や友人も多かったので、長女はいろいろな世代の子どもと一緒に遊んでもらっていました。
	3	希望	本件原発事故がなければ、私達は、親や親戚、友人らが多くいる福島市で生涯暮らしていくつもりでいました。
	5	健康	妻の家族らと再会した際、妻の上の妹の彼氏が長女をだっこしてくれましたが、彼が浪江町から避難したままの服を着ていたため、服に放射性物質が付いているかもしれない、長女に付着したかもしれないと心配になり、自宅に帰って風呂の残り水で長女を洗い、長女が着ていた衣服を捨てました。
	5	喪失	私達夫婦は避難したいと思い、13日の夜、私の父に、妻子だけ名古屋に避難させようと思う、と話しましたが、父が、政府が大丈夫と言っているから大丈夫、避難指示が出ていないから大丈夫、と言うため、すぐには避難できませんでした。私が避難の話をしたため、妻の妹は、私達は汚染しているということなの?と言い、気まずい様子になりました。
	7	分離	避難のため私は仕事を4日間欠勤しましたが、欠勤を続けることができず、妻と長女をいとこの家に預けたまま、私だけ3月20日に福島市に戻りました。・・・妻と長女は4月2日まで川崎のいとこの家に滞在しました。妻は、他人の家に長期間滞在することにとっても気を遣ったようでした。避難が続くにつれ、いとこの家族が、いつまでいるの、という感じになり、つらい思いもしたようです。
	7	喪失	・・・妻と長女は名古屋市の私の妹の家に避難することにしました。いとこの妻から「避難するということは、ここは危険ってことなの」というようなことを言われ、気まずくなりました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	7	社会的世界	名古屋の生活に不便はなかったようですが、長女は9ヶ月でおんぶや抱っこをせがむ時期だったので、妻が一人で長女の子育てをするのは大変だったようでした。長女も、以前は夜泣きをしなかったのに避難中夜泣きをするようになりました。妹の子どもには父親も母親もいるのに、長女には私がそばにいないので寂しがったり不安がったりしていました。
	7	喪失	私は3月21日から仕事に行きました。会社は避難したことについて何も言いませんでしたが、同僚には「よく戻ってこれたね」と嫌みを言われました。
	7-8	経済的な損害	この4日間の欠勤のため、平成23年3月の給料が約9万6000円減額されました。また、平成23年8月の賞与も約11万円減額されました。
	8	周囲への警戒心	群馬への異動は社内の異動でしたので、「『福島から来た人』イコール『福島の仕事をほったらかしてきた人』」というように見られて、職場で打ち解けられませんでした。
	9	自然的世界	伊勢崎で0.09マイクロシーベルト/hぐらいで、低くはありませんでした。自宅の前の駐車場のくぼみを工事したら線量が高くなったので、くぼみに溜まっていた放射性物質が舞い散ったのだと思いました。群馬でもほうれん草やきのこなどの出荷制限があったり、わかさぎなどの川魚から放射性物質が検出されたりしました。放射線に関する様々な情報や噂があり、安心して暮らすことができませんでした。
	9	健康	私と妻は、長女への放射線の影響を心配し、長女を屋外で遊ばせないようにし、食べ物を通信販売で購入し、スーパーはほとんど使わないようにしました。産地偽装があるのではないか、福島産の野菜の売れ残りが紛れているのではないか、と不安に思いました。
	9-10	健康	換気をしないのはかえって良くないと聞いて、窓も開けていました。洗濯物も外に干していました。放射性物質を気にして洗濯物を外に干していない人もいました。母が福島で放射線被曝の講演会にたくさん行っていて、資料をたくさんくれたり、いろいろ教えられました。床は毎日ぞうきんがけをしなければいけない、クイックルワイパーはだめ、と聞いたたり、別の講演会では、拭いた物はその都度捨てなければいけないので、ぞうきんよりクイックルワイパーの方がいい、と聞いたりして、妻は毎日リビングダイニングを拭いていました。長女をぞうきんがけしていない部屋に入れないようにして、長女がその部屋に入ると怒って入らないようにしなければならず、長女にはかわいそうな思いをさせました。
	10	健康	私達の親が福島から来ると、親の服に放射性物質がついているのでは、と気になりました。特に妻は神経質になっていました。
	10	周囲への警戒心	群馬でも被曝を気にしている人もいて、車のナンバーが福島ナンバーだと車にいたずらされるという情報や噂もあり、それらの不安も感じながら生活をしていました。
	10	喪失	群馬には知り合いがいなかったので、妻は毎日子どもと二人きりで過ごしていました。
	11	喪失	長女は26年4月に幼稚園に入園するまで友達がいませんでした。福島にいれば友人や親戚の子が多くいて、いろいろな年代の子どもに遊んでもらえましたが、名古屋には遊んでくれる子どもがいなかったため、寂しがることが多く、親としても辛い思いをしました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	11	社会的世界	再就職先の仕事は福島での仕事と大きく違うことはありませんでしたが、地元の話についていけないことはよくありますし、地元の言葉が分からないこともたまにあります。
	11	周囲への警戒心	会社で「避難者」として見られるため、引け目や負い目を感じ、言いたいことを言えないことがあったり、気を遣うこともありました
	12	経済的な損害	妻は、子どもが少し大きくなれば子どもを実家の両親にみてもらってパートで仕事をするつもりでしたが、避難してからはパートに出ると子どもを保育所に預けなければいけないことや、時間も制限されることから、パートに出ることもできなくなっています。
	12	分離	以前は実家まで車で10分程度で行けましたが今は4時間以上かかり、交通費も往復4万円近くかかるようになりました。そのため、なかなか帰ることができなくなり、両親や親戚、友人に会えることが少なくなりました。
	13	喪失	平成27年4月に私の祖母が亡くなりました。祖母には次女を一度も会わせたことがなかったので、亡くなる前の3月28日から29日にかけて次女を連れて新幹線と在来線で福島市に行き、祖母に次女を会わせることができました。祖母は長女も可愛がってくれていましたが、被曝が心配なので長女は連れて行きませんでした。
	14	分離	次女は平成26年1月9日に生まれました。長女を出産した時は、妻は浪江町の実家で過ごし、妻の父や妹達にいろいろ協力してもらいましたが、今回は名古屋で出産したため、協力してもらうことができませんでした。私の母が名古屋に来てくれ、妻の入院中は長女の面倒を見てくれていましたが、妻が退院してからは妻が自分でやらなければいけませんでした。
	14	経済的な損害	長女が生まれたときにベビー用品を一通りそろえましたが、全て浪江町の妻の実家に保管していたため、次女が生まれたときにほとんどの物を再度購入しなければならず、少なくとも10万円はかかりました。出産費用も福島より15万円ほど高かったです。
	14	健康	私は伊勢崎市に転勤になるまで実家で食事をしており、福島産の食材を食べていました。水道水からヨウ素やセシウムが検出されましたが、それを飲むしか仕方がありませんでした。そのため、その間に内部被曝をしていないか不安です。
	14-15	健康	私は、伊勢崎市で避難をしている間、鼻血が出やすくなりました。耳鼻科を受診し、異常はないとのことでしたが、原発事故の前にはなかったことでした。名古屋に避難したら治ったようです。気にしすぎかもしれませんが、気になります。
	15	健康	福島県の被曝線量検査を受け、異常なしという結果でした。また、名古屋で耳鼻科や内科の検査を受け、異常なしと言われました。ただ、将来異常が発生するのではないかと心配しています。
	15	社会的世界	私や妻の被曝も気になりますが、特に長女の被曝が心配です。長女は昨年名大病院で甲状腺検査を受け、検査結果は異常なしとのことでしたが、名大病院で撮った写真を福島に送り福島で判定したと聞いたため、信じていないの分かりません。
	15	周囲への警戒心	次女のことでも心配です。次女は、私達夫婦が被曝した後に生まれました。将来次女に異常が発見されないか、または、将来被曝した者の子どもとして差別されないか、結婚に影響はないか、など心配です。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	15	分離	妻の祖母は80歳を過ぎていて……。……。長女を連れていくととても可愛がってくれましたが、原発事故後は私達が福島に子供を連れて行きたくないで、3回しか会わせることができないでいます。申し訳なく思いますし、あと何回会えるだろうと思います。
	16	喪失	福島に帰らないことについて、私達の親には、子どもにリスクを負わせたくない、と説明しています。一応理解はしてくれていますが、やはり、私達と親や親戚とは考え方が違い、辛いです。親は、遊びに来るくらいいいんじゃない、次はゆっくり休みをとってきたら、と言われる。ずっと地元に戻らないので親との間に壁ができたように思います。名古屋に自宅を購入したことについても、両親は名古屋に家を建てたら福島には帰らないということじゃないか、と、よくは思っていない。
	16-17	喪失	妻の父や妻の妹の夫は今も原発で働いているため、私達が被曝を気にしていることを言いにくい。妻の妹は浪江町からいわきに避難して家を建て、平成25年に出産しました。妻は次女を妊娠してからはいわきに行かないようにしていたため、妊娠や子ども二人を連れて行くのが大変なことを言い訳にして、妹に会いに行っていない。妻も妹から「来る気あるの」と言われるなど、つらい思いをしています。
	17	喪失	妻の父、妹、多くの親戚は震災当時浪江にいたため、ずっと賠償金をもらっています。私達も境遇は同じなのに、住民票が浪江にあっただけで全く違います。妻の妹夫婦はいわきに家を建て、高級車を買って、海外旅行にも行っているようです。そのことで妻の妹達に何か言うわけではありませんが、わだかまりのような気持ちはあります。
	17	喪失	私は福島市で生まれ育ったので、人脈や人間関係があり、勤務先でも先輩、同僚、後輩といい関係でしたが、避難したことによりそれらの関係がなくなりました。特に仲のいい先輩1人、同僚1人、後輩1人と私の4人でゴルフや麻雀、飲み会など、公私ともに楽しく過ごしていましたが、そのような楽しみはなくなりました。
	17	喪失	また、3人とも妻と子どもがいて私と同じような状態でした。その中で、事故直後に家族だけ1ヶ月くらい避難させていた友人もいましたが、家族で避難し転職したのは私だけでした。友人と被曝に対する考え方が違い、理解しあえないことが辛かったです。被曝が不安で地元で生活したくないと考える私と、不安だけ福島で生活する友人、不安と思わないようにしている友人、不安と感ぜない友人で、考え方が違う中で会っても楽しく会話することができず、友人達から福島を捨てたと思われる気がしてなりません。……。福島で生活している友人達に被曝が心配で帰れないとは言えないので、うやむやにしています。
	19	希望	福島では、店長として働き、やりがいを感じていました。事故がなければずっと働いていくつもりでした。
	19	健康	住宅地は除染をしても放射線量が高い場所もあります。内部被曝も心配です。今すぐには健康に影響がなくても、数年後数十年後に異常が出るかもしれません。そのようなことを心配しながら、目に見えない放射線を気にしながら福島で暮らすことはできないと思っています。
	21	希望	原発事故がなければ両親や親戚、友人らが多くいる福島で暮らしていくはずだったこと、時間が経つにつれて両親や親戚、友人らとの間にわだかまりができてしまったこと、これからずっと被曝の不安を心配しながら生きていかなければいけないことなど、名古屋に避難してからも、様々な悩みや辛い思いを日々感じています。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
7-1 (甲C7第1 号証)	3	希望	私は、この地で生活して行くことを当然と考えて育ち、結婚後もここに住み続けました。ここを離れて生活することなど考えたこともありませんでした。でも、原発事故で家屋敷も周辺も放射能に汚染され、もう二度とここで暮らすことはできません。
	3	自責	先祖代々の土地を守れず、私の代で終わりにしなければならないことを、本当に悲しくまた悔しく思っています。
	4	希望	有機農業で収穫した作物は、農協を通さず、食物の安全に関心の高い幼稚園や各家庭に直接販売していました。有機農業は土をしっかりと作れば収穫量もそれなりに上がりますし、時代の流れで、多少高価でも食の安全に関心の高いお客さんからの注文も確実に増加傾向にありましたから、自分の農業経営についても将来への明るい展望を描いていました。・・・農業も、健康志向のものであったため、放射能汚染地の農作物をわざわざ購入するお客さんがいるはずもなく、私自身も汚染作物を提供する気になれず、すべての顧客を失ってしまいました。
	7	経済的な損害	自分にとって生涯の天職と思っていた接骨院経営、塾経営、有機農業という安定した仕事は完全に失われ、収入も避難前よりも激減しました。避難生活に伴って、家具や家電等の家財、さらには自分の身の回りの物などすべて購入し直さなければなりませんでした。年間8回から10回に及びいわき市との往復も全く自費です。基本的には自主避難ということで、東京電力から補償される分もごくごくわずかで、いつ貯金が底をつくかとびくびくして生活している毎日です。
	8	貧困	長女はA大学の3年次編入が認められて、・・・3月初旬には希望ゼミも決めていました。・・・愛知県での避難生活をしながら何とか大学に通えないかと考えあちこち掛け合い、A大学から「B大学が了承すれば、・・・A大学の単位にして、A大学卒業とすることができる。」との提案をもらいました。しかし、B大学側（から）・・・断られてしまいました。しばらく休学を続けていましたが、私たち一家が広野町といわき市に戻れる見通しが見つからない23年8月、長女は「いつまでもこんなこと(=休学)をしてても仕方ないし、経済的にもたいへんだから、私、大学を退学して働く。」と言い出しました。「放射能被害か大学か」の選択を迫られている中では、長女は「大学」をとることができなかったのです。
	9	貧困	私は、先祖代々(直接の代としては、私で5代目になります)受け継いだ農地と家屋敷から、不本意にも離れなければなりませんでした。しかも、この農地は有機農法として安定した収穫量を得られるまでに土壌を長年手入れした特別の農地です。接骨院、塾経営、有機農業の3本柱でこれからもずっと生き甲斐をもって生活できる基盤があったのに、原発事故がそれをあっという間にぶち壊してしまいました。
	10	健康	娘たちはこれまでのエコー検査で、2人とも甲状腺に嚢胞が発見され、経過観察になっています。
	10	健康	避難後も、慣れない環境への適応、見えない将来への不安、娘たちの学業の維持などを考え、私自身も不眠が続きました。
10	希望	私は、先祖代々(直接の代としては、私で5代目になります)受け継いだ農地と家屋敷から、不本意にも離れなければなりませんでした。しかも、この農地は有機農法として安定した収穫量を得られるまでに土壌を長年手入れした特別の農地です。接骨院、塾経営、有機農業の3本柱でこれからもずっと生き甲斐をもって生活できる基盤があったのに、原発事故がそれをあっという間にぶち壊してしまいました。	



原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	11	貧困	各々卒業して地元で働くという娘たち2人の夢も無残にも打ち砕かれました。前向きで努力家の塊のような娘たちが、2人とも大学進学・卒業をあきらめてしまうのを見ていて、親として本当につらく、東電や国には強い怒りの気持ちがあります。
	11	社会的世界	放射性物質のうちセシウムは測定値が示されるものの、より問題のあるプルトニウムやストロンチウム等については情報公開せず「大丈夫だ。安全だ。復興だ。」と喧伝する政府。甲状腺がんの子どもが130人以上出ても「因果関係ありとは言えない。」と強弁する医療機関。まるで戦時中の大本営発表で、私には強い不信感がぬぐえません。このような場所にこの状況で家族を住まわせることは、人としてできません。帰りたくても帰れません。
8-2 (甲C8第1 号証)	5	希望	福島県に住むことは私たち夫婦が長年望んでようやく実現したことでした。夫は勤務先の仕事にも精通して生き生きと働いており、私や子どもたちも地元の方々に温かく迎えられ、本件事故発生のころには親兄弟よりも強い絆を築くことができていました。家族にはこれといった持病もなく、本件事故さえなければ終生福島の地で一家の生活を続けていくつもりでした。
	6	避難時の恐怖	本件事故による放射能の影響が明らかにされない中、名古屋に住む兄からの電話により放射能の怖さを知りました。この兄は、工業高校プラント科出身だったため、化学プラントや原発の実情をよく知っていました。事故直後の報道では「直ちに健康への影響はない。」などと政府が広報していましたが、兄は「あの爆発状況からするとメルトダウンしている可能性が高い。スリーマイル島やチェルノブイリの原発事故にも匹敵する可能性があるから、早く逃げないと成長期の子どもたちが取り返しのつかない被害を受ける可能性がある。」「とにかく一刻も早く避難しろ。」と強く避難することを勧めたのです。兄の話聞き、インターネットでいろいろな情報を調べた結果、私たち夫婦や幼い4人の子どもたちへの放射能の影響だけではなく、おなかの中にいる子や今後子どもたちから生まれてくる子への影響を考えると、福島にとどまっていたら放射能の恐怖と不安から一生逃げるできないと心が押しつぶされる気持ちになりました。しかし、夫は勤務先を離れることができないため、私たち家族も福島にとどまざるを得ず、それまでに感じたことのない不安と恐怖を感じながら過ごしました。
	7	避難時の恐怖	子どもたちを外に出すことは極力避け、妊婦である私もおなかの子に対する放射能の影響を考えて近所の方たちの安否確認にも行けなかったため、すべて電話を使って情報交換せざるを得ませんでした。また、洗濯物はすべて家の中で干し、窓は全部閉め切った上に、換気口を塞いで外気が直接入らないようにして息を潜めるような生活をしていました。やむを得ず外出するときには、長袖の上着を着て帽子を被り、スカーフなどで顔を覆うことを心がけました。
	8	分離	3月16日夫だけを福島に残し、4人の子どもを連れて私が車を運転して名古屋に向かうことにしました。
	8	喪失	慌ただしい中、福島で知り合いになった人たちに別れを告げることもできず、身の回りの物だけを車に積み込んで福島の自宅を出発しました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
		8 社会的世界	山形の知人宅では温かく迎えてくれ、1週間近くお世話になりましたが、4人子どもたちを騒がせないように気を遣ったりして緊張しながらの滞在でした。つわりで体がしんどくて食欲がまったくなくても、知人の心づくしの食事を食べないわけにも行かず、また、気ままに横になることもできないため、心身共に疲れ果て、毎晩布団に入ると泣いてばかりいました。
		9 健康	私が長男を（川崎病で：引用者挿入）入院させて戻ってみると、親族の家で待つ子どもたちも全員熱を出し、吐いているという状態でした。親族に迷惑をかけていることが何より申し訳なく、子どもたちにも寂しい思いをさせることとなり、私は何をしているのだろうと涙を流す日が続きました。このような生活を続けるうち、私自身が精神的に追い詰められていき、毎日眠ることができなくなりました。
		9 避難時の恐怖	福島に残っている夫に電話で苦しい気持ちを話してもなかなか分かってもらえず、離婚するか、あるいはすぐに仕事を辞めて名古屋へ来てほしいという話にまでエスカレートするような精神状態になっていました。つわりも一層酷くなり、このころから私は、精神的にも肉体的にも限界を超えてしまったように感じていました。
		10 避難時の恐怖	このように追い詰められた私を見かね、夫は仕事を辞めて6月7日に名古屋へ来てくれました。ようやく親子6人が一緒に暮らせることとなりました。しかし私は、親族の家でやっかいになることに耐えられず、子どもたちを連れて飛び出してきていました。名古屋駅で再会した夫にそのことを話し、今夜から寝るところがないと告げました。「今日どうするの?」という夫の一言を聞いた途端、張り詰めていた私の精神は壊れてしまったらしく、その場で気を失ってしまいました。その後気づいたときには中区の東別院あたりで夫が私の腕を掴んでいました。その後一緒に区役所へ行き、夫が涙を流しながら「どこでもいいので雨風がしのげる場所はありませんか?」と職員の方に話しているのを、私はただ呆然と見ているだけでした。区役所職員の方のお世話で何とか市内に寝泊まりできる場所を世話していただけたようでしたがこのころのことについて私の記憶ははっきりしません。
		10-11 健康	ようやく夫が名古屋に来てくれたのにこのころには私は、子育ても、家事も、さらには生きることさえも嫌になり、子どもたちの話しかける声にも反応できなくなっていました。夫が買ってきてくれる食事にも手を付けられず、夜になるとそんな私を責める声が聞こえてきて、それから逃げたくて「死にたい!」と叫びながら家を飛び出す日々が続きました。そのたびに夫が私を連れ戻してくれましたが、その夫さえ私を責めているように思えて私は大声で怒鳴り散らし、手を挙げたこともしばしばありました。子どもたちに対する感情のコントロールもできなくなり、子どもたちを怒鳴りつけて虐待したこともありました。6月後半ころ、・・・鬱病とパニック障害と診断されました。・・・7月20日には解離性障害を疑われるまでに悪化しました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	14	周囲への警戒心	夫は苦勞の末地元の警備会社に警備員として就職することができました。就職先の社長さんたちも私たちの境遇をよく理解して下さっていました。しかし、就職先の会社の親会社が全国規模の警備会社であり、原発施設の警備も行っていることから、私たち一家が国と東電を相手に損害賠償請求訴訟を行っていることについて親会社から嫌みを言われたりするようで、陰に陽に圧力がかかっていることを日々感じていました。また、就職先の警備会社自体も原発の警備を行っており、遠方の原発警備を担当するように打診されたことも何度かありますが、福島第1原発の被害から逃れるために一家で避難してきたことを考えるとさすがにそのような仕事をするにはできないため、その都度お断りして居づらくなってきていました。
	17	経済的な損害	名古屋に避難して新たな生活を始めたことにより、生活用品を買い直したり、夫の就職活動のため衣類を購入したりすること等も必要となり、これらのために24万円余りを費やしました。私と子どもたちが名古屋市に避難してから夫が名古屋に引っ越してくるまでの約3か月間、福島と名古屋の二重生活を余儀なくされました。その結果、1か月あたり15万円の生活費が余分にかかり、合計45万円を要しました。
	17	経済的な損害	原発事故が発生したときには、次女と長男が幼稚園に通っていましたが、名古屋に避難した後新たな幼稚園に入園させるため、二人の入園料や制服・各種用品などに16万円を要しました。
	20	希望	日本では絶対に起きないと電力会社も国も喧伝していた原発事故が発生したことにより、私たち家族はそれまでに築いてきた平穩な生活を根こそぎ奪われてしまいました。その結果、終の棲家と思いつめていた福島の地を追われ、家族のそれぞれが大切にしてきた友人や知人との関係も絶たれてしまいました。夫は終生務めるはずであった仕事を辞めざるを得ないこととなり、何とか見つけた再就職先で希望とはまったく異なる仕事に就くことになりました。しかも、給与はそれまでの半分に減少し、これから先も減収はずっと続くこととなります。子どもたちはおそらく一生放射能による健康被害の発生を恐れながら生きていくこととなります。原発事故の結果、私たち一家がこれまで作り上げてきたそれぞれの人生を一方向的に奪われ、たまたま避難先に選んだ地でゼロから生活を作り上げなければならなくなりました。
	13	経済的な損害	夫は長年勤務してきた職場を平成23年6月に退職し、名古屋市に避難していた私たち家族と同居するようになりました。無収入になった私たち一家は、その日の生活にも困る状態となったため、夫は精神的におかしくなった私を世話しながら就職先を探す毎日を送りました。
	14	経済的な損害	避難後の収入は大きく下がってしまい、蓄えもない状態であったため、約2800万円の分譲マンションの購入代金と諸費用は全額住宅ローンを組んで支払いをしました。ローン借入額は3000万円、毎月の返済額約7万5000円と管理費及び修繕積立金月額約2万5000円を合計した約10万円を毎月支払っていくことになりましたが、減少した収入でこれを工面するのはかなり苦しいことです。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
		15 経済的な損害	夫は教員免許を持っているため、何とか教師の職が得られないかと探し回った結果、愛知県の公立高校の産休補助教員の仕事を見つけることができ、平成28年4月1日に転職しました。産休補助の仕事は数か月で終了したため、その後は公立中学の常勤講師としてA市の中学校に勤めています。この仕事は正式な教員ではなく講師という身分の不安定な仕事ですので、いつまで続けられるか不安もあり、給与の額も転職前と大差ありません。夫の収入は原発事故前に比較するとほぼ半額しかありません。しかし、安定した給与の高い仕事への転職も容易ではないため、生活を切り詰めて凌ぐしかないのが実情です。
9-1 (甲C9第1 号証)	4	避難時の恐怖	みんなが続々と避難し、いわき市全体が空っぽになって行く中、出産を間近に控え、また、遠くに身を寄せる先もない私は、「出産を終えるまで!」と心に言い聞かせながら生活しておりました。ですが、原発事故の影響でいわき市には、支援物資はおろか、ガソリン、スーパー等の品物も届きません。放射線被曝するのが嫌だからとドライバーさん達は荷物を運んでくれないのです。物資が届かないので、家に残っているものを食べて2週間ほどかろうじてしのいでいました。私は、このままここで生活ができるのか、無事に子どもを産めるのか、不安で不安でたまりませんでした。
	5	避難時の恐怖	産婦人科で先生に「大丈夫なんですか?」とたずねると「大丈夫,大丈夫。この次は24日ね。」と軽く言われたので、ある意味ほっとして帰宅しました。ですが、帰ってきてすぐにその産婦人科から電話が入り、「浜通りの産婦人科は全て閉鎖となりました。浜通り以外の産婦人科を自分で探してください。」と言われ、目の前が真っ暗になりました。それから自分で他の産婦人科に連絡をしても受け入れを断られたので、毎日産婦人科を探すことに精一杯でした。
	6	避難時の恐怖	同月18日、何とか水戸市まで車で向かい、診察していただきました。その際、先生から「産むのはうちの病院でいいですが、次の診察日までどうするの?」と聞かれました。水戸も被災していたため、その産婦人科も、特別な事情がない限り入院ができない状況だったのです。・・・院長先生が「一度検査してみよう」と言ってくれました。検査をしてみると、高血圧、妊娠中毒症ということがわかり、それで即入院することができました。
	9	社会的世界	あるとき、長女の予防接種等の請求をするために保健センタへ出向くと、「住民票を移してはいかがですか?」と言われました。一宮市も小学校に上がるまでは医療費が無料なので、結果的にはいわき市と同じ扱いになるから、と言う事でした。私は、検診のたびにいわき市との手続きが面倒だし、こちらの方々に迷惑をかけては申し訳ないという気持ちから、住民票を移す決意をしました。結果、長女の定期健診、予防接種等はスムーズになりました。しかし、すぐに後悔する事になりました。この後、福島県の子供達は18歳まで医療費無料、インフルエンザ等の予防接種が無料になるのです。しかし、住民票を移してしまった長女は対象外です。同じ避難者でも住民票一枚で、こんなに扱いが変わってしまうのです。おかしいとしか言いようがありません。
	9	喪失	今の住所に引っ越す前の6年あまりの間で、近所付き合いが全くありませんでした。最初はなかなか挨拶もしてもらえず、1ヶ月後ようやく挨拶をしてもらえるような状態でしたし、その後もあまり挨拶もありません。そのような中、近所、職場で、全くゼロから関係作りをしていくことに負担を感じていました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	9	周囲への警戒心	さらに、「いつまでも被災者づらをするな。」などと誹謗中傷を周囲の人から言われますし、それは、時に友人からさえ言われたことがありました。「いわきは線量が低いのになぜ逃げてきたのか」、「補償金をたくさんもらっているのではないか」などと、不確かな情報に基づいて知り合いからもいろいろと言われたりします。テレビや新聞に自分たちが出ると、「出演料をもらっているんだろう」などと言われ、そのことも負担に感じています。安い中古車を買った時にも、「お金あるじゃないか」などと言われました。
	10	周囲への警戒心	同年（平成23年）9月に就職した先の苗木屋では、被ばくの検査や弁護士さんとの打合せなどで仕事を休まなければならないことが偶々続いたときに「いつまでも被災者面するな」などと他の従業員さんから誹謗中傷され、このことをきっかけに会社にいらなくなり、同年11月に辞めました。
	10	経済的な損害	平成23年6月頃、友人の紹介で夫の就職が決まり、ジュース製造のラインの仕事をしていましたが、震災の影響で仕事が減り、生活ができなくなり退職しました。しばらくして平成23年10月頃に別の友人の紹介で建設業者に就職しましたが、半年過ぎた辺りから仕事が減り始め、ほぼ2ヶ月給料を殆ど貰えない状況になり、平成24年5月に結局辞めることとなりました。その後、同年6月から喫茶店で働くようになりましたが、ここも売上減少に伴い同年8月辞めなければなりませんでした。その次に同年9月に就職した先の苗木屋では、被ばくの検査や弁護士さんとの打合せなどで仕事を休まなければならないことが偶々続いたときに「いつまでも被災者面するな」などと他の従業員さんから誹謗中傷され、このことをきっかけに会社にいらなくなり、同年11月に辞めました。その次の仕事は同年12月から、車関係の派遣の仕事をしていました。主人は単身赴任で頑張る事を決めてくれましたが、他の派遣会社が入って来て、結局平成25年5月に派遣切りとなってしまいました。その次の就職先は、同年6月頃に就職した工場でした。約2ヶ月で社員にして頂ける話が出ましたが、極めて過酷な労働条件で、社員になったら毎日強制残業5時間なのに、支給されるのは残業1時間分のみというのが条件でした。これではあまりにも理不尽なので、会社側と話をした結果、同年8月頃に退社ということになりました。以上のように、実に避難してきてから2年と4か月の間に、主人は6つも職を転々とするようになったのです。
	12	喪失	私たちが避難して以降、福島に戻ったのはそのとき（平成24年）だけで、その後福島の人・知人・親族とは会っておりません。今でも放射能汚染の危険性があることには変わりがない状況ですので、子どもたちがまだ小さい今、福島に戻る気持ちはありません。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	13	健康	(内部被曝検査を受診して) その結果、夫に甲状腺検査で異常があることがわかりました。主人は一番危険な時に水をくみに外出していましたので、初期被曝が原因ではないかと考えています。そして、長女と私は血液検査で異常がわかりました。私は定期的に血液検査を受けており、比べると白血球がいつもの倍の数値に増えておりました。一番不安なのが、子どもたちの健康被害で平成26年9月16日に2人目の子である長男を帝王切開で出産しましたが、最初の子である長女を妊娠中に初期被曝をした私たちです。子どもたちに影響が出るのではないかとという不安に駆られる毎日を送っています。長男以外は現在のところ毎年1回検査をしており、何か症状が見つからないか不安を感じています。この不安、恐怖がどんなに重荷か理解していただきたいです。私たち家族は、一生この不安と恐怖を背負っていきなければなりません。
	14	自責	避難をした際の一宮の友人との久しぶりの再会は、嬉しい反面、心の中は複雑でした。私たちは、長女のために避難して来た、今長女のためにできる最善のことはしたつもりでした。でも、それは福島からの友人を捨てて来た、整体院のお客さんを捨てて来た、故郷を捨てて来たことになるのです。罪悪感で一杯でした。避難当初毎日かかってくる電話は、お客様からの問い合わせでした。「いつ帰ってくるの?いつ治療して貰えるの?」それに対して私の返事は決まって「原発事故が落ち着いたら戻ります」でした。でも、戻る気持ちなんてない、戻るくらいなら出て来てない、戻りたくても戻れない。私達は帰らないつもりで引っ越して来たのです。いわきに残って生活している人達に「そんな危険な場所に帰れる訳が無い」なんて言えません。心の中はとても複雑で、その気持ちは今も続いています。
	13	健康	健康面の不安も非常に大きいものがあります。私は、事故直後からしばらくいわき市にとどまっており、またそこで水を飲んだりしていましたし、夫は水をもらいに行くために野外で長時間待たされたり、また水戸で入院していたころには病院まで長時間歩いたりしていましたので、その時に被曝をしていたと思います。
	7	避難時の恐怖	夫が車を運転して、生まれて2週間の長女と叔母、それに犬2匹を連れて、荷物も詰まったぎゅうぎゅう詰め車で愛知県に向かいました。赤ちゃんがいるのでミルクを与えるためにサービスエリアがあるたびに止まりながら、12時間かけて深夜に何とか一宮市までたどり着きました。ぎゅうぎゅうな中で12時間移動したので、非常に大変でした。長女もこの時のあと、3か月くらい食欲も悪く、排便も悪く、体調が悪そうにしていました。
10-1 (甲C10第1号証)	4	希望	私は、一緒に仕事をするのが当時の夢であり、妻も私と一緒に仕事をするのが夢、目標でした。しかし、本件事故により二人の夢、目標はなくなってしまいました。私は、地元の出身でしたから、福島にいたころは、仕事も順調で昔からの友人との交流もあり、家庭も円満で幸せな生活をおくっていて公私とも充実していました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	5	健康	妻は、精神に障害(心的外傷後ストレス障害(PTSD))を抱えており今尚苦しんでいる状況にあります。福島原発の事故がなければ、当然、妻が苦しみ精神障害を持つに至った愛知には決して戻ることはありませんでした。私は、愛知県に避難してしばらくしてから妻から様々な事実を聞かされました。妻が昔愛知県での生活環境が原因で心的外傷後ストレス障害などの精神病になったこと、生活環境を変えるために愛知県から福島県に来て生活していたことを知りました。妻は、私たちの子どもを守るため、自分のことは諦め、私に一切の事実を伏せ、愛知県に避難する覚悟を決めたのです。ですが、原発事故後、私たちの生活は変わり、妻の状況は悪くなる一方、福島での生活環境が恋しいと日々苦悩が増すばかりです。妻は、愛知県に避難後、心的外傷後ストレス障害やうつ病でしばらく通院生活でした。
	5	希望	妻にとって福島県の生活は、愛知県での生活とは異なり時間が緩やかに流れ、徐々にではありましたが、体調を回復させつつありました。私は、もちろん、妻にとっても福島での生活は快適でしたから、私たちはこのままずっと福島で生活していくつもりでした。私たちは、結婚し、二人の子どもにも恵まれ、今後も今までのような生活が続くと当然のように思っていました。
	6	喪失	私たちは、避難するかどうかで激しく言い争いをしました。・・・妻は、とくに放射能による子どもへの健康被害を深刻に考えていて、避難しないのであれば、離婚するまで言い出しました。そこで、私は妻の意見を聞き入れ、妻は3月14日に実家のある愛知県愛西市に車で避難することになりました。
	6	健康	私は、とび職のため野外で仕事をしますので、仕事のときはマスクをして被曝を防ごうとしました。仕事以外のときは、外出を控えてなるべく屋内で過ごすようにして、窓も開けないよう生活していました。本件事故前とは異なり、行動も制限されて不便な生活を強いられました。
	7	健康	妻も福島にいたときは、外で遊びたい長女を外で遊ばせず、窓も開けないようにして生活していました。妻は、空気清浄機を購入して使用したり、洗濯も部屋干し、食べ物も地元の物は避けネットで遠方の食材を購入し、水も宅配を使用しました。そんな不便な生活に私ももちろんですが、私以上に妻や子どもらは相当疲れていました。とくに妻は、放射能の健康被害を深刻に考えていて精神的にも疲弊していました。
	7	避難時の恐怖	妻は、子ども二人を連れて、3月14日にいわき市の家を車で出発し、国道で東京に向かいました。通行止めが高速が使用できず、渋滞の中7時間くらいかけて東京に入りました。その間、外気に触れる恐怖を感じながらの移動で普段気にもとめない風向きを気にしながらの移動でした。妻は、子どもが被曝する危険があることを心配して、運転していても気が気でありませんでした。
	8	分離	妻と子どもらは、8月15日に再度(一度、福島に戻ったが)愛知県に避難しました。このときは、愛知県愛西市の県営住宅の避難者用の団地に入居しました。私は、まだ仕事の都合で一緒に避難できなかったので、10月になって避難しました。
	9	喪失	私は、愛知県に避難してきて心のよりどころであった友人がいないので、ストレスが溜まり仕事のない日も携帯電話のゲームなどで気を紛らせるようになりました。子どもらにも些細なことでカッとなくなって怒ってしまい、後から後悔します。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	9	健康	妻は、もともと愛知県内の地元で生活していた時、地元の間人間関係など悩み、精神病になって入院通院して心機一転のため地元を離れて福島に来ました。ですから、妻は、好んで地元に戻ったわけではなく、本件事故がなければ地元に戻るなど考えてもいませんでした。妻は、本件事故によりやむを得ず、地元に戻ったのです。そのせいか、妻は、地元に戻ってからストレスを溜め、次第に精神的に病んできて以前からの心的外傷後ストレス障害は悪化し、新たにうつ病も加わって安定剤などの薬を服用し始めました。薬は、時間が経つにつれ増えてきています。妻は、私と福島で生活していたときにはタバコも吸わず、お酒もあまり飲んでいませんでしたが、愛知県に避難してきてからはタバコも吸い始め、お酒の量も増えてきています。原因としては、避難による環境の変化しか考えられません。
	10	周囲への警戒心	長女は小学3年生で、長男は小学1年生ですが、福島出身者は放射能で汚染されているなどと根拠のないいじめを受けるといふ報道が何度もされています。ですから、私たちは、学校には私たちが福島から来たことは隠しています。長男が保育園のときには保育園にも隠していました。当然、近所にも私たちの出身については隠しています。
	11	分離	私の親や兄弟、友人が福島にいます。私は、愛知県に避難してから4、5回福島に戻っています。私としましては、高齢の親が福島にいますので、できればいつでも帰りたいと思っています。妻も福島での安定した生活を懐かしんでおり、私と同じ気持ちです。しかし、福島に戻るには、車で12時間くらい、費用も高速代やガソリン代などで最低でも5万円くらいはかかるので、帰りたくても頻繁には帰れません。
	11	喪失	私たち夫婦は、本件事故後、妻が避難しようと提案したとき、福島と愛知で離れて暮らしていたとき、それまで話題にもあがらなかった離婚という話も何度もしました。私たち夫婦にとって離婚話は、本当に切実で精神的にも大きな負担でした。なんとか離婚の危機を乗り越え、今夫婦として生活していますが、本件事故がなければ、離婚の話もなく、円満な夫婦関係でした。
	12	健康	放射能のことは、ネットなどで調べていますが、分からないことだらけで子どもや子どもらが成長して結婚して孫が生まれたとき、孫に影響がないかも不安です。放射能の被曝のことを考えると、不安や心配ばかりが浮かんで耐えられなくなります。・・・実際に子どもらは、本件事故の前には鼻血を出したことなどほとんどなかったと思いますが、本件事故後、子どもらは何もしていないのに、突然鼻血を出したことが数回あり、被曝した影響を疑いました。
	13	喪失	私たち夫婦は、愛知県に避難してからも3か月に1回くらいは離婚の話が出ています。避難による環境の変化など私たちの目には見えないストレスを互いに抱えていることが原因だと思います。
	14	希望	裁判官には、安住の地を失う、生活の根拠を失うことが人生にとってどれほど大きいことかを理解してほしいと思います。目には見えないものですが、事故や病気で手や足を失うことと同じくらい大きなことなのです。私たちは、経験して初めて知りました。
	12	希望	私は、もともと福島で生まれ育ち、親も親族も友人も福島にいました。親とも頻繁に交流し、友人とも機会ある毎に一緒に食事をしたり、釣りに出かけたり、思い起こせば本当に平穏で温かく、優しい時間を過ごしていました。妻も愛知を離れ福島に来て、心身とも安定していました。私たち夫婦は、福島を安住の地としてずっと生活していくつもりでした。



原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
11-1 (甲C11第1 号証)	3	喪失	私たちは自分の宅地の裏の庭で、白菜、キャベツ、にら、おくら、ネギ、タマネギ、トマト、茄子、きゅうり、大根、ジャガイモ、モロヘイヤ、落花生、トウモロコシ、イチゴなどの季節の野菜・果物を育てて、自分たちで食べていました。近所の人はむしろもっと本格的に栽培をしており、これくらい自分たちで育てていても、近所からもらうことのほうが多かったです。魚も漁師さんが知り合いにいたので必要ありませんでした。鮭・スズキなどは一尾まるまるもらえることがよくありました。鮭は、自分でさばいて身は塩焼きや味噌焼きにして、卵(いくら)が入っている場合は醤油漬けにしてご飯にのせて食べていました。蟹などもよくもらえましたから塩ゆでにして食べていました。これらはちょっと傷んでいて売り物にならないものをもらうので全てタダでもらっていました。ですから、私たちは本件事故により避難を余儀なくされるまで、お肉とかお米を除いて食材をスーパー等で購入することはほとんどありませんでした。
	3	自然的世界	また、私は、裏山に行ってその山で採ってくる、わらび、ぜんまい、タラの芽、こしあぶらなどの山菜、きのこなどを天ぷらなどにして好んで食べていました。また、飲料水も水道の水で十分でしたのでスーパーなどで購入したことはほとんどありませんでした。
	4	喪失	富岡では私の家族だけではなく、実家もありましたから、ほかの親戚との絆も強いものがありました。私の実家の先祖代々のお墓は富岡町の中にある大きいお寺の中にあります。ここには親戚がお参りに来ていました。お盆や正月には、実家に親族が全国から集まってきていました。お盆には10数人の親族が里帰りしていました。
	4	喪失	また、地域とも強いつながりがありました。地域では、お盆には盆踊りを行政区で行っており、この盆踊りには200人くらいは集まっていました。地域の青年会が中心で寄付を集め、やぐらを組んだり、焼きそばなどを作ったり、お酒やジュースを配ったりしていました。私は青年会0Bに所属していましたので主催者側として関わっており、直前期などは寄付集めで大変でした。私の子らも中学くらいまでは一緒に参加して太鼓を叩かせてもらったりしていました。盆踊りは町内の人はほとんど参加しておりみんなの楽しみになっていました。行政区の盆踊りとは別で、すこし時期をずらして、富岡町全体でやっているうちわ祭りというのもありました。うちわ祭りもやることは盆踊りなのですが、ここには500人くらいの方が集まっていました。うちわ祭りは町のメインイベントで、たまに私も横笛を吹いたりして参加していました。
	4	喪失	私は、富岡町消防団という地域の消防団にも入っていました。消防団では月に少なくとも2回訓練をしていました。また、2年に一回大会があるのですが、この大会の前は、2ヶ月前くらいから毎日のように練習をしていました。富岡町の消防団は昔から伝統があり、県代表になることもたまにあったようです。なお、2014年にも富岡町消防団は郡山市に避難した団員を中心として全国大会に出場したそうです。私は、団の中に6人いる分団長の1人でした。消防団のメンバーは一週間に一回くらいは飲み会に行っていました。飲み会では、妻の実家が営んでいた居酒屋を使うこともよくありました。消防団の訓練は大変でしたが、いざというときには自分たちが地域を守るのだという気持ちがありし、大会前は特に一致団結して全国を目指していました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	7	社会的世界	私たちは、このようにして3月21日頃に川崎に4人で行くことになりました川崎では社長さんのはからいで社宅に泊めてもらえることになったのですが、6畳のワンルームで大人4人が暮らすのには狭すぎました。私たちは重なるようにして寝ていました。また、3階なのにエレベーターがないので、非常に生活は不便でした。
	8	分離	3月末に長女が、当時付き合っていた男性が東京に避難しているということで、東京へ出て行きました。更に、4月半ばには、長男が、東京の小平で仕事が決まったと行って出て行き、埼玉の坂戸の借り上げ住宅に住むようになりました。長男は、今回の事故後、福島第一原発の仕事を辞めることになり、新しい仕事を探していたのです。・・・妻はというと、4月の末に、豊橋の借り上げ住宅に1人で引っ越しました。妻が豊橋を選んだのは、たまたま豊橋の借り上げ住宅が抽選であたったためです。・・・私としてはできれば近くにいて欲しかったのですが、川崎での生活は膝の悪かった妻には色々と限界だったのだと思います。このようにして、最後に私が1人川崎に残って、この社宅に住みながら仕事を続けることになりました。私は、今もそこに住みながら仕事を続けています。
	9	喪失	そして、こうした生活を送っているうちに、平成28年12月に突然妻が心筋梗塞で倒れ、そのまま亡くなってしまいました。・・・そして、私と妻は再度一緒に住めるようになることのないまま妻は亡くなってしまいました。無念な気持ちでいっぱいです。
	9	健康	長女は、平成26年3月に出産をしましたが、子どもが正常に生まれてくるか私も長女もとても不安でした。長男は、事故の当日も福島第一原発の4号機にいました。長男自身もそうでしょうが、私は息子の体に異変がいつか起きるのではないかと不安が拭えません。また、長男は平成26年に結婚しましたが、生まれてくる子ども異変がないだろうかと不安でいっぱいです。
	10	喪失	私は社宅に住んでいますが、同僚はともかく社宅に住んでいる人とは付き合いがなく、福島に居た頃のような、近所との密接な地域の結びつきは全くなくなってしまいました。富岡に居た頃には大変だと思っていた消防団の仕事なども無くなってしまうと寂しく、今はすることもなく、家でごろごろしてばかりいる毎日です。・・・ただ、川崎には同じ地元の人はいくらもおらず、家族もいないため、寂しさを感じる毎日です。
	10	自然的世界	都会に来て、店がいっぱいあって便利な面もありますが、緑が少なく、空気も汚く、臭い気がします。・・・こちらの食べ物が食べられないということは別にないですが、やはり富岡にいたときの美味しい魚介類や新鮮な野菜・山菜と比べると雲泥の差です。
	10	分離	私たち家族は全国ばらばらに三か所に散らばってしまっており、富岡に行く必要もありますから、それぞれの場所に車で行くのも大変な苦労があります。ですから、事故後は、家族は年に1度集まれるかどうか、といった状況です。私は他の家族と比べれば比較的家族と会っていると思いますが、私がそれぞれの家族のところに会いに行っているような状況です。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	11	喪失	富岡町の家は居住制限区域となっていました。それも平成29年4月1日に解除となりました。その前は、富岡町は三つの区域に別れており、富岡町の家は居住制限区域となっていました。車で2～3分でいける隣の集落は、帰還困難区域となっていました。帰還困難区域と居住制限区域では同じ補償の上に1人700万円の差がありました。また、避難指示解除準備区域も、私の家から車で2～3分でした。なぜふるさとを失ったのは一緒なのに、金額にこんなに差がつけられるのかわかりません。300人の消防団の団員の中にも、もともと帰還困難区域だった人と、もともと居住制限区域だった人とそれぞれの人があり、いわきで飲んでいるときなどに賠償金のこと話題になることがあり、少し気まずいこともあります。
	12	社会的世界	除染をして線量は低くなっている、とは言いますが、一時的に低くなるだけでも聞きますし、除染は適当にやっているように思えて信頼できません。線量についても行政は数値の低いデータしか出していないように感じてしまいます。
	12	思い出の喪失	もともと住んでいた家が住める状態では無くなっていることから、私たちは家族で話し合い、もともとの家に住むのを諦めて取り壊すことにしました。思い出のたくさん詰まった家ですから、とても悲しくて、残念な気持ちです。
11-3 (甲C11第2号証)	3	自然的世界	私たちは自分の宅地の裏の庭で、白菜、キャベツ、ホウレンソウ、ネギ、タマネギ、トマト、茄子、きゅうり、トウモロコシ、イチゴなどの季節の野菜・果物を育てて、自分たちで食べていました。近所の人はずっと本格的に栽培をしており、もらうことのほうが多かったです。魚も漁師さんが知り合いにいたので買う必要ありませんでした。ですから、私たちは本件事故により避難を余儀なくされるまでお肉とかお米を除いて食材をスーパー等で購入することはほとんどありませんでした。私はあまり好きではありませんが、父は裏山に行って、その山で採ってくるわらび、ぜんまい、タラの芽などの山菜を天ぷらなどにして好んで食べていました。父はあまり肉なども食べず、自然の物を好んで食べていました。
	5	避難時の恐怖	郡山市の避難所は中に入れてくれませんし、原発事故の影響がどれくらいあるのかもよくわかりませんでしたので、私たちは早く福島から出たいと思っていたのですが、ガソリンがないので駐車場に留まらざるを得ませんでした。また、車の中の避難だったので、思うように足を伸ばすことも出来ず、体中が痛かったことは今でもよく覚えています。雪が降っていても寒かったですが、ガソリンを無駄にできないということで、エンジンも切っていました。私たちは持ってきていた毛布にくるまって身を寄せ合って休みました。私たちは、避難所にも入れず、ガソリンもつたないで車のラジオも聴けないし、携帯の充電も無くなるのがこわくて(郡山は電波はありました)あまり携帯が使えず、ほとんど情報が入ってきませんでした。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	6	分離	川崎では社長さんのはからいで社宅に泊めてもらえることになったのですが、6畳のワンルームで大人4人が暮らすにはあまりに狭すぎました。私たちは重なるようにして寝ていました。また階段のみの3階で、非常に生活は不便でした。3月の末頃、私は、そこでの生活がプライベートもなくあまりに狭くてつらかったのですが、当時付き合っていた男性が、「今いる避難先がいづらいいから、東京に出ようと思うんだけど、一緒に来る?」と言ってくれたので、一緒に東京で住むことにしました。同じ頃に、母や兄も川崎を出て、母は豊橋で、兄は埼玉で生活を始めました。兄は東京で仕事が決まったことから千葉に移りました。母は特に豊橋に地縁があったわけではないのですが、そこぐらいいかすぐに入れる物件がなく、やむなく豊橋に行くことにし、結果家族がばらばらになることになったのです。
	7	健康	子どもが生まれる時も、無事生まれてくるかとても不安でした。無事元気な子が生まれてきてホッとはしていますが、もしかしたら将来的に被曝の影響が出てくるのではないかとということがとても心配です。
	8	社会的世界	まず最初につらかったのは食べ物です。こちらの食べ物は私の口には合わず、調味料などを使って何とか食べられるという状況です。
	8	周囲への警戒心	もうひとつ困ったのは、こちらの言葉は福島とアクセントや会話のスピードが違うので、普通に会話しているだけでも、怒られているような気持ちになって落ち込んでしまうことがあります。また、福島言葉はなまっているように聞こえて人目が気になることがあります。母は原発事故で避難してきたということを堂々と言っていましたが、私は抵抗があり、避難してきたということを周りにいうことがなかなかできません。周りからどう思われるか、偏見を受けるのではないかと、思うことがあるからです。東京にいたときに、「このへんの言葉じゃないよね」と言われた時に「実は福島から避難してきたんです」と言ったところ、その人から、ニヤニヤしながら「えつ、福島ってあの原発の?」と馬鹿にしているような言い方をされたことがあり、それ以来福島からの避難だということを言えなくなってしまいました。
	8	周囲への警戒心	また、聞いた話では、避難者の方がたばこを買おうとしたら、そのたばこ店の人が、お札を受け取る時に、親指と人差し指だけでお札をつまんでまるで汚いものを扱うかのようにお札を受け取ったという話を聞いたことがあります。また、宅配業者に勤めている友人から聞いたところによると、その従業員が福島からの荷物を「汚ねえ」などと言っていたことがあったそうです。また、ネットなどで衣服をネットオークションに出そうとすると、サイトに「福島の方お断り」という趣旨のことが書かれていることがありました。
	8	周囲への警戒心	子どもがいるので、子どもがどう思われるか、ということが心配になってしまいます。ニュースとかネットなどでも、避難者であることで小学生同士の差別を受ける、というようなことをよく聞きます。子供が福島からの避難者の子供だと周りから差別されないか、ずっと不安に思っています。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	9	喪失	富岡町の家は居住制限区域となっていました。それも平成29年4月1日に解除となりました。その前は、富岡町は三つの区域に別れており、富岡町の家は居住制限区域となっていました。車で2～3分でいける隣の集落は、帰還困難区域となっていました。帰還困難区域と居住制限区域では同じ補償の上に1人700万円の差がありました。また、避難指示解除準備区域も、私の家から車で2～3分でした。なぜふるさとを失ったのは一緒なのに、金額にこんなに差がつけられるのかわかりません。もともとは富岡の町民は平等にするという話があったのに、勝手に線引きをして、勝手に金額を変えられたことで、同じふるさとの人ともなんとなく気まづくなり疎遠になってしまいます。帰還困難区域に住んでいる人が悪いわけではないということによくわかっているのですが、なんでだろうというおもいがどうしても湧いてきてしまいます。
	10	社会的世界	地元は、黒いフレコンバックばかりがどんどん増えていて、復興は何も進んでいません。線量は低くなっている、とは言いますが、その時低くても風向きで変わるでしょうし、いいデータしか出していないように感じます。事故後、政府やマスコミの専門家は何の根拠もなく大丈夫だといってみたりすることが続いたので今では全然信用できなくなってしまい、何を信じ、何を基準にしたら良いのかわからなくなってしまいました。
	10	健康	原発の廃炉までに、また事故が起きたらどうしようという不安や、原発の再稼働をするようなことは本当はないのだろうかという不安、放射性廃棄物についてどうなるのだろうかという不安もあります。こういったことから、自分の子供を被曝させてしまうことになるのではないかと不安をめぐり去ることはできず、福島に戻ることは考えていません。
	11	思い出の喪失	とりあえず逃げてくれと言われ今なお続けている避難生活。すぐに戻るつもりだったので、アルバムなど何も持ってくるできない状態で、母が残しておいてくれた幼稚園の時に作った作品や、小学校・中学校でもらった賞状や成績表など全て雨漏りのためぐちゃぐちゃになってしまいました。何一つ子供のころの思い出は持ってこれませんでした。
12-1 (甲C12第1号証)	2	喪失	実家で父親と同居していましたので、経済的にも、また、子育てについても父親の援助を受けることができましたし、生まれ育った実家ですので、近所には幼なじみや知り合いが多く、お米や野菜をわけていただいたり、昔からの知り合いに囲まれて暮らしていました。
	2-3	分離	本件事故後、私は、長女の健康被害等を心配していましたが、避難のあてもなく、・・・平成23年4月1日から伊達市役所で勤務することが決まっていたこともあり、なるべく外出しないなどの自衛策をとりながら、やむを得ず、実家での生活を続けていました。しかし、愛知県弥富市内に住む知人から、そんなところに住んでは絶対だめだ、特に長女の健康被害が心配だと、強く勧められ、平成23年3月19日、母子二人での避難を決意しました。しかし、・・・同年3月28日、長女を愛知県弥富市内の知人宅に託し、一人で福島の実家へ戻ることにしました。このときは、ここまで除染作業等に時間がかかるとは思っておらず、いつか状況が落ち着いたら(長女の健康被害を心配しなくてよくなったら)、長女を実家へ呼び寄せてまた一緒に生活できるのではと考えていました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	3	分離	間もなく、長女を預かってもらっていた知人から、長女が精神的に不安定なので、医師に診せたところ、PTSDのような症状と説明されたとの連絡を受けました(テレビで地震速報が流れると嘔吐するなどの症状があったとのことです)。私は、長女を一人見知らぬ土地の知人宅で避難生活させることに限界を感じ、やむなく、上記職場を退職し、自らも長女と一緒に避難することを決意しました。
	3	分離	一方、父まで知人宅に住まわせてもらうわけにもいかず、また、父も自宅を残し、住み慣れた福島を離れる決断をすることはできず、実家に残ることになりました。
	3	周囲への警戒心	この知人にはとてもよくしてもらったのですが、元々、放射能の影響をとて心配して下さっていた方なので、私は、福島へ一時帰宅するたび、着ていった洋服等も全て捨てるよう指示されていました。
	4	経済的な損害	私は、福島では、自身の実家で生活していました。にもかかわらず、このような避難生活を強いられたせいで、これまで負担する必要がなかった家賃はもちろん、家具、家電及び消耗品を購入しなければならないことになりました。その総額は、約80万円です。また、自宅の広さも、福島の実家とは比べものになりません。
	4	健康	私たち親子は、・・・本件事故後数日間、福島で生活していました。私はもちろん、まだ小学生と幼い長女の健康に将来何か影響が出るのではないかと、・・・
	4	健康	また、長女が将来結婚を考えた際、福島出身ということで何らかの差別を受けないか、不安は尽きません。避難直後、被曝検査を受けました。その時点では、幸い長女に異常はみつきりませんでした。私は、甲状腺嚢胞と診断されました。
	5	健康	私は、避難後に愛知県で知り合った人と、平成28年1月に再婚し・・・、6月に長男を出産しました。久しぶりの出産をとて嬉しく思っていますが、万が一にも、私のせいで健康被害がないか、心配しています。
	5	分離	私たちは、自分も生まれ育った福島で、私の父と3人、穏やかな生活を送っていました。福島に一人残してきた父のことが心配ですし、父も、私や孫(長女)に長い間会えず、とても寂しい思いをしています(お金もかかりますので、1年に1回会いに帰ればいい方です)。本件事故さえなければ、私たちが離ればなれになることもなかったのと思うと、悔しくてなりません。
	5	周囲への警戒心	友達と離れ、全く知らない土地へ転校することになった長女は、当初は、言われもない中傷に傷付くことも少なくなく(放射能の影響に敏感な人たちから、福島へ一時帰宅するたび、衣服を全部捨てるよう迫られるなどすることに、長女なりに傷付いていました)、・・・急な環境の変化からPTSDと診断されました。その後は、一生懸命勉強し、本人の希望で私立中学校へ入学しましたが、今でも本件事故については、何も話そうとしません。
	5	周囲への警戒心	友人等にも自身が福島から引っ越してきたことを隠しています。
13-1 (甲C13第1号証)	3	経済的な損害	私は福島県郡山市に住宅を所有していましたが、平成24年3月24日に1298万円で売却しました。売却で得たお金は住宅ローンの返済に充てたものの約70万円程度の借金が残りました。
	3	希望	私は福島県石川郡玉川村出身で妻は福島県須賀川市の出身で、20年以上にわたり福島県において居住していました。このようなことから地元から近い福島県郡山市に住居を購入して、ずっと福島県に居住する予定でした。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
		4 避難時の恐怖	メディアでは「直ちに問題はない。」との言葉が繰り返されていたことから、その言葉を信じて福島第一原子力発電所から50 km離れた自宅に放射能が来るはずがないと思っていました。しかし、各地で放射能の数値が発表されて、目に見えず、臭いもない放射能は確実に私たち家族の所まで来ていると恐怖を感じました。そして、原発事故が発生してからは、必要な用事以外では気軽に外出できない、窓もドアも開けられない、水道水も飲むことができないという状況で、料理等で使う水は全て購入したものをを使うという生活が続きました。
		4 健康	原発事故後、長女が鼻血を出したり、事故後一週間の間で長女が初めて高熱を出し体調を崩しました。そのときはたまたまなのかと考えていました。また、事故後妻も頭痛や発疹が出ました。後から調べて見ると初期被曝の症状と同じだと言うことが分かりました。放射線の数値も高く、直ちに健康に影響がないという東電や国に不信感を持ち、子供を守りたいとの思いで避難を考えました。
		5 経済的な損害	引っ越し前に居住先を探すために何回か名古屋を往復して、市営住宅に引っ越しをしました。引っ越した後も、住居の売却のために福島と名古屋を往復しました。
		5-6 経済的な損害	実家の両親の住居に年2回程度帰省しており、一度帰省すると5万円程度の費用がかかります私たちには子供が二人いるものの、妻は実家の両親の援助が受けられず、家事や育児で大変な思いをしています。
		6 健康	年に1回行っている甲状腺検査と血液検査では、長女の成長ホルモンが過剰に出ている状況で、次女には甲状腺に嚢胞が発見されています。
		6 分離	今回の原発事故により、私も妻もとも慣れ親しみ、友人もいた福島県を避難せざるを得ませんでした。両親や祖父母をおいて、全く知らない土地へ行くことに悩みました。・・・今回の事故がなければ、郡山市にずっと居住するつもりであり、両親や友人が住む故郷を離れて住むこともありませんでした。
		6 喪失	自主避難することを両親は反対し、「見捨てるのか。」と言われたこともあります。しかし、長女の健康のために、今避難をしなければ絶対に後悔をすと思い、避難をすることにしました。
		6 喪失	・・・避難先で、妻は知り合いも友達もおらず、土地勘もないことからストレスが溜まり、喧嘩が多くなりました。
		6 健康	放射能の数値が下がっているといわれても、前の状況には戻っておらず、子供の健康を考えると、福島県で子供を育てていくことはできないと考えています。現在は、名古屋市に住宅を購入しており、福島県に帰還する考えはありません。
		7 喪失	今回の原発事故で、私たちは住み慣れた土地を離れることになり、被曝させられ、また、他の人から放射能を心配するものはおかしいとまで言われました。
		7 自然的世界	自然にあふれた福島を返して欲しいです。しかし、拡散された放射能はもう消えません。
		7 周囲への警戒心	いつまでも続く身体的な不安と検査でもしも病気が発見されたときのことなど、避難した今も不安は続いています。子供達が大人になり、結婚して出産するときにその赤ちゃんは大丈夫なのだろうかと思う・・・。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
14-1 (甲C14第1 号証)	4	健康	浪江町や双葉町等の放射線被害の著しい地域に頻繁に出向いて、そこでの動物の保護活動業務に忙殺されました。自分の生まれ育った福島県の地域の危機であるので、県庁職員としても、福島県のために、そして、福島県民のために、自分の業務を懸命に取り組もうとは考えていました。ただ、どうしても、内部被曝等による将来の健康に対する不安感は常にありました。また、余震が続く中、いつまた原発事故が起こるのではないかという不安とも闘いながらの業務は、私にとっては、非常に精神的な負担を与えるものでした。
	4	健康	しかしながら、震災後は、警戒区域での作業が多くなり、朝6時30分には出勤することが多かったです。・・・仕事が終わるのは深夜に及ぶことも多く、自宅に戻るのは深夜の2時頃になることも珍しくはありませんでした。通常10月から11月は予算編成業務があり、震災対応がなくても多忙な時期でしたが、これらの通常業務に加え、警戒区域などでの作業が長時間にも及ぶ状況であったので、土日にも出勤することが多く、代休を取って休むことは事実上不可能な状況でした。
	5	自然的世界	従前から授業の一環として、毎年「はかるくん」を使って放射線量を測定していた記録が残っており、その記録から原発事故前のおおよそのデータの把握はあり、平成22年12月の測定では0.07(屋外) s v / h程度であったと記憶していたようです。そうすると、通常時の100倍の放射線が身近にあると考えると、生徒そして自分たちの身の安全を心配しないわけにはいかなかったと言っていました。
	5-6	社会的世界	その後も入試前などに昇降口の砂埃取りなど、内部被曝の可能性が高い清掃活動があったようです。入試時期の平成24年1月にもなると、職場で、被曝を口にする人はおろか、砂埃清掃時にマスクをする人の姿も見えなくなり、誰も心配ではあるが、それを敢えて口にするのは憚られるというような雰囲気であったことを後に語っていました。
	6	健康	子ども達には、本件事故の影響の心配より、外に遊びに行かせないようにしておりましたので、子ども達にとっては、そのような状況が非常にストレスであったようでした。外で遊べない、体育も運動会も水泳大会も中止になってしまい、そして、家族で外に出かけるようなこともできなくなってしまったのです。このように、日に日に元気がなくなっていく二人の子ども姿を見ることが、私達夫婦にとっては、何よりも辛いことでありました。
	7	思い出の喪失	私達の福島の自宅は、・・・35年の住宅ローンで平成15年に新築したものでした。それまでは、福島市内のアパートで生活していましたが、子ども達が生まれたこともあり、家族が住みやすく自分たちの生活にあうように妻と私が考えに考えて造ったものであり、インテリアや細部の材質にまでこだわって造りあげたものでした。私達家族のここでの生活は8年に及んでおります。子ども達の成長の思い出など家族の思い出が詰まっているものでした。このような自宅を諦めるしかなかったのです。
	7	分離	愛知県への転居は、平成23年12月26日に、まずは子ども達が妻の実家のある豊川市に引っ越しをし、私と妻が、平成24年3月までに福島市での生活を片付け、愛知県に転居し、その後、岡崎市で家族四人の生活を再開しました。・・・しかしながら、3カ月間という短期間といえども、まだ小学生の幼い子ども達を先に引っ越しさせて、別々に生活することは心配で、特に妻は頻りに手紙のやりとりをしていたことを記憶しています。



原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
		8 希望	愛知県に行くことになれば、家族のためにそこでの安定した生活を築くために福島に戻ってくることはないと思われ、自分の生まれ育った福島を離れることの辛さ、やりがいを感じ充実した福島県庁での仕事を辞めることの悔しさが大きかったです。
		8 分離	何より、福島県内に残ることになる実家の母と遠く離れることも大変心配でした。
		8 経済的な損害	妻は、愛知県では非常勤の教職にしか就くことができなかったため、収入面について激減したことは言うまでもありません。現在も月額の収入は20万円にも届きませんし、非常勤のため、賞与等もありません。福島市で高校の教師で勤めていた4年前と比較しても、年収ベースで300万円以上の収入の減少があります。
		8 自責	ただ、それ以上に、妻が苦しく辛い思いをしたのは、それまでの勤務先の学校の、自分の教え子を福島市に残し、自分だけ引越してきたことのように、妻はこのことで強く自責の念に駆られているようでした
		9 経済的な損害	もともと、私たちは、平成15年に福島市内に戸建ての住宅を4200万円の住宅ローンで購入しましたが、岡崎に転居する際に2000万円でしか売却できず、そこでの住宅ローンが残っていました。その売却代金全てを残ローンに充当した上、300万円は親戚から借り入れ返済しました。それでも依然として、450万円の住宅ローンが残っており、現在も月々5万円の返済を行っています。つまり、前述の福島の自宅の住宅ローンに加えて、岡崎のマンションのローンがあり、二重にローンを支払うことになり、マンションの管理費等も併せれば月額合計17万円の負担が発生しています。
		10 健康	現在、家族全員、放射線の影響を受けていないか、甲状腺検査などを定期的に受診しています。直近の検査結果は、私と子ども達は異常ありませんでした。しかし、妻は、のう胞や結節が確認されており、経過観察中です。このように、今は特に目立った健康面の問題がなかったとしても、将来どのような問題があるかは常に不安を抱えています。
		10-11 喪失	子ども達には、愛知県に引越すに際しては、転校によって福島の友人と別れることでも、辛い思いをさせました。・・・愛知県に引越すことを両親が子ども達に伝えた際、最初は、子ども達からは反対することはありませんでした。しかし、時が過ぎ、愛知県への転校がいざ近づいてくると、子ども達の気持ちは複雑に揺れたようです。独りでこっそり泣くこともあったし、大泣きするようなこともありました。多くの福島の友達とお別れをしなければならぬのであって、平常心でいられることができるはずもありませんでした。愛知県に引越した後も、福島の友達から多くの手紙をもらい、文通を続けている友達もいるようです。友達から手紙が来た日はとても嬉しそうにしていますが、その分、その後、その友達と会えない、二度と会えないのかと、とてつもなく寂しい気持ちに陥ることがあったようです。愛知県に来てからも、時々、福島の友達から受け取った手紙を読み返している子ども達の姿を見ると、何とも言えない切ない気持ちになりました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	11	健康	子どもが中学校の時の印象的な出来事ですが、長女にこのようなことがありました。学校で、「東京オリンピックの是非」についての討論会がありました。その中で、オリンピックで使う予算を福島復興に使うべきだという意見が出て、その流れで福島の現状についても討論されたようです。しかしながら、その内容が、長女からしてみれば、あまり福島の現状を踏まえない内容も含まれておりました。長女としては、現状を伝えたい気持ちもありましたが、感情的な思いを抱いたためか、パニックになって泣き出してしまったようです。私も妻も、当時、子ども達が中学校3年生になり、少しずつ大人になりつつあって、どこか少し安心していたところもあったのですが、やはり、今でもなお、福島への思い、原発事故の記憶が、子ども達の脳裏に深く刻まれていることを思い知らされました。
14-1追加	2	経済的な損害	妻の収入に関しては、避難前の、福島市内の私立高校に勤務していた頃の水準には遠く及ばない状況のままで、依然として、年収としては200万円前後という状況です。非常勤講師としては、勤務を入れる枠には限界があります。妻はできる限りの勤務をしておりますので、結局、年収額が減ることはあっても、増える可能性はありません。
	3	周囲への警戒心	(子どもたちは：引用者挿入) 現在に至っては、敢えてそれ(東日本大震災：引用者挿入)には積極的に目を向けないようにしているようにも見えます。自分達が福島から来ていることを積極的に言おうとはしません。本人達としては、できる限り将来に目を向けようとしているようです。ただ、それでも、学校などで、震災や福島の話が上がりやすくなると、福島のことを知っているかのような態度をして欲しくないようで、不満を感じたことがありました。
	3	健康	甲状腺の検査には、平成24年以降2年おきに行っておりました。長女も二女も、平成30年までは「A1(のう胞や結節を認めなかった場合)」もしくは「A2(20.0 mm以下ののう胞や5.0mm以下の結節を認めた場合)」であり、比較的順調でした。しかしながら、令和2年の検査で、長女の判定は「B(20.1mm以上ののう胞や5.1mm以上の結節を認めた場合)」との結果が出ております。確かに、日常生活に大きな影響がないとしても、今後、このような影響がどのように進むか不安感は大きく、そのような不安感と隣り合わせの生活は、長女本人にとっても当然、我々両親にとってもストレス以外の何物でもありません。
	3-4	喪失	私の母が、令和2年5月25日に82歳で亡くなりました。・・・コロナの影響もあり、母の入院先にお見舞いに行くこともできませんでした。入院中の母の体調は前述のとおり、良くない状態ではありましたが、亡くなる直前は比較的安定していました。それが、まさに亡くなった日、私が仕事から帰宅した夜8時に、入院先から「急変しました」との連絡があり、応急措置の甲斐もなく、亡くなってしまいました。あまりに突然のことで、信じられない思いで、翌日、まずは私だけが始発で福島に行きました。新型コロナウイルスの影響で、大掛かりな移動が困難な時期ではありましたが、妻や娘達も葬儀に参列できたのはせめてもの救いでした。
	4	分離	母は、孫のことを第一に考えていましたので、震災後に愛知県に引っ越すことについては賛成してくれておりました。でも、本当は、落ち着いたら、私達家族にまた福島に戻って来て欲しいという思いはあったようです。時折、母は娘達と電話で話しており、その内容からすると、そのような思いが伝わってきました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
15-1 (甲C15第1 号証)	3	避難時の恐怖	原発事故が起きた直後は、子どもは外に出さないようにすることはもちろんのこと私が外出をせざるを得ない時でも、被ばくの危険に怯え、私や家族が外から戻った時には、すぐに服をビニール袋に入れ、門から玄関までの歩いた所を水で洗い流すなどして大変な苦労をしました。また、水道水も恐くて飲めないののでペットボトルの飲料水を使い、祖母が自宅の畑で作ってくれた野菜も一切食べないようにしていましたし、地元産の食品は購入しないようにしていました。
	3	避難時の恐怖	このころ、原発事故について正確な情報が入ってこないため、いつ大きな爆発が起きるのかとか、自分の家の周囲はどれくらい放射能に汚染されているのかとか、恐怖に怯えていました。原発が爆発した翌日に屋内待機の町内放送を聞いて、一層不安は高まりました。そのため、少しでも遠くに移動はできないのかと、親戚や友人・知人をお願いしていました。
	3-4	避難時の恐怖	私たち家族は毎日放射能の恐怖を感じながら生活をしていましたが、避難をするかどうかは迷っていました。しかし、町中で、相馬や双葉町から強制的に避難をさせられている人たちがバスで移動をするのを見たときに、やはりこれはただとではないと現実を突きつけられたように感じました。また、原発に勤めている知り合いのいる友人から電話があり、「今から南相馬を出る。大変なことになった。危ないから逃げた方がいい」とも言われ、真剣に避難を考えるようになりました。そして、原発事故から数日後、ラジオで「できるだけ外出は控え、窓を閉め切って建物の中においてください」というアナウンスを聞き、このままだと外に出られなくなって死んでしまうのではないかと恐怖を感じ、避難に向けて動き出しました。
	4	分離	両親は仕事があり、祖母は福島から離れたくないと希望をしたため、避難はしていません。私は、自分のこともさることながら、幼い長女のことを思うと一刻も早く原発から遠ざかりたいという思いでいました。
	4	社会的世界	私と長女、名古屋の知人の家でしばらく生活をしていたのですがこの知人とは生活時間がまるで違い、小さな子どもを連れてとても気を遣って生活をする事になり、次第に申し訳ないという気持ちも強くなっていて、すぐストレスを感じるようになりました。知人も疲れてきたようで、次第に関係がギクシャクしてきました。
	5	社会的世界	公営住宅へ移っても、私は本当に限られた身の回り品しか持ってきておらず、生活はとても不便でした。・・・また、住居はカビがひどく、衛生状態がひどく悪かったのですが、お金がないためどうすることもできませんでした。
	5	健康	長女は、IGA欠損症という病気で、免疫力が低く病気になるやすいため、週に1回は通院が必要でした。愛知県へ来てからすぐに40度の高熱が一週間続き、その後も体調が悪い日が続いて、ぜんそくにもなってしまう、おそらく相当なストレスを溜め込んでいたようで、福島ではなかった歯ぎしりや、爪を噛む、髪の毛を抜くといった行動も見られるようになっていました。また、長女は、「帰りたい。」「おばあちゃんに会いたい。」「寂しい。」と口にすることもあり、見知らぬ土地での生活は私以上に長女にとってはつらいものだったのだと思います。
	5	社会的世界	どこの病院へ通えばいいのかも分からず、病院を探すのにも苦労をしました。さらに、福島では車で通院できていましたが、避難先では病院へ行くにも交通手段がなく、地理もわからないため、やむを得ずタクシーを利用することが多くて経済的に大きな負担でした。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	6	経済的な損害	長女の面倒を見てくれる人が誰もいないので、なかなか仕事を見つけることは出来ませんでした。
	6	健康	私としては、見知らぬ土地で孤独を感じる生活が日々続き、一年くらいはほとんど家から出ることなく引きこもりのような生活をしていました。周囲に知り合いがいないということはとても寂しく、夜中に音がするだけでびくびくしていました。また、福島と違って街灯やネオンで夜でも明るいので、なかなか眠ることも出来ませんでした。このような中、私は福島にいる家族は大丈夫だろうか、死んでしまうのではないかと心配しながら日々を過ごしていました。こうした生活を続けていたため、私は精神的に不安定になりました。そのため、病院を受診すると、適応障害、パニック障害と診断されてしばらくは通院を余儀なくされました。
	7	健康	当時は、何も情報がないまま外に出ており、しばらくはマスクも何もせず生活をしていたので、特に長女については将来的に悪い影響があるのではないかと心配しています。なお、私も、長女も、甲状腺検査を受けた結果、今のところは問題はないと言われましたが、今後いつ病気になるかと心配です。
	8	喪失	20数年間住み続け、これからもずっとそこで住み続けたいと思っていた故郷だったのに、そこを離れなければならない決断は本当につらいものでした。愛する家族や親しい友人との別れは、今思い出しても胸が痛みます。避難をせずに地元に残った友人や家族は、「不安だけれど自分たちはここで生活しているんだから」「安全だから」という意識を持っているため、今では温度差が生まれてしまい、そのために離れてしまった友人もいます。
	9-10	希望	私たちは自分の意思で避難を決断はしましたが、それは決して望んでいたことではありません。・・・避難をしてからも、つらくて大変で悲しいことばかりでした。知らない土地での不安や恐怖。周りは頼れる人もいない。ストレスで頭の毛は抜けて外へも出られない。お金もなくて病院にも行けない。食べ物を口にするのも不安。そのような日々を今まで送ってきました。また、報道で避難者へのいじめ問題が大きく取り上げられていますが、私も、名古屋で知り合った人にどこの出身かを聞かれても、正直に答えることに躊躇してしまいます。そのため、なかなか人と打ち解けた話をする事ができず、友達も作りにくいです。
16-1 (甲C16第1号証)	4	希望	私にとって職業とは単に生活の糧を得るための手段ではなく、自分の生きがいを具体化する手段でもあるのです。・・・ところが、原発事故のお陰で私はそんなやりがいのある仕事を失ってしまったのです。私にとっては、夢を奪われたにも等しい出来事でした。
	5	健康	放射能による身体への影響は20～30年経過してから、癌という形で現れると聞いています。今、50代の人にとっては自分が70歳になったときに癌になったとしても、それが加齢による癌なのか、原発事故の影響による癌なのか分かりません。しかし、我々のような20代、30代の者にとっては、現在、福島で暮らすことによって、働き盛りである40代、50代になったときに癌になる可能性が高くなってしまいます。しかも、その可能性はどの程度であるかも全く知らされていません。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	5	健康	福島は私や妻にとって大切な故郷です。できれば、そこで自分たちの子供を産み、育てたいという気持ちはありました。他方、胎児・乳児は放射能の影響を最も受けやすいとも聞いています。福島で自分たちの子供を産み、育てることが、その子の将来のために本当に正しいことなのか、悩みました。悩みながら、何故、私たちがそのようなことで悩まなければならないのかとも憤りを感じました。
	7	健康	日常生活を送るうえでも放射線量を量ったり、洗濯物を干すときに屋内に干したりするように、被ばくの可能性を少しでも低くするように工夫しています。
	7	周囲への警戒心	再就職後は、「一度でも福島を見捨てた奴」というような目で見られることもあると聞いており、社長面接の際にはそのような目で見られるであろうと言うことを聞き辛かったです。実際に、会社で働くようになって、初めのうちはチームの中にうまく溶け込むことができず、苦勞しました。
17-1 (甲C17第1号証)	2	貧困	次男は本件事故当時、検事になるために法科大学院に進学しようとして勉強していましたが、本件の事故が起こり、私の収入がなくなったため、法科大学院の進学は諦めて、・・・。
	6	避難時の恐怖	私達は、自宅の冷蔵庫の食糧を取りに行って数日分の食料はありましたが、あとどのくらい生きられるのか、不安が膨らむだけでした。
	8	避難時の恐怖	3月17日に、病院で放射能計測器による検査を受け、また、3月19日に自宅に戻る途中で警察官が全面マスクをしているのを見たとき、私たちが被曝してしまったことは決定的だと感じました。
	8	社会的世界	また、妻が名古屋に転院してから眼科に行った際に、受付後、一般の患者とは別の物置のような部屋に連れていかれ、診察後も、その薄暗い部屋で待たされるという対応を受けました。
	8	避難時の恐怖	日に日に近隣の人たちが避難し始め、家々の光が消えていき、通りを眺め渡しても人のいない死んだ町になり、取り残されている不安の中、3月17日に強制避難指示が出たため、避難を決意しました。
	9	健康	名古屋に引っ越してきたものの、買い物に行くにしても車がないため、重いものや、かさがあるものなどを買い求めた時には、体力的にきついです。
	9	健康	特に妻は、避難してすぐ、慣れない名古屋の夏場の暑さのために、熱中症及び気管支炎喘息に罹り、10日間も入院していました。私も持病の糖尿病が不安等に悪化したので、一時入院も勧められました。
	11	自責	お墓参りに行くことも出来ません。墓石が倒れてしまったので手直しが必要なのですが、近所にあった墓石屋さんも移動先が判らず、手直しすら頼めていません。
	12	分離	本件事故以来、親戚同士の付き合いは、どんどん薄くなってきています。
	12	自然的世界	今後、たとえ、戻ることができたとしても、何の楽しみもなくなっているだろうと思います。・・・私も、好きな釣りも出来ず、季節ごとの山菜を取って食する等の楽しみも無く・・・。
	12	喪失	・・・中略・・・友人もいなくなっている。
	3	避難時の恐怖	(警察官は) 全面マスクという、原子力発電所の中で使用するマスクをかぶって立哨しておりました。・・・とてもひどい状況になっている、汚染というものが自分自身に本当に降りかかっているという本当に恐怖感、血が逆流するような感じを私は受けました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	10	経済的な損害	南相馬にいたころは、米や野菜はほとんど購入したことがなかったので、名古屋に移住後は特に食糧費がかさみ、ひと月で1万円ほど生活費が増加しました。
	11	経済的な損害	田んぼも以前は耕作を依頼していましたが、本件事故以来、耕作することを禁止されているため、先祖が長年に亘って作り上げてきた土地の価値がゼロ、否、マイナスになってしまっています。
	10	思い出の喪失	私は、本件事故後3か月に1回ほど自宅の様子を見に行っていたのですが、そのたびに周辺の家屋が解体されていき、まるで歯抜けのような状態になってしまったため、生まれ故郷が町ごと崩壊していくような感じを受けて暗澹たる気持ちになりました。
18-1 (甲C18第1 号証)	4	希望	私たちは、生まれたときから南相馬市に住んでいました。私は、特に体の不調もなく、自宅近くに約200坪の畑を借りて、毎日農作業に精を出して生活していました。野菜は全て自給しており、味噌も自家製でした。また、タンス職人で建具やサッシ屋で働いたこともあり、大工仕事や家具の作成ができるため、知人や近所の人らに頼まれて大工仕事をすることもよくあり、生き甲斐にもなっており、アルバイト替わりでもありました。
	8	自責	生まれ故郷には、私の自宅や先祖代々のお墓を残したままでした。
	8-9	健康	最終的に小牧市で避難生活を送りましたが、住環境が大幅に変わったこともあってか転居後は体調を崩しがちであり、健康な者と比べて身体的にも精神的にも負担が大きいことは言うまでもありません。実際、妻は、避難によるストレスから平成23年4月頃以降うつ病、メニエール病の症状が現れるようになり、うつ病、メニエール病との診断がなされており、整形外科にも通院し、入退院を繰り返しました。平成27年7月には、膝に菌がたまる病気となり、入院・手術しました。手術が遅れると命の危険もありました。そのまま3つの病院を転院しながら入院し、11月20日まで治療とリハビリのために入院しました。退院後はやはり身体がさらに弱り、県営住宅の2階の住居への階段の昇降も困難でした。
	9	健康	私はそのような妻の身の回りの世話をしながら避難を繰り返し、慣れない土地で妻の世話をしていたことから、身体的・精神的負担は大変大きなものでした。・・・平成26年6月と8月には、私自身胆石のために入院しました。転げ回るほどの痛さでした。
	9	喪失	避難先では農作業も行えず、また、知人友人も近くにいないので大工仕事を頼まれる事もないため、これらを楽しむこともできなくなりました。
	11	喪失	ここは、前の家からも長男が住んでいた実家からも3キロくらい離れていて、周りには知った人は全くおらず、近所との交流もありません。
	11	自然的世界	私は、やはり放射線量が不安で、野菜などを買うときも、安い地元産のものではなく、高い県外産のものを購入しています。私だけでなく、多くの人が同じで、地元産のものは安くても売れ残っています。
	12	分離	震災前は、私と妻、長男や二男、実母、妹や長女らは、近くに住んでいたため頻りに顔を合わせて交流していましたが、避難のために離れて暮らさなければならなくなりました。
	12	喪失	実母は、平成24年1月に脳梗塞のために倒れ、死亡しましたが、私たちは遠方のため直ちには駆けつけることができませんでした。
	13	思い出の喪失	私は被曝を避けるため、平成24年2月3日に自宅の家財道具や家電を処分しました。処分したものの中には、タンス職人であった私が結婚した際に妻のために作ったケヤキ玉塗りの和ダンスや、実母が長年使用していた物など、思い出の物も多くありました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	14	喪失	(かつての) 近所の人たちとは会うことができません。
	9	経済的な損害	長男は、事故のため会社が閉鎖となって解雇となったことから、結果的に転職を繰り返すこととなりました。
	10	経済的な損害	福島では大工仕事のアルバイトがあり、また、畑で自給分の野菜を全て作っていたことから、夫婦二人で月6万円というわずかばかりの年金でも何とか暮らすことができていました。しかし、小牧では、畑も大工仕事もなく、ADRで得たお金を少しずつ切り崩しながら何とか暮らしている状況でした。
	11	経済的な損害	引越費用は、業者に見積もってもらおうと60万円くらいかかると言われたため、自分でトラックを借りて、人を雇いました。それでも、福島まで往復2回することが必要で、30万円くらいかかりました。
20-1 (甲C20第1号証)	4	避難時の恐怖	翌12日、福島第一原子力発電所の事故(以下「本件事故」)が発生しました。当初、私たちは、私たちが住む「原町地区」は避難の必要はないなどという報道を信じ、放射能の心配などしておらず、日課となっている散歩も毎日続けていました。・・・同月14日、いわゆる二回目の爆発が起きました。その際、私たちの自宅のガラス戸が揺れるほどの爆発音が聞こえました。これを聞いた私たちは、ただ事ではないのではと思い、報道を信用することに不安を覚え、自ら避難することを決意しました。
	4	避難時の恐怖	私たちは、平成23年3月15日、西会津で一泊することにしました。すると、西会津の宿泊施設から、いわき、大熊、双葉(浜通り)方面(私たちが住む「原町地区」もこれに含まれます)からの避難者は、スクリーニングを経ないと宿泊させないと言われました。これを聞き、私たちは、自分たちの自宅付近が極めて深刻な状況に置かれていることを、初めて知りました。
	6	希望	私たち夫婦は、私の退職を機に、平成22年9月、名古屋市内の自宅を処分した際の立退料等で、自然が豊かで比較的気候も穏やかな福島県南相馬市内に自宅を購入し、同地に移住したばかりでした。また、同地を気に入った長女も、平成23年4月には、私たちとの同居を開始し、親子水入らずの生活を再開する予定でした。とりわけ、私たち夫婦は、老後を、風光明媚な東北地方で、近隣の温泉地等をめぐりながら、楽しく穏やかに過ごしたいというささやかな夢を抱いていたのに上記住居地での生活が絶たれ、また、老後のために蓄えてあった預貯金も、長期化する避難生活によって取り崩すなど、本件事故により、私たちが抱いていた老後の人生設計は、全て打ち砕かれてしまいました。
	6	健康	平成23年4月初旬、私たち夫婦は、当初、名古屋市提供の市営住宅に入居しましたが、エレベーター等がなく、毎日階段の上り下りを強いられたほか(入居階までの階段はもちろん、居室内にも階段があり、家事をするために台所と他の部屋を行き来するためには毎日何段もの階段を昇降しなければなりません)、旧式のお風呂の段差が激しかったことから(洗い場の上に、非常に高さのある浴槽が置かれていたため、浴槽の壁面を乗り越えて入浴しなければなりません)、妻は、股関節を痛み、平成24年1月、人工股関節置換術を余儀なくされました(平成24年1月18日から同年2月9日まで入院、同年7月までは週に1回通院、その後は半年に1回通院)。本件事故前(当該住居に入居するまで)妻が股関節の痛みを訴えるなどしたことは、一度もありません。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	7	健康	元々、自ら気に入りに購入した福島県南相馬市内の一戸建てと、賃貸アパートでは、その住環境は大きく異なります。とりわけ間取りについていえば、こと田舎でのんびり生活することを希望していた私たちにとっては、賃貸アパートは、手狭というほかありません。特に高齢の私たち夫婦は、いっこうにその住環境に慣れることができず、不眠等の症状を患いながら、約5年間にわたる賃貸アパート暮らしに耐えてきました。
	7	希望	私たち夫婦は、終の棲家となるはずのマイホームを新たに福島県内に構えたばかりでしたのに、同建物に満足に居住できた期間は、ほんの数か月にすぎません。以後、人が日常的に居住しないことによる建物の傷みは激しく、私たちは、なんとかこれを食い止めるべく、毎月のように、名古屋市内から福島県内の自宅へ通い、それぞれ一定期間、同所に滞在し、できる限りのメンテナンスを図るという生活を続けています。
	8	経済的な損害	人が日常的に生活するわけではなくなった福島の自宅の劣化、痛みは激しく、特に平成23年夏を経過後、ほとんどの家具、建具、衣料品等は、全てカビが発生し、廃棄を余儀なくされました。
	8	健康	福島県南相馬市内の自宅周辺は、現在でも、年間4ミリシーベルト以上の放射線量(支給されている計測器で計測しています)が確認されるにもかかわらず、除染作業の目処もたっていません。
21-1 (甲C21第1号証)	2	避難時の恐怖	新聞販売店を皮切りに、市内のコンビニ、スーパーマーケットをはじめ、野菜スタンドに至るまでが、みるみる閉鎖され、テレビからのNHKニュースで、情報を得るのが精一杯でした。
	2	避難時の恐怖	行政区長、隣組組長を始め、町の顔役の人たちは、あっという間に避難し、もぬけの殻の状態でした。隣近所の住民は、どうしたものかと思案投げ首の状態でした。
	2	避難時の恐怖	・・・交通手段がないため避難は出来ず、毎日が不安の連続でした。
	3	喪失	私は早く避難した方が良いと考えましたが、妻は、市からハッキリした避難指示があつてからで良いのではないかという考えで、情報が混乱している中、避難の方針を巡って、夫婦げんかに近い状況になってしまいました。
	3	避難時の恐怖	原発の爆発の時は外で片付けをしていたので影響はどうか、チェルノブイリ原発事故の二の舞とはならないか、ガソリンスタンドが閉鎖となり、軽自動車の燃料や石油ストーブの燃料に不安がよぎりました。
	3	避難時の恐怖	不要不急の外出は控えておりましたが、動けないでいる近隣の高齢者の自宅を訪ね、今後の具体策について話し合う等の激励はしていました。
	5	社会的世界	私たち夫婦は、当初、岡崎の娘夫婦のマンションに一時避難しました。娘夫婦の世帯は家族5人で3LDKのマンションで、そこへ飛び入りの私たち夫婦が避難したので、生活リズムも食事も本当に大変でした。
	5	健康	岡崎での生活は、米・みそ・醤油・野菜は共通でも、味付け等で、東北圏と名古屋圏では相当異なり、慣れるのに大変苦労しました。・・・不便は覚悟の上と意を決して生活していましたが、食べ物ばかりでなく、言葉も違うため、気苦労で夜は眠りが浅くなり、朝も早くから目が覚めてしまうようになりました。
	6	健康	常に神経が尖っていたためか、気持ちがふさぎ込んで身体が重く、なじめない生活にうんざりもしましたが、仮設住宅へ転居した人のことを案じては、自分らを慰めて我慢していました。



原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	6	周囲への警戒心	何事も我慢我慢で、生活のペースを合わせる心遣いに気苦労が絶えませんでした。周囲から「がんばって下さい」と言われることも、何をこれ以上がんばれば良いのか悩んでしまい、つらい思いをしました。
	6	健康	原発の爆発の時に外にいたので、放射能への不安はずっとあります。県の健康調査で異常はなしとされましたが、今も不安がつきまっています。
	6	分離	故郷のお祭りの時期になると、一時帰郷の声がかかりますが、白内障の手術の直後だったりして、行けなくて残念に思っています。考えられますか？70数年住み慣れた地域が、交友関係が、全て一夜でズブズブになったことを。親しい友人らともバラバラです。
	7	経済的な損害	家賃の負担も、以前の倍近くで大変ですが、自分たちの置かれている状況で、切り詰めて生活していく決意です。
	7-8	希望	本当に大丈夫という確信があれば、政治家であれ、企業家であれ、学者たちであれ、あの原発立地地域に実際に居住してほしいと思います。東京の電力消費者の一人一人があの福島へ住めますか、あの地で生活できますか。「根本の何か」が違うのです。
22-1 (甲C22第1号証)	5	避難時の恐怖	週が明けて平成23年3月14日の月曜日の作業終了後、私が勤めていた会社で今後の対応についての会議が行われました。私は、テレビ報道とは異なる地元住民の声を伝え、30kmの概念を捨てて避難すべきだと主張しました。しかし、会社の代表の答えは「私は上からの指示がない以上は動けない。逃げるなら逃げてもいいんだよ。」というものでした。その言葉は、「避難したら、会社をクビになる」という意味だと、その場にいた皆が理解しました。家族を守るためには避難しなければならないが、避難をすれば会社を辞めさせられる。今まで仕事で頑張ってきたものが、全て無になってしまう。極めて過酷な選択を迫られたのです。
	6	健康	後から分かったことですが、14日深夜から15日にかけての放射性物質の放出量は今回の事故で最大だったそうです。特に半減期の短いヨウ素が、福島第一原発の南に位置するいわき市方面に大量に放出されました。ヨウ素は甲状腺ガンなどの病気を引き起こす可能性があるとのことで、子ども達、特に当時3歳だった二男の健康状態が心配です。二男は年齢も幼いですし、何より、今まで車酔いなどしなかったのに車の中で吐いてしまったのです。子どもは大人よりも発病が早いそうで、チェルノブイリ原発事故の被害者は5年目くらいから症状が現れたと聞きます。なぜもっと早くに避難しなかったのかと、今でも後悔と不安を抱えて毎日を過ごしています。
	8	避難時の恐怖	本当は野宿ではなくきちんとした宿に泊まりたかったのですが、手持ちのお金を節約するためにやむを得ず野宿をしました。車の中とはいえ、知らない土地で野宿をするのは本当に怖かったです。
	8	分離	平成23年8月16日から平成24年4月までは、家族は名古屋市、私は豊田市の会社の寮と、家族が別れて二重生活を送っていました。なぜならば、私が新しい会社に就職したばかりでいつまで続くか不安であったことと、子ども達が名古屋の学校へ転校したばかりで、すぐに再度の転校はさせたくなかったからです。この間、二世帯分の必要経費がかかることとなり、出費が増加しました。
	9	社会的世界	いわき市では、一戸建てに住んでいたため、県営住宅では、近所付き合いが大変でした。子ども達も、なかなか新しい環境になじめなかったようです。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	9	周囲への警戒心	仕事では、職場の人に突然、「家族は置いてやるから、お前は福島に帰れ。」と言われたこともあります。でも、私は、会社というところは、他人から悪口を言われたからといって文句を言うと、煙たがられてとばされる場所だと思っているので、クビになりたくない一心で我慢して黙っていました。
	10	健康	私は、避難生活を始めてから、飲酒量が増えました。「どうすんだろ、今後」と思うと、つつい飲んでしまうのです。また、私は、平成24年6月ころから、胃炎になりました。会社に変な人がいて嫌がらせをしてくるし、出世もこの歳では期待できないし、新しい会社で必要な資格の国家試験も受けなければならなかったし、地域の子供会の役員などもやらなくてはならず、ストレスがたまっているのだと思います。私は、平成24年6月以降、夜中に胃が痛くなり、近所の救急外来に駆け込んだことが、5回くらいあります。
	10	周囲への警戒心	地域の方々との人間関係は、私が子供会の役員をし、積極的に地域の集いやドッチボールの運営に協力してきたことから、良好な関係を築けています。しかし、先ほども述べたとおり、会社の人間関係では、理不尽な言動をされることが多く、他にも、私のバイクのタイヤに穴を開けられる、軽自動車の助手席の鍵を壊される、自宅に空き巣が入る等の被害にあっています。警察の話では、内部の犯行だろうとのことでした。
	10-11	経済的な損害	平成27年11月、私は豊田市内に築23年の中古住宅を2170万円で購入しました。代金は全額ローンを組みました。豊田市内に家を購入した理由は、社宅が危険だったこともありますし、何より、子ども達、特に転校ばかりさせてしまった長女にこれ以上人間関係で苦勞をかけたくなかったからです。
	11	貧困	全体的な生活レベルもかなり落ちました。子ども服も、昔はもっと良い物を買ってあげられていました。支援物資をたくさんいただけたのはありがたいし感謝しなければならないのですが、申し訳ないけど中古品ばかりに囲まれている気持ちは、あまり良いものではありませんでした。いわきでは、新築の家に住み、子ども達も自分が稼いだお金で買いたゲームや服、気に入ったおもちゃ、新しい勉強机に囲まれて暮らしていました。それなのに、避難後は収入が減った一方で支出は増え、生活レベルをかなり下げても、それでも、生活は苦しいです。
	12	喪失	ところが、月初めである平成23年4月4日(月)、いわき市の会社に戻ったところ、代表取締役と会社のナンバー2から、「今日からは新入社員と同じ仕事をしてもらう。」と言われ渡されました。理由は、すぐに避難されると困るからというものでした。課長昇進の話がいつの間になかったものにされており、さらには新入社員と同じ仕事をしろだなんて、これは避難した者に対する見せしめだと感じました。私は何とか話し合いで解決しようとしたのですが、話は平行線でした。
	14	社会的世界	長女は中学校、長男は小学校に転校しましたが、いわき市とは、環境も周囲の子どもの遊び方も違いました。周囲の子の中には、小遣いの使い方が荒い子がいたり、子ども同士のいざこざで骨折をする子がいたりして、子ども達は戸惑っていました。
	14	健康	また、二男は、幼稚園に通い始めましたが、環境が急激に変わったためか、朝、幼稚園に連れて行くと、「自分はこのまま置いて行かれるのではないか。」と不安になり、泣いてばかりいました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	14	社会的世界	長男と長女は、短期間の間に二度も転校をしたため、新たに友人を作ることが大変だったようで、なかなか、勉強に集中できない様子でした。
	14	周囲への警戒心	さらに、一度目の転校の時もそうでしたが、子ども達は、福島弁で話す友達にバカにされるのか、福島弁を出さないように話そうと、すごく苦勞をしていました。
	17	分離	震災直後から、実家の母とは連絡が取れなくなってしまっていました。後から聞いた話ですが、母は当初、大熊町のスポーツセンターに居たものの、原発事故のため大熊町には居られなくなり、近所の人達と共に一人で避難先を転々としていたようです。
	19	健康	二男は事故当時、幼稚園入園直前の幼児でしたので、特に健康被害が心配です。二男は、避難直後、1週間ほど熱を出しました。また、二男が小学校1年生の11月ころ、突如視力が裸眼で0.2、矯正視力でも0.5に低下しました。現在は矯正視力で1.0になりましたが、我が家は視力の良い家系なので、二男だけ視力が急に低下したのはおかしいと思います。避難直後の発熱にせよ、突然の視力低下にせよ、幼いときに被ばくしたことが原因なのではないかと心配でたまりません。
	19	健康	いわき市の自宅に一時帰宅をしているのは、家族の中では私のみです。平成23年8月ごろだったと思いますが、いわきの自宅自分で線量を測ってみたところ、1時間に0.5マイクロシーベルトという、通常の10倍以上の放射線が検出されました。雨樋の下など、場所によってはもっと高い値が出ました。これだけの高い線量の場所で作業をしていたので、一時帰宅の際に被ばくしてしまったのではないかと心配です。
	19	社会的世界	避難直後の平成23年3月に県が無料で行った甲状腺の検査を家族全員で受けました。しかし、その検査は外から機械を当てて計測するだけの簡単なものでした。結果は異常なしと言われましたが、本当にきちんと検査できているのか、不安です。
	20	希望	私は双葉町の人間であり、老後は双葉町で農業を継ぐつもりでした。故郷を失い、老後の希望も失ったことの精神的苦痛は図り知れません。また、入社以来15年以上も同じ会社で頑張ってきたのに、その成果が実ろうとした矢先に原発事故が起きて、昇進の夢も職も全てを失ってしまいました。原発事故によって、入社以来の私の努力が全て否定されてしまったのです。
	20	周囲への警戒心	同じ被災者といえども避難区域内とそれ以外では賠償額に大きな差があることもあり、同じ愛知県にいる福島出身者とも心の溝があり、親しく交流することもできずにいます。また、福島に残った人間からは、自分達だけ逃げたと思われるのではないかと不安に思っています。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	20-21	希望	私自身は、いわき市では自分で購入した庭付きの戸建てに住み、ブドウやスイカ、ナス、プチトマトなどを栽培していました。休みの日はホームセンターに行って、「べにかなめ」という植え込みに使う木を植えたり、雨樋をつないで具合の良いところに水が流れるようにしたり、色々な日曜大工をするのが楽しみでした。・・・避難後、社宅暮らしが約4年間続き、その間、自分の家の日曜大工をする楽しみもペットを飼う楽しみもなくなってしまいました。平成27年11月に自宅を購入したものの、農作物を作るためには土作りからやらなければならない、プチトマトやひまわりを少し植えるくらいしかできていません。いわき市に住んでいたときは妻が専業主婦でしたので土作りもできましたが、現在は妻も働かざるを得ないので、いわき市の自宅と同じような土壌をこれから作っていくのは時間的にも不可能です。また、この歳になって新たに2170万円ものローンを背負うことになってしまったこともあり、ペットを飼う余裕もありません。
	21	貧困	生活費を切りつめるために洋服なども安い物しか買ってあげることができません。長女は時々、「いわきでは新しく大きな家に住んでいたねえ。」と言い出すことがありました。こちらでは狭い社宅に家族5人で住んでいたのも、思春期で友達と遊んだりおしゃれを楽しんだりしたい時期に、家が狭いので友達を呼ぶこともできず、恥ずかしい思いをさせてしまったのではないかと心配です。
	21	貧困	私たち夫婦は共に大卒なので、長女も希望すれば大学に行かせようと思っていました。しかし、原発事故によって経済的余裕がなくなり行かせられる大学が少なくなってしまったこともあってか、長女は就職の道を選びました。
	21	喪失	長女は成人式が近いのですが、「成人式には行きたくない。」と言っています。豊田市の中学校には1年しか通っていないので、地元の地区の成人式に行っても友だちがほとんどいないからだそうです。原発事故で避難先を転々としたために、長女は1年ごとに違う中学校に通うこととなり、本当に苦労したのだと思います。
	23	貧困	私としては二男にも音楽教育を受けさせてあげたかったので残念でなりません。原発事故で避難したことによって二男が着ることができなくなった幼稚園の制服とかばんは、今も捨てられずに取ってあります。
	23	希望	東京電力に対する賠償の直接請求においては、いわき市からの避難ということで「自主的避難者」とされ微々たる賠償額しか支払われませんでした。しかし、私が避難したのは双葉町の人間としての判断です。仕事で得られるはずだった地位や故郷や定年後の希望を失った損害は「自主的避難者」の枠では捉えられません。
	15	経済的な損害	初めに確保できた県営住宅は、家賃こそ無料でしたが、部屋には生活用品が何もない状態でした。カーテン、照明、エアコン、冷蔵庫など、ほとんどは買いそろえました。」「避難後子供達の新学期が近づいていましたので、長女の中学校、長男の小学校、二男の幼稚園とそれぞれ転校手続きをして、3人分の制服、かばん、学用品などを買いそろえました。二男は平成23年4月からいわき市の幼稚園に入園することになっていました。このため、幼稚園の制服やかばんも買って用意していたのですが、一度も使うことなく出費が無駄になってしまいました。
	11	経済的な損害	いわきでは実家から米や野菜をもらっていたので、食料品をそんなに買う必要がありませんでした。愛知に来てからは米もおかずも買わなければならないし、外食も増えました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	9	分離	私は、子ども達と週末にしか会えなくなったため、いつも子ども達のこと が心配でした。
23-1 (甲C23第1 号証)	3	希望	近くに私の母親が住んでいること(福島県いわき市)、私達の職場がいわき 市であること、近所に住んでいる叔母をはじめとした親戚とのつながりが あること、子供たちの学校もいわき市にあること等から、将来的にも当 然、いわき市で生活するものと思って自宅を購入し、ここで暮らすことに していたのですが、原発事故のせいで、自宅も手放すことになってしまい ました。
	4	避難時の恐怖	事故直後には、原発事故の詳しい情報もなく、ただ、子供たちを家の中か ら出さないようにすることだけを心掛け、外出も、食料品や生活必需品の 購入など必要最小限にしていました。食事は、なるべく県外ものを購入し たいと思いましたが、スーパーの品揃えが良くなく、レトルト食品を食べ ることもしばしばでした。水は、飲料用にはミネラルウォーターを使用 し、風呂はやむを得ず水道水を使用しました。
	5	社会的世界	親戚はあたたかく迎えてくれましたが、やはり、親戚宅に子供3人と妻と やっかいになるというのは肩身の狭い思いをせざるをえませんでした。
	5	健康	いったんいわき市に戻ってからも、やはり、放射能の影響がとても気にな って生活をしていました。特に子供たちに対する影響が心配だったの で、スーパーの品揃えが回復するまでの間、福島県産の食品は放射能に汚 染されているおそれがあるから子供たちに食べさせないようにしていまし た。また、子供たちには、登下校以外では外に出さないようにしていまし た。さらに、体育の授業についても、外での体育の授業は欠席させまし た。給食もなるべく県内産のものは避けたかったのですが、食材について は避けることもできず、また、子供たちの栄養面においても、給食を全て 避けるということはしませんでした。ただ、牛乳だけは福島産だったので 飲まないように子供たちに指示し、学校にもその旨説明しました。
	6	周囲への警戒心	私たちは、放射能の影響が怖くてほとんど外出しなかったため、近所との 交流も途絶え、近所の皆さんとの会話もほとんどなくなってしまい悲しい 思いをしました。子供たちの件では、子供の同級生の親御さんと話をしま したが、「避難をするのは大げさだ」「たいしたことない」という反応の 方がおり、私たちの対応が責められているように感じました。
	7	分離	私の親や親族は、私達とは考え方が違い、住み慣れた地を離れるという考 えがない人達でしたので、この避難について、特に相談するということは ありませんでした。
	7	社会的世界	放射能線量の発表される数値も、コンクリートの上で図った数値であり、 子供が遊ぶ土や草むらでは、もっと高い数値が出るということを知りまし た。
	8	思い出の喪失	自宅から実家への移動、実家から現住所である愛知県新城市への避難の際 には、引っ越し費用を抑えるために、自分たちで荷物の積み卸しを行い、 2トントラックをレンタルして家財道具の全てを移動させたため、体力的 に非常につらいものでした。また、引っ越しを極力スムーズにするため、 使い慣れた物を捨てざるを得ず、精神的にもつらかったです。
	8-9	喪失	いわき市でのつながりは全て切れてしまいましたし、妻は現在も就職でき ていません。・・・全く地縁のない土地で生活することは大変なことだと は想像していましたが、なかなか慣れることができず、特に、妻はいまだ も昔(避難前)の暮らしとのギャップを感じる人が多いようです。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
		9 喪失	長女と次女は、たくさんの友人がいた福島から、全く知り合いもない新城市の学校に転校したため、友人作りが十分にできなかったことや、新城市の学校と福島の学校の雰囲気の違いになじむことができず、不登校になっています。いまは、気持ちの上向くときは、フリースクールに通っています。
		10 周囲への警戒心	避難先での生活は、これまでの生活とは全く違っており、私はストレスから脱毛や不眠に悩まされるようになりました。今でも覚えていることとしては、避難して間もない頃、近くのコンビニに行ったら、コンビニから出てきた客に、私の車のナンバープレート(いわきナンバー)を見て指を指されたことがあり、大変なショックを受けました。その一件のあとすぐに私の車のナンバープレートを、いわきナンバーから豊橋ナンバーに替えましたがこのように、私たち家族が避難者だと知られることが怖かった時期がありました。
		10 健康	子供たちは、平成26年1月に豊川市民病院で甲状腺検査を受けたのですが、その検査では特に問題はないとの結果でした。しかし、今後、子供たちが成人し、結婚し、子供が出来るという将来の場面において、今回の放射能の影響がいつ出るかもしれないかと思うと、不安でなりません。
		10 喪失	私は、子供たちのことを考え、一刻も早く避難させたいと思っていましたが、私の母親(子供たちの祖母)は、避難には反対でした。母親は、私ではなく妻に対し、私たちが避難して、私や子供たち、つまり、子供や孫が遠くに行ってしまうことを愚痴っていたようです。
24-1 (甲C24第1号証)		3 避難時の恐怖	屋内退避といっても線量が高いということで、南相馬に物資がこず、冷蔵庫の中はカラに近い状態でしたが、店は閉店しており、食べるものもガソリンもない状況でした。避難所である原町第一小学校へ食料を分けてもらおうと思い、行ったこともあります。避難所は避難されている人の分なので屋内退避の人には分けられないと拒否されました。避難所も食料等の物資が不足していたのだと思います。
		3 健康	被ばくを避けるため、戸や窓を閉め切り、家からあまり出ないようにし、洗濯物も家の中で干すようにしました。外出する時は帽子とマスクを着用し、帰宅後は戸外で服から放射性物質を落とし、家に入ると着替えをし、シャワーを浴びたりしました。
		3-4 健康	・・・外にいる自衛隊や警察の人が完全防護服を着ているので、これはかなり危険な事態ではないかと思いました。情報がなく大変不安な毎日でした。
		4 分離	両親にも避難を勧めましたが、両親ともに体が心配で避難はしないとのことで、私たちだけで避難しろ、自分たちは大丈夫だとのことでしたので、私たちだけで避難することにしました。
		4 健康	父によれば病院が閉鎖していて日頃飲まなければならない薬を(母が)飲めなくて腎臓病を悪化したという話でした。
		5 健康	知人宅に滞在中、食事や身の回りのことで大変お世話になりましたが、やっぱり自分の家ではないので、「気を使わないで」といってくれますが、やはり、知人を含め知人家族に迷惑をかけていると思い、心苦しい日々を過ごしました。知人宅は借家でしたので、大家さんが「いつまでいるの」という感じで何度か見に来られ、私たち夫婦にとって、知人宅での居候生活は非常にストレスとなり、先も全く見えないこともあって、心身ともに疲れ果てました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	5	周囲への警戒心	近所の方にも、福島から避難していると話さざるを得ず、そうすると放射線で被ばくしているなど、あまり気持ちのいいことは言われず、原発事故がなければ、こんな生活をする事もなかった、なんでこんな目に合わないといけないのかとも思いも日に日に大きくなり、心身ともに限界がきつてつありました。
	6	経済的な損害	南相馬のアパートも帰ってくるつもりでしたので解約せず、その家賃も請求されており、二重生活の上に仕事がないという状況で将来への不安は膨らむ一方でした。
	6	分離	名古屋は全く初めてで知らない土地であり、なによりも今後どうなるか全く分からず、相談する人も誰もいない状況が、こんなにも不安であり、ストレスがたまるものだと初めて経験しました。
	7	喪失	父が平成24年死亡したとの連絡を受け、同日から7月18日まで福島へ戻りました。・・・父の死に目に会えませんでした。
	8	喪失	母も事故がなければいつもの薬を飲んでいただいでしょうし、薬を飲んでいけば入院することも、こんなに早く死ぬこともなかったと思います（死因は多臓器不全でした）。父も事故後のストレスがなければ脳血栓を発症することもなかったと思います。親の面倒を見るために南相馬に引っ越したのに、本件事故により両親の面倒を見ることができなくなり、大変残念で甚大な精神的苦痛を受けたと考えています。
	9-10	希望	事故後両親ともに死亡し、本来の目的を今回の事故のために果たすことができなくなり、南相馬に戻る根本目的がなくなりました。
25-2 (甲C25第1号証)	10	社会的世界	平成19年に結婚し、子供を産むことも考えていましたが、事故で避難し、不安定な生活の中で自分達の生活で精いっぱい子どもを産むことも控えてきました。放射線は目に見えませんが、場所によって数値が異なり、実際に線量計で測った人に聞くと実際の数値とモニタリングポストの数値が異なっており、国は安全だと言いますが、どこまで信用していいかわかりません。
	3	自然的世界	平成23年6月の母子避難では、夫がまだ郡山で仕事をしていたこと、マンションのローンも残っていたことから、長男の中学入学時には戻ってくる予定でした。しかし、郡山の線量が事故前と同じにならず、家の周りの線量も下がらず、特に草むら、側溝はかなり高い線量だったことから、これ以上、郡山で生活することは子どもの成長に悪影響があると思い、戻らないことを決め・・・。
	4	健康	郡山での生活は、子どもたちは、マスク、長袖、帽子を着用し、外遊びは一切できない状況で、ストレスを感じていました。4月から6月までの2ヶ月間、子どもたちは、学校や幼稚園、外で運動することができなくなり、今後の子どもの発育に影響があるのではないかと、子どもたちのストレスを考えると不安がありました。
	5	経済的な損害	子どもたちの転校・転園により、体操着・制服等準備しなければならないものがたくさんありました。
	5	喪失	長女は、新しい保育園にすぐには馴染めず、泣きながら通園する日々が続いていました。
	5	経済的な損害	私は、福島からの避難の際に、西尾市での生活上自動車が必要となり、中古で軽自動車を購入しました。このため、購入費用に加えて、自動車保険や自動車税等のイレギュラーな出費が重なり、その都度、預貯金を取り崩して赤字を補填しています。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	6	経済的な損害	夫の仕事については、家族の自主避難に伴い、少しでも近くの勤務地への異動を希望し、職務が本社から店舗のスタッフになったことにより、年収も約120万円ダウンしました。一時は退社も考え、将来に対する不安を感じていました。
	6	分離	平成26年6月からは、夫は、福島県郡山市に転勤することになりました。このため、夫は、同市で単身赴任生活を送っていましたが、当初、私たち家族3人は、最低月に一度は同市に赴いておりました。長男が中学三年生になり、なかなか郡山まで面会に行けなくなってからは、夫が月に一回程度、金曜の夜から日曜の朝まで西尾に来る状態でした。子どもたちは、父親とあまり会えず、寂しい思いをしていました。
	6	経済的な損害	夫は、仕事が多忙なため自炊をする余裕がなく、全て外食をせざるを得ませんでした。このため、どうしても食費が多額になり、月に9万円はかかってしまいました。他にも、生活用品やクリーニング代等の費用もかさみました。また、私たち3人が郡山市に行くためには、交通費である新幹線の往復料金だけ考えても、合計9万円近くとなり、大きな負担となっていました。
	7	健康	長女は、平成25年9月に甲状腺検査を受けましたが、判定A2(のう胞2個以上、のう胞の大きさ3.0以下)という結果を受けました。子どもには、将来にわたって甲状腺の病気の心配があるので、・・・。
	8	健康	当時、私は、ガソリンがなくなって給油ができなかったので、食料の買い出しや給水などで、子どもと一緒に自転車で外へ出てしまっていました。平成23年3月16日の朝も、避難のため、徒歩で移動しています。
	8	健康	郡山の放射線量が上がっていたことを知らせてくれていたら、子どもたちを外出させることはしていませんでした。特に、長女は・・・、甲状腺検査でも心配な結果が出ているので、将来、結婚、出産をするまで、それ以降もとても心配をしています。
	8-9	分離	夫の実家は、福島県須賀川市にあり、避難前は両親との行き来も頻繁にありましたが、今では私と子どもたちは年に1回しか会えなくなりました。両親にも寂しい思いをさせてしまっています。
9	喪失	子どもは、転校の際、友だちに避難することをなかなか言い出せませんでした。子どもなりに、みんなに申し訳ない気持ちがあったようです。	
26-1 (甲C26第1号証)	4	希望	私は白河の出身であり、保険代理店という仕事柄、人とのつながりが重要で地元深く根付いていました。このようなことから、他の地域では人とのつながりもなく仕事が成り立たず生活していくことはできません。地元の昔からの友人も多く、友人同士でいろいろなイベントなどをしていました。
	4-5	分離	これから結婚や出産をするであろう長女の将来を第一に考え、妻の友人が所有する名古屋市の・・・一軒家に妻と長女のみを引っ越しさせることにし、平成23年6月4日に引っ越しをしました。
	5	喪失	私は、避難生活の間ほとんど仕事ができませんでした。また、会社の他の社員は避難しなかったため、会社に戻った際に社員から「会社や従業員を放り出して避難した」「社長が逃げたら取引先の信用がなくなる」などと追及されて、社員に対して謝罪することになるなど厳しい立場に追いやられることになりました。



原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	6	喪失	愛知県津島市の妻の母の家にお世話になったものの、妻の母には再婚した夫がおり、妻との血のつながりがなく、日にちが過ぎるにつれて母に対して「いつまで娘夫婦を置くつもりなのか。」などと非難するようになりました。それを知って私たちは母の家には長く住むことはできないと思いました。
	6	健康	平成23年3月27日に家族で白河市へ戻りましたが、津島市にいた際にインターネットでチェルノブイリ原発事故など情報を得て、放射線による健康被害があるとわかり、被曝おそれて自宅の窓は全く開けず外出も極力控え、やむを得ず外出する時は必ずマスクを着用し、飲料水は全てペットボトルのものにしました。
	6	健康	・・・将来どうなるか不安を抱く家族には強いストレスになっていきました。そして、安全であるとの保証が全くない状態から、妻は悩み過ぎて頭に大きな円形脱毛症ができてしまいました。
	7	健康	長女は不慣れな土地や友人がいないことから中学校生活に強いストレスを感じるようになり、不登校気味になってしまいました。
	7	健康	また、長女は中学2年生の頃甲状腺が大きく腫れて、病院でパセド一病と診断されました。医者によると放射線によるものか、ストレスによるものか判断できないと言われていました。
	8	経済的な損害	白河市と名古屋との二重生活に伴い、今まで生活費として300万円以上の余分な出費がありました。妻や娘に会うために2ヶ月に一度くらい名古屋に行きますが、1回に3万円かかるので、合計90万円以上支出しており、これからも支出し続けることとなります。
	8	健康	その後の白河市での生活は外の放射線量よりも内部被曝のことを不安に考えていました。妻は、水道水は飲まず、洗濯物は室内で干して窓は極力開けない。外に出るときはマスクをするという生活を送っていました。
	9	希望	白河市は小さな町で、町に出ればいつでも知り合いに会うような町です。そのような人間関係はとても心地が良く、人間はコミュニケーションとコミュニティのおかげで人生に幸せを感じることができると思いますが、・・・白河市を基盤として人生を過ごすという吉成家の生活設計は根本から崩れました。二重生活を続けなければならないという現実に脱力感さえ感じます。
	9	周囲への警戒心	自主避難をしている人は、放射能に対して強い不安を感じています。しかし、地元で生活を続けている人は、放射能に対する不安を口にすると強く嫌がります。観光や農業に携わっている人は風評被害を拡散させているのは自主避難者だとも言っています。
	9	周囲への警戒心	その一方で他県の人と話をし、娘が愛知県に自主避難をしている話をすると「避難してよかったね。将来結婚もできるし、赤ちゃんの障害の不安もないしね。」と言われたりもします。福島県の人や子供達をそういう風にみているのだと思うと、悲しい気持ちになりました。
27-1 (甲C27第1号証)	5	健康	母が入退院を繰り返すだけでなく、姉がメニエール病を発症して倒れ入通院をしたり、長男が原因不明の発作を起こして倒れたり、私自身も仕事や人間関係の変化から心療内科に通院するなど、避難当初約1年くらいは全く気の休まる時間がありませんでした。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	7	健康	原発事故発生の直後は、様子が全く分からず、屋外で様々な行動をしていました。水を確保するのに屋外で2時間も3時間も並び続けました。もし、その時点で放射線量がきちんと発表されていれば、絶対に屋外での長時間の列に並ぶことがなかったのにと、悔しい思いがします。とりわけ小学生の長男を長時間屋外に立たせてしまったことは、いくら当時周囲の小学生たちが皆そうしていたからとはいえ、親として本当に申し訳なく思っています。原発爆発時以降に大量の放射性物質が降りかかったわけですが、その時期に線量の高い屋外での行動を余儀なくされ、家族全員が相当量の被曝をしたことは明かで、これが今後どう影響してくるか、とりわけ当時小学生だった長男の健康被害についてはとても不安です。
	7	自責	いわきの実家は父が建てたもので、墓も含めて、私たち家族はいわきで骨を埋めるつもりで生活していました。特に母には、父の残した家と墓を守らなければならないという強烈な使命感が今なお残っており、「できることならもどりたい。」といつも言っています。
	7	自責	しかし、体が不自由な母が単独でもどれるはずもなく、私たちが一緒になければその願いがかなわないこと、私たちは放射能汚染が恐いので帰還する気になれないことを、母が何よりもよく知っています。老齢の母にこのような思いをさせていることを、本当に気の毒に思い、東電や国には強い怒りの気持ちがあります。
	8	社会的世界	いわきの私たちの家も、本来なら放射線管理区域に指定されるくらいの線量だったのに、いつのまにか基準の線量数値自体が変更されて「危険ではない」ことにされてしまいました。こんな馬鹿なことはないと、強い憤りを覚えます。
	8	社会的世界	甲状腺がんの子どもがすでに130人以上出て、人口比だと100倍以上の発生率だといいます。それでも「因果関係ありとは言えない。」と強弁する国と医療機関が信じられません。それでは、今他県を全県調査すれば、どこでも100倍超の甲状腺がんの患者が発見されるのでしょうか。「発見されていない甲状腺がん患者」は自然にがんが治癒していつているのでしょうか。とても信じられません。まるで戦時中の大本営発表で、私には強い不信感がぬぐえません。
	10	喪失	私たちは放射能がこわいので避難しましたが、福島に残っている人たちはどんなに心に思っても「放射能がこわい。」と口にすることもできないのです。そして、避難の道を選んだ私たちと、福島に残った人たちとの間には大きな溝ができてしまいました。
	4-5	避難時の恐怖	3月15日に、家族4人、車2台に最低限度の生活用品を積んで福島空港へ出発しました。しかし、福島空港へ着いてみると、そこは避難の人たちでごった返しており、およそチケットが手に入るような状況でもなかったので、そのまま車で名古屋まで走ることにしました。栃木まで走ったところで、太平洋側を走ったのではガソリンが手に入らない状況であることが分かり、いったん福島までもどって、新潟→長野→岐阜→名古屋、というルートに変更しました。こういうふうによくと簡単なようですが、いわきから遠く走ったこともなく、道路についてもまったく知識がない状況で、手探りで必死に走り続けていたというのが実情です。
	6	経済的な損害	私と姉の収入をあわせても手取り21万円程度で、これに数万円の母の年金を加えて一家4人が生活しています。避難後しばらくの間の生活で、いわきでのそれまでの蓄えは底をつきました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
28-2 (甲C28第1 号証)	4	社会的世界	私は、本件当時は無職でしたが、いずれは夫とともに郡山市内で暮らそうと考えていました・・・。正社員として働ける先を探していたのですが、正社員の募集は少ない印象でした。・・・(募集されていた団体が)まずは面接を受け、面接を受けた後に講習を受けなければならないとのことでした。さらに、・・・実際に就職する地域で受けることが望ましいと言われました。問い合わせた時点では浪江町に住んでいるけれども、いずれは郡山市で住む予定であることを伝えたところ、面接を受ける前に住民票を移動させ、面接日にその住民票を持参するように言われました。そこで、私は、当時はまだ浪江町に住んでいましたが、平成23年1月に住民票だけ夫宅に移動させました。住民票を移動させた後も、実際にはそれまでと変わらず、浪江町の自宅で家族と暮らしていました。その団体からは2月中に不採用通知が届きました。私は、就職先は決まらなかったものの、引き続き浪江町に暮らしながら、時間をかけて郡山市内で正社員としての就職先を探せば良いと考えていました。
	5	分離	(私が両親と別に単独で避難する状況で：引用者挿入)夫が勤務先から避難するよう指示されました。私は、家族となかなか連絡がとれない状況で、家族を福島に残して夫と一緒に県外に避難することについて、とても迷いました。ですが、やはり一人で夫宅に残ることは不安ですし、何より夫の会社に迷惑をかけることになりますので、私も夫と一緒に一時的に名古屋市の夫の実家に避難することにしました(平成23年3月18日～28日まで)。
	6	経済的な損害	名古屋市へは福島空港から千歳空港へ、そこから中部国際空港へ向いました。戻りは、名古屋から那須塩原までは新幹線、そこから郡山まで臨時バスで戻りました。名古屋市への避難交通費については、夫の往路分は夫の勤務先が負担してくれましたが、当時、私は未だ結婚しておらず、夫に扶養されていたわけではありませんでしたので、全て自己負担でした。
	7	社会的世界	・・・一時避難から戻ってからの郡山の様子は以前とは全く変わっていました。街で人を見掛けることはなくなり、ほとんどが避難している状況でした。スーパーは一度の入店で15分間など入店できる時間に制限があり、商品棚もほぼ空で、物を奪い合う人たちもいました。しばらくは水道が止まっていた為、入浴が出来ませんでした。当然洗濯も出来ないの、遠くにあるコインランドリーまで行き、何時間も並びました。洗濯物や布団を外に干すことはできず、エアコンの使用も控えました。スーパーが通常通り営業するようになってからは、食材は値段が高くてもできるだけ遠方のものを買ひ、水はペットボトルのものを使用するようになりました。
	7	健康	平成23年6月ごろに私の妊娠が分かりました。それからは、病院からの指導で、外出は最低限必要なものだけに限られました。妊婦検診や線量計の更新、母子手帳の交付など、赤ちゃんや生活のためにどうしても必要なとき以外は外出しないようになりました。外出するときは、長袖長ズボン、マスク着用で、夫がいるときは夫の車で出かけ、一人での移動は必ずタクシーを使い、外気にさらされることを極力避けるようにしました。雨や雪の日の外出は、濡れることのないよう特に注意しました。アパートの部屋と夫の車には空気洗浄機を取り付けました。食材は、名古屋の義母から送ってもらうこともありました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	7-8	健康	私は、被ばくする夢にうなされて起きることがよくありました。本件事故が発生してからそのような夢を見るようになったのですが、妊娠が分かってからは頻繁に見るようになりました。知人からは福島県で生活し出産することに対し、「奇形児が産まれたらどうするのか」などと言われました。私自身、お腹の赤ちゃんが無事に生まれてきてくれるか、お腹の赤ちゃんに悪いことをしているのではないかなど、自分でどうしたら良いのか分からず、不安でたまりませんでした。目に見えない放射線との闘いで精神的に疲れ切ってしまい、過呼吸をおこしたり、全身に蕁麻疹が出てしまうこともありました。毎日の暮らしが異常でした。私は、とても神経質になり、肩こりが酷く、整体に通うようになりました。
	8	健康	私は、線量が多少なりとも低い地域に引っ越すことができ、少しはほっとしたのですが、外出を控えていて運動不足だったことや、精神的に不安定だったせいもあってか、悪阻が長引き、毎日通院し、点滴をしてもらわなければならなくなりました。
	9	喪失	私は両親や兄を福島に残していくことに罪悪感を感じました。福島の親戚からは、どうして避難するのかと言われました。福島の友人達には、「避難できるのが羨ましい」と言われました。福島の皆を捨てるような気持ち、罪悪感のようなものがある一方で、皆から責められているような気持ちにもなりました。言葉では言い表せないほど複雑な思いでした。避難を決めたことで、福島の親戚や友人達との間に目に見えない溝のようなものができてしまいました。
	10	周囲への警戒心	愛知県に来てからは、車が福島ナンバーだった為か、実際に車を指さして何かこそそとと言われてたり、車にイタズラされることがよくありました。
	10	周囲への警戒心	買い物へ行くと、「安くても福島産は絶対買わない」と話しているお客さんの何気ない言葉をしばしば聞き、事故から一年以上経っていてもそうなのだとは心がとても痛みました。
	10	周囲への警戒心	避難者が集まる会や催し物などに参加することもありましたが、同じ避難者の中でも考え方の違いや差別があり、関東圏からの避難者の方には、私達が福島出身だということが分かると、「本当に被ばくしてるんだから近付くな」と言われたこともありました。
	10	周囲への警戒心	私は、避難者同士の中でも心を許して話すことはできないと思いました。私は、長女が大きくなり、将来結婚する時にこのような差別を受けたらと思うと、本当に辛くてたまりません。
	10-11	経済的な損害	生活するうえで大変だったのは、夫の収入が途絶えたことです。・・・平成23年の年収は約345万円程でした。ですが、愛知に避難してからは、収入がゼロになりました。夫は、愛知に避難してから程なく就職先を探し始めました。私と長女を養うため、正社員として働くことのできる場所を探していました。ですが、なかなか雇っていただけるようなところは見つかりませんでした。
	13	社会的世界	初めての妊娠で、右も左も分からないなか、体調が悪くても浪江町の実家を頼ることもできず、ただでさえ不安なのに、被ばくの不安とも戦わなければなりません。精神的にも不安定になりました。・・・でも、お腹の赤ちゃんを守るためには、自分ができる限りのことをしなければなりません。・・・私は、こんな危険なところで出産に臨むことに、お腹の子にとっても悪いことをしているという後ろめたい思いと、それでも何とかこの子を放射能から守りたいという思いとで一杯一杯でした。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	14	希望	私には、浪江町と一緒に暮らす父母と兄がいました。私にとって大切な家族です。そのような家族やお世話になった方々に結婚の挨拶をし、きちんと結婚式も挙げ、郡山で新婚生活を送ることを考えていました。私は、結婚して浪江町を離れるときがきて、夫と一緒に、子どもが生まれれば子どもも連れて実家に里帰りをしたり、幼なじみの友人達とも子ども連れで遊んだり、特別でなくても、ありふれた極々普通の生活を考えていました。このようなドタバタのなかで結婚することなど、夢にも思いませんでした。
	15	喪失	私たちは、これ以上、生まれたばかりの長女を危険に曝すわけにはいきませんでした。色々な事情で福島を離れたくても離れられない方々や、福島の安全を信じたい一心で止まる方々、色々いらっしやっと思います。そのようななか、私たちは、子どもの健康を第一に考え、福島を離れることを決意しました。県外の知人からは福島での出産について「信じられない」と言われ、県内の方からは「福島を捨てるのか」と言われました。福島の親戚からも、なぜ避難するのかと言われました。私は、福島の方達から、「自分たちが、そんな危険なところに住んでいるというのか。」「福島から避難する人がいるから、福島が危険だと思われる。」「自分たちだけ避難して。」と言われていたような感じがありました。
	15	周囲への警戒心	その一方で、福島県外の方達、避難先で出会った方々からは、「福島で被ばくしてきた人」と思われているように感じる言葉も聞かれました。私たちは、どこにも居場所がないような感覚になりました。
29 (甲C29第1号証)	8	健康	私は、事故の当日も福島第一原発の4号機にいました。ですので、私は、体に異変がいつか起きるのではないかと不安が拭えません。原発の協力会社を辞めるときにホールボディ検査は受け、被曝量は少なかったのですが、やはり放射線は目に見えないですから、不安は拭えません。
	8	健康	今後妻との間に新しい命が宿ったとして、生まれてくる子どもに異変がないだろうか不安でいっぱいです。
	9	喪失	都会には、福島に居た頃のような、近所との密接な地域の結びつきは全くありません。田舎とは違い、あいさつしても無視されたりすることには、最初はどうしても慣れませんでした。全てにおいて人間関係が希薄であり、地元が一緒の妻がいるのが救いです。
	9	周囲への警戒心	引越しても車のナンバーはいわきナンバーなので変な目で見られているのではないかと感じてしまうこともよくあります。
	9	分離	私たち家族は全国ばらばらに三か所に散らばってしまって……。事故後は、家族は年に1回集まれるかどうか、といった状況です。
	10	経済的な損害	私たちはたまたま富岡に掃除や整理のために戻っていたのですが、それも頻繁にできるわけではありませんから、作業は少しずつしか進まず、小動物の糞や痛んだ家の修繕などもできておらず、ほぼ手つかずの状態になっていました。物を持ってこようにもネズミの糞のにおいもひどいですし、行くたびに雨漏りの数も増えていきました。こういったことから、私たちは家族で話し合い、この家に住むのを諦めて取り壊すことにしました。
	10	分離	多くの友人は、地元のいわきや東京近辺にちりぢりになってしまっています。
	7	自然的世界	私たちは、豊かな自然の元で、自分でとったりもったりする新鮮な野菜や山菜、魚介類など食べる生活に幸せを感じていました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	4	喪失	また、親戚だけでなく、地元の人とのつながりも強く、友人との関係も密接でした。その時はあまり意識しませんでした、今にして思えば素晴らしいふるさとです。
30-2 (甲C30第1号証)	4	分離	私は、平成23年3月15日、子らを乗せて夫が単身赴任していた岐阜県下呂市へ向けて、自動車に乗って避難を開始しました。同居していた夫の両親と(夫の)二人の弟は、夫の元へ行っても全員が生活するスペースがない為に避難を諦めました。
	4-5	分離	私は、避難中、長時間の運転による苦痛に加え、夫が当時、単身生活していた会社の宿直室で、今後生活していくことができるのかという不安と、子らを友人と引き離さなければならなかったこと、家族や親戚と別れなければならなかったことに、深い悲しみを感じました。
	5	分離	私は、本件事故によって、南相馬市原町区の自宅と一緒に暮らしていた夫の両親および弟らと別居することになりました。また、私の実父も南相馬市で生活していましたが、私は、本件事故によって、私の実父とも遠く離れて暮らさざるを得なくなりました。私は、毎日、高齢の義理の父母および実父の健康を心配しながら離れて生活しています。
	6	健康	私は、本件事故発生後、生活環境と人間関係の変化、長女のいじめ被害等で強いストレスを受け続けました。その結果、私は、平成23年12月1日から平成24年12月7日までの間に、歯が6本も抜けてしまいました。私を治療した歯科医師の診療内容証明書には、人間関係の変化によるストレスで歯周病が進行悪化した可能性がある」と記載されました。
	7-8	周囲への警戒心	長女は、本件事故の為に、平成23年4月から避難先の下呂市内の中学校に入学しました。しかし当然ながら中学校に友人は全く居ませんでした。長女は、本件事故により、入学する中学校が急に変更になり、準備していた南相馬市の中学校の制服や体操服、カバン等が使えませんでした。その為長女は、不要になった古い制服等を学校から借りて入学しました。長女は、新しい環境に慣れようと努力しましたが、同じクラスの数人から、「放射能がうつる。」「言葉が変。」と言われ無視されました。さらに(長女)は、「南相馬市では楽しい学校生活だったのに、なぜ、自分がこの様ないじめに遭わなければいけないのか。」という思いがあり、深い精神的苦痛を受けました。
	8	周囲への警戒心	長女は、平成23年の1学期はいじめに耐え、なんとか通学しましたが、平成23年6月からは、ついに中学校に行くことができなくなりました。・・・長女は、たまに登校しても、スクールカウンセラーの先生と一緒に保健室で過ごし、卒業まで教室でクラスメートと一緒に授業を受けることは出来ませんでした。長女は、中学校の卒業式も校長室で、一人で卒業証書を受け取りました。
	8	健康	長女は、平成23年6月以後、自宅に引きこもるようになり、家族との会話が減りました。また長女は、平成23年6月頃から、昼夜が逆転した生活になり、深夜徘徊もするようになり、体重が急激に増加しました。
8	健康	さらに長女は、平成25年3月、福島県が実施した検査で、甲状腺に嚢胞が見つかりました。長女は、平成26年3月には、II型糖尿病、脂肪肝、高尿酸血症の診断を初めて受けました。長女は、本件事故前には、健康診断で異常が指摘されたことはありません。長女の主治医(が作成した)の医療照会状では、「不登校になった後の肥満増悪が顕著」と書かれており、本件事故による避難の結果生じた不登校とそれに伴う生活の乱れが、長女の病気を引き起こしたことは明らかです。	

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	9	周囲への警戒心	また長女は、平成25年4月頃から、家出をしたり、リストカットをするようになりました。長女は、同じころ、かみそりで制服、カバン、教科書、カーテン、布団を切り刻みました。
	9	希望	本件事故によって、長女は、望まない転校をすることになり、中学校生活の楽しみを全て奪われ、部活動はおろか全日制の高校に行くこともできなくなりました。また正社員の就職先を見つけることが難しく、平成29年3月に通信制高校を卒業後、現在まで正社員での就職は出来ていません。
	10	健康	長男は、平成25年3月、福島県が実施した検査で、甲状腺に嚢胞が見つかりました。東京電力は、甲状腺の嚢胞と本件事故との因果関係を否定しますが、本件事故と嚢胞が生じたこととの因果関係を、客観的かつ明確に証明することは現在の医療診断技術では事実上不可能です。私は、長男が、被ばくしたことが原因で甲状腺に嚢胞が出来たのではないかと考え、将来の健康被害の拡大を強く心配しています。
	10	喪失	長男は、長女のように不登校にはなりませんでしたが、友人が多くいる南相馬市から突然離れることを余儀なくされ強い精神的苦痛を受けました。
	11	社会的世界	東京電力は、宅地の除染が1度なされたことを根拠として避難継続の必要性がないと主張しますが、風雨の影響で放射性物質が農地や山林から宅地に流入する危険は高く、私たちは、被ばくについて、現在も強い不安を感じています。
	11-12	健康	私は、今、南相馬市の自宅に子らを連れて帰宅すれば、子らの甲状腺嚢胞が悪化する危険があると考えています。現時点において、長女と長男の甲状腺嚢胞が本件事故によって生じたとは証明できないとしても、本件事故の影響がないとは言い切れません。私たちは、本件事故がなければ、放射能によって、将来病気を発症するかもしれないという不安に悩まされることはありませんでした。私たちは、今後も、被ばくの不安を感じながら甲状腺の治療と健康診断を継続して生活をして行かざるをえず、著しい苦痛を受けています。
30-2追加 (甲C49)	3	周囲への警戒心	長女は、同級生から、すれ違いざまに「放射能帰れ。」と言われたり、貸した消しゴムを返して貰えなかったり、同級生に近づくと「放射能が移る」と言われ避けられるという経験をしました。
	3	経済的な損害	長女は、中学1年の2学期以後自宅に籠るようになり、リストカットや学用品をカミソリで切り刻むなどの行為を起こすようになったので、私は、付き添いのために仕事に就くことができませんでした。
	3	周囲への警戒心	長女にとっては、震災が起こっただけならまだしも、原発事故によって大好きな友人と急に離れ離れになり、突然知らない中学校に入学することになり、そこで言葉の違いや放射能汚染を理由に嫌がらせを受けたことは、到底受け入れられる環境変化ではなかったと思います。そのため私は、長女の気持ちに寄り添い、できるだけ近くに居るように努めました。
	4	健康	国の基準(1年間の積算放射線量が20ミリシーベルトを超えない地区は帰還可能)は、根拠が全く不明であり、子らの健康について安心できる具体的な根拠はありません。また私の自宅がある南相馬市原町区馬場には、平成24年8月末時点において72地点もの特定避難勧奨地点(ホットスポット)が存在していました。私は、自宅の周囲にこれほど多数の放射能汚染のひどい地点がある状況において自宅が安全だとは思いませんでした。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	4	自然的世界	私は、平成28年8月、自宅に一時帰宅した際に、自宅の庭と畑の土を持ち帰り、民間の団体にセシウム含有量を測定して貰いました。その結果、自宅の畑の土からは、1kgあたり5389Bqのセシウムが測定されました。また自宅の庭の土からは、1kgあたり1543Bqのセシウムが測定されました。
	5-6	自然的世界	私の自宅では、本件事故前は庭や田畑で取れた農作物(ゆず、梅、野菜、きのこ、米、たけのこなど)を出荷し、または自家消費し、井戸水を飲んでいましたが、現在、私の自宅ではきのこ類、たけのこ、山菜の摂取や出荷が禁止されています。また南相馬市の一部地域では、今でもコメの出荷や野菜、果実の出荷が制限されています。私たちは、井戸水も使用できません。このような状況で、私たち家族は、今でも事故前の生活に戻ることができたとはい底感じていません。
	6	自然的世界	福島第一原発内の放射性物質は処分の目途が立っておらず、私たちは、現在も大雨、台風、地震などが有るたびに、放射性物質の影響を気にしながら生活しています。
31-1 (甲C31第1 号証)	4	喪失	いわき市は広いので、地域によって、原発から住居までの距離に大きな開きがあります。いわき市の中でも、住んでいる地域によって放射能に対する意識が違い、同僚の間では、それを巡ってもめることが多くなりました。私は、いわき市北部に住んでおり、原発から近かったので、放射能の影響に敏感にならざるを得ませんでした。出社の必要性に関しても、意見の相違がありました。私は、ガソリンが入手できずに不安を感じていました。ガソリンを減らしたくないのに、仕事も無いのに出社しろ、という不合理な職務命令には従えないと思いました。社員の人間関係がギクシャクし、仕事を継続するか、転職するか、悩みました。
	4	喪失	家族との話し合いでは、私の両親と妻の両親の間に、避難についての考えの違いがあり、かなりもめました。事故当時、長女が1歳半と幼かったので、どうしたら放射能の影響から守ることができるのかと、悩みました。
	4-5	避難時の恐怖	私の住んでいたところは、避難の対象となった区域から5キロしか離れておらず、隣の町は、ギリギリ30キロ圏とのことでした。ですから、避難区域外といっても、まったく安心できませんでした。3号機の爆発のニュースをライブ映像で見たこと、余震もあったこと、自衛隊が避難を呼びかけていたこと、アパート(8～10世帯)の人達が一斉に避難していったことなどから、パニック状態のまま、避難することを決断しました。
	5	避難時の恐怖	避難をするといっても、道路は通れるのか、家族を連れて愛知県までたどり着けるのかなど、何も分からない状態でした。ガソリンは、いわき市では入手できなかったもので、減っていく一方で心配でした。食料もありませんでした。避難ルートについては、とても悩みました。海沿いの道が崩れていると聞いて、はじめは、真ん中の4号国道を目指しました。しかし、渋滞と聞き、山道を通り、6号線を経て、千葉の親戚の家に向かいました。正確な情報がなく、振り回されました。
	5	決裂	親戚の家で一晩泊めてもらう予定でした。事前に、行かせてもらうという連絡は入れていたのですが、道路状況も不透明で、何時に着くか、予定を知らせることはできませんでした。また、避難に関しても、親戚は、避難するほどのことではないと考えていたようでした。この親戚とは、もともと折り合いがあまりよくなかったことに加え、初めての避難経験で感情的にもなり、泊めてもらうことができませんでした。



原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	5	避難時の恐怖	これからは、私は福島、妻と長女は愛知県と二重生活になるかもしれないので、少しでも節約しようと、車中泊にしました。しかし、まだ寒かったため、長女に風邪をひかせてしまいました。
	6	健康	私は、事故後から体調がおかしかったのですが、4月頃には、鼻血が出ました。
	6	健康	長女も鼻血がよく出ました。病院へ行って検査しても原因が分からず、体調不良を被曝につなげて考えてしまい、とても不安でした。
	6	分離	避難生活では、特に、妻の精神的な負担が増えました。福島では、私と妻と双方の両親のサポートがありましたが、避難先では、長女が風邪をひいたときなど、頼れる人がいなくなってしまいました。また、両親に長女を見てもらえなくなったため、妻は、外に出て仕事をするのができませんでした。
	6	健康	妻は、体調不良のために病院の内科にかかったときに、もしかしたら精神的な要因かもしれないので精神科にかかってみたら、と言われたのですが、自分が弱い人間だと言われているように感じてしまい、受け入れるのができませんでした。ほかに、心臓が痛くなったり、背中が痛くなるなどの症状も出ました。
	7	喪失	知り合いがいない状態だったので、私も妻もストレスが多く、ちょっとしたことでぶつかり、夫婦げんかが絶えませんでした。
	7	喪失	また、私の実家と妻の実家で、放射能の影響に対する考えの温度差が大きく、両家で、長女を守るためにはどうすればよいか、と話し合ったりもしました。
	7	喪失	震災があって、家族の気持ちがばらばらになっていました。特に、平成23年の4月から8月ころまでは、私と妻との間もガタガタし、妻は離婚を考えていたようであり、精神的に参っていたようです。
	7	健康	子どもには放射能の影響が強く出ると聞いていたので、長女には、避難から1年ぐらいの間は、魚、牛乳、卵、野菜など、ほとんどの食品について、安全そうな物をインターネットで取り寄せて、食べさせていました。食費が、嵩みました。
	8	希望	事故前は、美容師として、自分の店を持つことが夢でした。しかし、美容師は帰宅時間が遅いこと、休日が少ないことから、知り合いのいない土地で暮らす妻子にとっては精神的に負担が大きくて無理だと考え、家族との時間を優先するため、企業に就職したのです。夢は、あきらめざるをえませんでした。
	9	経済的な損害	福島から引っ越しをするまで、家財道具が必要だったので、とりあえずのものを買いました。引っ越しまでのつなぎだった訳ですが、それでも10万円～20万円程度かかりました。福島からの引っ越しでは、以前使っていたものをほとんど持ってきたので、買ったものは、無駄になってしまいました。
	9	社会的世界	甲状腺検査については、平成25年までは、検査を受けても、良い検査結果しか出されないのではないかと、検査自体に不信感があり、受けませんでした。良い病院が見つかり、長女は、平成26年に検査を受けました。結果は、異常なし、でした。
	9	希望	また、事故当時、長女は、「歳干し、一八〇〇」ともかほしいと感づいていましたが、このことについては、今でも、放射能のことが頭をよぎります。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	9	喪失	妻の両親からは、長女が成人するまで、福島には帰ってこない方がいいと言われていましたが、平成25年に妻の祖父が死亡し、健在である祖母には孫を見せてあげたいという思いが強くなりました。妻の母とは帰省を巡って意見が合わずけんかしましたが、私たちは、食べ物に気をつけ、水は飲まないようにするから、という約束をして、平成26年から1年に1回くらい、2～3日は家族で帰省することになりました。事故がなかったら、双方の両親と近くに住んで、密な交流もできたのに、と思います。
	9	分離	友人については、福島に残った人との間で人間関係がギクシャクしたことはありませんが、電話やフェースブックでは、福島に残った人との間に、放射能に対する温度差を感じています。また、皆は、残っているのに、自分は避難しているという後ろめたさがあり、友人とは疎遠になっています。帰省の際も、2～3日では、なかなか会うこともできません。
	11	周囲への警戒心	職場では、周りの人から、避難者ということで気を遣われたくないので、「避難者」ということは話していません。
	7	自責	私たちは、避難するとき、ペットを連れてきていたのですが、小牧の県営住宅はペット禁止でした。区長さんのご配慮で、ペットを飼っていることを黙認していただいていたのですが、黙ってペットを飼っていることは、やはりストレスでした。
32-1 (甲C32第1号証)	4	希望	長男、二男は地元いわき市の小学校、幼稚園に通い、同居する両親に育児のサポートも受けながら、順風満帆に家族で生活をしていました。当然、子供たちは、いわき市の地に友人がたくさんおり、子らだけではなく、子らを通じて、両親も仕事だけではない地域の人々の繋がりをもつことができていました。そのような生活の基盤であり、愛着のある地元にこれからも住んでいけることに何らの疑念も持っていませんでした。私は、仕事や地域のつながりを父から少しずつ引き継いできたのと同様に、自分の子どもにも、引き継がせたいとの夢を抱きながら、懸命に仕事をしておりました。
	5	分離	3月末から平成24年8月までは、妻子は群馬に残って避難を続けましたが、私はいわき市の自宅に戻り離れ離れの生活となりました。
	6	避難時の恐怖	安中市には、姉の知人がいたことから、見知らぬ土地よりは頼れる者がいて安心できる所に避難したいという思いがあったからです。幸いにも、その知人の方がルームシェアとしてアパートの部屋を提供してくれました。雨風をしのげるだけありがたいので贅沢は言えませんが、大人5人子ども5人の計10人が6畳の部屋で生活していたので、気が落ち着ける時間がありませんでした。動けるスペースがないので必然的に部屋にいる時はじっとせざるを得ませんでした。それだけでもストレスが溜まっていきました。子どもたちも大人たちも表情がどこか暗く、会話も次第に減ってきて、重い雰囲気になっていきました。
	6	喪失	事故後すぐ逃げたので、長男や二男は、卒園式、幼稚園の終業式に出ることができず、幼稚園の友達と何の挨拶もできないまま離れ離れになってしまったのでさぞ寂しかったことと思います。
	6	避難時の恐怖	生活が一変したため、子供だけではなく、親である私たちも、これからどうしようか、いついわきに帰れるだろうか、帰らないとしたら仕事はどうするのか、私自身は仕事のためにいわきに帰りたいが妻子は安全と言い切れるまでは避難を続けたい、しかしそうなるに離れ離れの生活になってしまうのではないか、など悩みが尽きることはなく、精神的に苦しかったです。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
		7 喪失	群馬県安中市にて3世帯全員で避難していた平成23年に妻の祖父が亡くなりましたが、妻の祖父は妻のことを小さい頃からとてもかわいがってくれたようで、妻は祖父のことを大変慕っていました。そのため、妻は父母から祖父の死の連絡を受けた時、葬式に行きたがっていましたが、父母から「避難しているんだから葬式に来なくてよい。」と言われたそうです。妻の祖父は福島県に住んでおり、同県の斎場で葬儀を行いました。原発からは40キロほど離れていますが、妻も幼い長女を連れて福島に戻ることは抵抗があったようで、熟慮の末、葬式には行かないことにしました。妻は大好きだった祖父の死に目に立ち会えず、最後の別れ際も顔を見ることができず、今でも大変残念がっており心残りだと言っています。
		7 社会的世界	子どもたちは知らない場所で知らない子たちに囲まれて小学校生活、幼稚園生活を送ることとなり、緊張が続いたようでした。妻も6歳、5歳、1歳の子らを抱え一番子育てが大変な時期に、誰も知り合いがおらず、子育てを相談できる人が身近に誰もいなかったために本当に辛い思いをしました。
		7-8 健康	私自身も自身の健康が大切ですし、被曝のことが不安でしたが、仕事のことを考えたら、群馬に滞在を続けるという選択肢はありませんでした。いわき市に戻った後の食事は母が作ったものを食べていましたが、母は食材の産地に大変気を使っており、私自身も、飲む水はミネラルウォーターだけにするなど、食生活の意識も変わりました。福島は食べ物も水も美味しかったのにこれを全て避けなければならないのは悲しかったです。
		8 分離	仕事のためとはいえ、家族の大黒柱である私がいわき市に帰り、残された4人だけで群馬で生活するのは、私も寂しかったし、4人も寂しかったことでしょう。なぜ家族が引き離されなければならないだろうという思いで生活していました。私は家族が離れ離れになっていることのストレスから毎晩酒を飲み、気が狂いそうでした。
		9 健康	平成24年の夏頃に両親がガイガーカウンター(線量計)を購入し、毎日測定していましたが、線量が常時0.3マイクロシーベルト/h前後、多いところは5や6マイクロシーベルト/hという高い数値が出ており、ガイガーカウンターは常に警告音が鳴っている状態でした。ですので、福島の地で生活しては、常に被曝してしまうとを感じるようになりました。
		10 健康	妻は買い物に苦労しました。というのも、事故後、放射性物質が付着した食材が出回っているなどのニュースを見聞きしたため、将来の健康のことを考え東北産や関東圏産の食材の購入を避けようとするものの、購入できる食材がほとんどなかった状態でした。そのため、妻は日々、家族にどのような料理を提供しようか苦慮していました。
		10 健康	また、被曝のおそれがあるため、子供を外で自由に遊ばせることができないため、子供もストレスが溜まっていきました。親として当たり前のこととも思える、子どもを外で遊ばせることがなぜできないのかという不条理に悩み、私も妻も涙が出ることもありました。さらに、外に出ざるを得ないときであっても、被曝を避けるため子供らが外にある木々、砂、水などに触れないよう注意したりするなど、その気苦労が絶えることはありませんでした。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	10-11	分離	妻は、親やその他親戚が福島に残るため、彼らから離れ自分だけ岐阜に行くことを大変悩み苦しんでいました。妻は岐阜に行く直前まで両親から「(事故前は)ずっとここにいてくれるものと思っていた。」「本当に岐阜に行くのか。」と名残惜しそうに何度も問いかけられたそうです。妻自身もいわき市に住んでいた頃は、何かあればいつでもすぐ両親に会えたことに安心感を持っていたと思います。それが岐阜に行くことで、両親に会うのが一日がかりとなり簡単には行けなくなってしまいます。両親から名残惜しそうに言われるたび、本当に辛かったと思います。岐阜に避難したのは妻にとってもまさに断腸の思いでした。
	11	決裂	他方で、妻は親戚から直接的な非難を受けたことはないですが、岐阜へ引っ越すことを知らせる挨拶を電話で親戚にしたとき、親戚から「ああ。はいはい。」などとそっけなく対応されたそうです。妻がどれだけ苦しい思いをして、どれだけ悩んで、どれだけ覚悟を決めて岐阜への避難を決断したか私はよくわかっています。それだけに、妻のそのような思いとは裏腹に親戚から邪険に扱われたことについて、私は悲しい気持ちになりました。また、母によると、父方の親戚も、私たちが両親をそそのかして岐阜に連れてきたと思っているらしく、恨まれていると聞きました。いわき市を離れることで親戚同士がこれほど疎遠になってしまうのは、私としては本当に悲しいことです。
	13	健康	甲状腺検査の結果、長男と長女の甲状腺にのう胞が発見され、長女は血液検査でも甲状腺ホルモンの上昇があるとの診断を受けました。姉の子にも甲状腺にのう胞ができていました。
	13	社会的世界	検査をした名古屋の病院の医師からは1年に一回は定期的に健診をすることを勧められましたが、福島県では2年に1回健診を受ければよいなどといわれたことから、福島県に対しても疑念が生じました。
	13	社会的世界	岐阜には、友人がおらず、言葉遣いの違いにも苦労しました。言葉の違いで聞き直すことが多く、コミュニケーションが円滑にできないので、人間関係を築くことにもストレスになりました。
	14	自責	妻は、両親(福島県在住)から妻の妹の入院を聞きましたが、その話を聞いたタイミングが入院後1か月も経っていたということがありました。妻が両親から連絡が遅れた理由を尋ねると、近くに住んでいないから、連絡してわざわざ来させるのも心配させるだけだからとの理由でした。事故がなく福島に住み続けられていれば、このように両親に余計な心配はかけずに済んだうえに、身内の見舞いにもすぐに行けたでしょうから、妻は大変やるせない思いを抱いていました。
	14	自責	私には、いわき市の地元で、私と同様に親から受け継いで事業を行っていた、特に仲の良い仲間たち10人ほどから連絡がたびたび来ていました。しかし、私は、同じように事業をやっていた仲間に対して、心配をさせないように、また、自分の中での故郷や仕事仲間を捨ててきたのではないかとの自責の念などの複雑な感情から、岐阜にて事業を立ち上げる目処がつくまでは連絡がきても連絡を返せない精神状態が続いていました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	15	健康	子どもたちには、群馬県安中市への避難から岐阜県の学校に落ち着くまで、多感な時期に3度も転校させており、特に長男については、小学校低学年から中学年にあがる時期に転校が何度も重なったことから、勉強の基礎を固める時期に勉強や学校以外のことで心配をかけ勉強に集中させてやることができませんでした。現在、長男がいわゆる無気力状態気味で勉強がすすまない状態に陥ってしまっていますが、担任の先生からは事故後の生活状況の変化が関係しているのではないかと指摘を受けています。
	16-17	健康	岐阜に避難してきてから知ったのですが、本件事故後、群馬の赤城山付近に放射線が溜まり、この地域の川は線量が高く、禁漁になっていました。つまり、私たちは放射線から逃れるために遠い安中市まで避難して、これで大丈夫だと思っていましたが、実はあの近辺に放射線が滞留していたのです。この事実を知った今、情報が何もなくどうすることもできなかったとはいえ、避難する場所を誤ったことを後悔します。今でも、事故後いわき市で生活していたことで家族の健康面に影響はないか、避難先として群馬で良かったのか、ということがぐるぐると頭の中を駆け巡っています。放射能の影響はすぐに現れるものではありませんので、不安、悩みは尽きません。
	17	健康	平成24年8月に行った甲状腺検査では、長男と長女にのう胞があると診断された一方で、二男にはのう胞ができていないとのことだったので、その時についてはほっと安心したのですが、平成27年夏に岐阜の病院で甲状腺検査を行ったところ、二男にものう胞があると診断されました。
	17	健康	いずれの子も、現在は経過観察しかできない状況ですが、放射線の恐ろしいところは、長い時間をかけてゆっくりと身体を蝕んでいく上にその様子を目で確認することができないということです。・・・しかも、検査を1回やって安心、というわけではなく、今の検査で異常がないと診断されたとしても、それはあくまで現時点というだけで、今後ずっと油断ができないのです。目で見て元気でも内部から蝕まれているかもしれないと考えると、いつまでも、子らの健康面への不安は尽きません。未曾有の事故で、医師も経験がないでしょうから、はっきりとした見通しもつかず、今後子らに起きる危険やその可能性の大きさなど具体的な予測ができないという点も不安をより一層大きなものにしていきます。
	15	経済的な損害	いわき市の頃は既に1000人以上の顧客がいたのに対し、今回はゼロからの出発ですので、収入としては、岐阜での開業前に努めていた会社よりはよくなりましたが、それでも福島の前よりは当然少ないです。
	18	希望	いわき市にいた頃は、幸い顧客にも恵まれ仕事は順調でしたし、親世代から受け継いだ事業を、私と妻が引き継ぎ、ゆくゆくは子ども達に引き継いでもらうというのが私の夢でした。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
33-1 (甲C33第1 号証)	2	希望	私は、将来、長男にこの会社を継がせようと思っていました。いわきの地で、私から子、子から孫へと会社を引き継いでいくことを本当に楽しみしていました。
	4	避難時の恐怖	ニュースを見ていると、原発事故による放射線が怖く、正直、いわきに帰ることで被曝してしまうのではないかと不安でしたが、仕事をしなければ生きていくことができませんし、私たちにとって、仕事はいわき・・・以外に考えられませんでしたので、帰って仕事を再開するという以外に選択肢はありませんでした。ですので、いわきに戻って被曝したらどうしよう、ということはあえて考えないようにして、仕事のことだけ考えるようにしていました。
	4	分離	3月末頃に、私達夫婦と長男の3人でいわき市に戻り・・・仕事を再開しました。このときには、まさかその後約1年間半も孫達と離れ離れの生活を送るとは思っておらず、心の準備ができないまま、離れて生活を送ることとなってしまいました。いわき市に戻ってから孫達に会えなかったのはとても苦しかったです。
	4-5	健康	・・・収入は事故前より減ってしまい、にもかかわらず、私と妻の仕事の負担は増えました。保険業務等を担当していた長女に会社に来て仕事をしてもらう必要がありましたので、その間の長女の子ら(私たちの孫)の面倒を見るために、たびたび妻が長女と入れ替わりで群馬県安中市に行っていました。本件事故によるストレスと業務の負担が増えたこと、さらにいわき市安中市の長距離往復による疲労が合わさったためだと思いますが、平成23年4月か5月頃、妻が倒れました。病院に運ばれたところ、それまで正常だった血圧が180を超えていました。医師からはストレスが原因だろうとのことでした。そのため降圧剤を処方され、現在も高血圧の症状に悩まされ降圧剤を服用し続けなければならない状態です。
	10	健康	妻は、事故前は健康そのものであったのが、事故後、高血圧による症状で吐き気、頭痛、倦怠感等に襲われるようになり、いわき市に住んでいる頃は2週間に1回、岐阜市に移った後も2か月に1回の頻度でいわき市の病院に通い、降圧剤を処方してもらっています。また、・・・岐阜に引っ越してきた直後にノロウイルスや重い風邪で何週間も寝込みました。引っ越しや会社をたたむ準備や気苦労がたたったのでしょう。相当なストレスが溜まってしまったのだと思います。
	5	健康	例えば、飲料水はペットボトルのミネラルウォーターを、料理の際に使う水は、浄水器を通した水を使用しました。米については、平成23年までは前年に収穫された福島産の米を農家から直接買い付けていましたが、平成24年以降・・・は、兵庫の農家の友人から直接買い付けるようにしました。野菜は東北地方全般・茨城、千葉、埼玉、東京、神奈川、栃木産の全ての野菜を控えました。魚については、太平洋側の東北・関東近辺で水揚げされた魚は避け、北海道産の魚のうちサンマ等の回遊魚も食べないようにしました。
5-6	自然的世界	身の回りでどれほどの放射線量であるか調べる必要があると思い、平成24年の夏頃に線量計を購入しました。この線量計で家や工場付近の占拠を計測したところ、家の周りは0.2から0.3マイクロシーベルト/hと高い線量であることがわかりました。工場や自宅の雨樋周辺、水たまりなどは、5マイクロシーベルト/hを超えることもあり、けたたましく鳴り続けました。線量計がピーピーと鳴る音がとても怖かったです。	

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	6	健康	孫5人のうち3人が甲状腺にのう胞ができていたことが判明しました。さらに、この3人うちの1人は血液中の甲状腺ホルモンの濃度が正常より高いことが判りました。
	7	健康	平成24年8月に実施した孫達の甲状腺検査の結果が9月頃に出て甲状腺異常が見つかったことを知り、孫達を福島に住まわせることが本当に危険であること・・・。
	7	健康	さらに自身にも身体上の影響が出るのではないかとということの本気で考えるようになりました。
	7	周囲への警戒心	孫に関しては、健康面だけでの被害だけでなく、「福島の子はお嫁に行けない」という風評被害にあってしまわないかということも非常に不安を感じました。
	12	周囲への警戒心	孫の結婚、出産、世間的な差別についても不安です。実際に、地元の直接の知人で結婚話が破談となってしまった人を知っています。・・・居住地が南相馬市であったことを知るや、・・・「うちは孫が欲しいから、南相馬の女性なら結構です。」と断られたのです。
	9	健康	避難してきて生活上最も不便と感ずることは言葉です。言葉や言葉遣いが岐阜と福島では違うため、特に避難当初はなんと言っているのか互いにわからずコミュニケーションが図れないことが多々ありました。また、言葉のニュアンスが岐阜と福島では違うため、おそらく相手の意図するところではないでしょうが、私にはきつい言葉を言われたと感じ、傷つくこともありました。小さなことかもしれませんが、これが積み重なり続けると非常にストレスが溜まります。うまくコミュニケーションが取れないことがあったため、引っ込み思案となり、人との付き合いや活動が消極的になってしまいました。
	9	喪失	地元には多くの友人、会社の取引先と繋がっており、人となりの付き合いが密であったため、岐阜に来て彼らと会えなくなったのは淋しいです。
	10	決裂	親族との関係も疎遠になってしまいました。私には兄と姉2人がいますが、岐阜に引っ越す直前の平成25年10月頃、私と妻は、姉達から「お前たちは子ども達（長女と長男）にそそのかされて岐阜に行くことになったんだろ。子ども達が騒がなければお前たちも行くことなかったんじゃないか。ここで生活できたのにそれを蹴って岐阜に行くことになってしまった。子どもたちを一生恨んでやる。」と言われました。
	10	決裂	また、私と妻は今年のゴールデンウィークに地元に戻って先祖の墓参りに行き久々に親族に会いましたが、その時、妻が兄の妻に対して「岐阜に行ってからお義姉さん達から全然連絡が来ない。」と話したところ、兄の妻から「お義姉さんたちが岐阜に行った時点でもう・・・縁を切ったつもりでいるみたいだからねえ。」と言われました。・・・姉達の言動によって私たちは本当に悲しい気持ちになりました。
	8	希望	「いわき市で客をつかみうまく会社をやっていることができたが、他の地に移りこの会社を手放して、この先本当に生きていけるのか。」「もう一度、事業を再開できるか。できるとして以前のようにうまく事業をやっているか。」「そもそも会社を本当に手放さなければならないのか。できることなら本当は手放したくない。でも健康に替えられるものはない。やはりやむを得ないのか。」「自分の健康ももちろんだけれど、それ以上に孫達の健康が気になる。」「孫たちの健康・生活・教育はこの先どのようになってしまうのか。」といった、葛藤や不安に日々苦しみ、夜中にふと目が覚めることも多々ありました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	13	経済的な損害	岐阜に来て、友人や仕事の取引先を全て失いました。愛着ある家も仕事場として使ってきた工場も手放しました。(会社)を長男に継がせることも、福島の地では不可能になりました。岐阜で事業を再開しましたが、まだまだ十分な客が付いておらず、順風満帆であったいわき市の時とは異なり、再開後の事業は、金銭面でかなり苦しい状況です。
34-1 (甲C34第1号証)	4-5	希望	3人の幼い子を養育しながら十分な収入の得られる仕事を慎重に探していましたので、そのような仕事をみつけ、自宅にて、家族揃って、助け合っ、平穏な生活をしていくことを、漠然と望んでいました。
	5	経済的な損害	本件事故当時、長男、次男がそれまで通園していた保育園から幼稚園に平成23年4月1日より転園することが決まっていました。それまでの保育園は自宅から車で10分くらいの距離にあり午後4時までしか預かってもらえないところ、幼稚園は自宅から車で5分くらいの距離にあり午後6時まで預かってもらえることから、平成23年4月になれば、私が長男、次男の監護・養育をしながら働くことができる仕事先の選択肢が大幅に増える見込みとなっていました。なお、現実には、長男、次男は、平成23年4月1日より幼稚園に転園しています。なお、上記のような環境が整っていたことから、本件原発事故さえなければ、私としては、それほど時間がかからずに、従前と同程度の収入を得ることができる仕事につく見込みは十分にあったところですが、本件原発事故の結果、就職活動どころではなくなっていました。
	5	健康	平成23年4月7日から同月19日まで、長男は、・・・入院をしました。長男の左耳下部皮下に膿瘍が突如発生したことから、その治療のために入院をしたものです。私や私の両親等としては、長男の上記傷病が本件原発事故と無関係のものとは思えず、また、自宅周辺の線量が高かったことから、それ以上の健康被害を避けるため、やむを得ず、事故前住所地を離れ、避難をすることとしました。
	6	分離	本件原発事故後、私と3人の子らは岐阜県への避難を実行しましたが、父は長距離トラックとしての仕事があること、母としては、寝たきりで自宅介護をしていた祖父と認知症の症状が出始めていた祖母を残して家を離れることは到底できなかったことから、私の両親及び私の祖父母は、福島県伊達郡国見町に残ることを選択せざるを得ませんでした。
	7	喪失	岐阜県にはまったく地縁がなく、誰一人知り合いがいない中での避難生活を送ってきました。
	8	社会的世界	このアパートの隣人とのトラブルについても、私一人では子どもたちの日常生活、交遊関係等に細かい気配りまでは行き届かず、子ども同士の金銭のトラブル(隣人の子が周りの子の気を引くためか家庭からお金を無断で持ち出し、私の子らがその子からいくらのお金をもらった、ということがあったというものです。)に端を発し、隣人から執拗な嫌がらせを受けるようになり、子どもらの平穏な生活を守るためにやむを得ず、引っ越しをしたというものです。そのようなトラブル等についても、避難をすることなく、私の両親たちが子どもにも目を配ってくれる環境のままであったならば、そのような事態に至ることはなかったのではないかと、という思いがあります。



原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	9	健康	私の両親がいてくれれば、子ども達のこと、学校や専門家、医師等から教えられたアドバイス等を参考に、一緒に子ども達との関わりをもってくれるところですが、避難して以降は、子ども達のことには全て私一人にかかってきており、私自身いっぱいになってしまい、うつ状態のような状況です。
	9	健康	長男と次男が比較的落ち着いていたときはよかったです。本巢市に引越し、環境の変化などから、注意欠陥多動性障害によるものと思われる行動が激しくなったところ、私としても心に余裕がもてずいっぱい、長女に十分な対応をしてあげることができず、長女としても、そのような生活からくるストレスにより精神的に不安定になってしまい、中央子ども相談センター等の専門家の協力により、一時的に別々の生活を送ることとなったというものです。
	11	経済的な損害	私としては、3人の子らが幼かったこと、特に長男については、前述(注意欠陥多動性)障害を指摘されていたこと、実家での両親と同居しての生活とは異なり、3人の子らの監護・養育は全て私が行わなければならなかったこと、私と3人の子らの分離世帯の生活全般を、私が切り盛りしなければならなかったこと、などから、臨時職員程度の業務に従事するのが精一杯のところであり、より高い収入を得るために別の仕事を探すことは著しく困難な状況であったところ、そのような状況は現在まで続いています。
	17	喪失	実家に残ることを選択した両親や祖父母とは離れての生活となりました。祖父母については、本件原発事故後に亡くなっていますが、その亡くなる時に看取ってあげる、ということもできませんでした。
	17	喪失	地元での友人たちについては、地元で会うということは全くといっていいほどなくなってしまいました。
	17	希望	自分が育った地元での、何気ない交流、慣れ親しんだ人間関係、行事等を通じた一体感等、特に意識をすることもなく、ごく当たり前であった日常の生活が、全てなくなってしまいました。今となっては、そのような日々は2度と取り戻すことはできません。
	17	希望	それまでは、特に意識をしていたわけではありませんが、私が育ってきた慣れ親しんだ環境で、私の大切な家族である3人の子どものも、元気に健やかに成長をしていってくれることが、私の何よりの願いだったような気がします。そのような生活は、本件原発事故をきっかけに根底から奪われてしまいました。今の子ども達の姿を、全て本件原発事故のせいすることはできませんが、この事故さえなければ、こんなことにはなっていなかっただろうという思いが強くあります。
	16	健康	3人の子どもは全員、甲状腺検査の結果、A2判定(大きさが20mm以下のう胞、または5mm以下の結節が認められた状態とのことです。)を受けています。
35-2 (甲C35第1号証)	5	自然的世界	平成23年4月に、私が市役所からガイガーカウンターを借りて、自宅の線量を測定したところ、庭先では2.0マイクロシーベルト/hで、室内でも0.5マイクロシーベルト/hという数値が出ました。何日間かにわたり、線量を計測しましたがいずれも上記の数値で下がる気配もありませんでした。・・・除染として、自宅を洗浄し、外壁を塗り替えましたが線量は下がりませんでした。
	5	健康	長女にはできるだけ外で遊ばないように言い、家から出さないようにしました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	6	分離	義母にも一緒に避難をしようと誘いましたが、義母は、生まれも育ちも福島で別の場所に移動することに不安があり、先祖の墓を見なければならぬということで福島にとどまることになりました。
	6	分離	平成23年11月末、夫は岐阜に行きました。夫は、私と長女が岐阜に引越すまで、岐阜市内の市営住宅を借りて生活することになりました。こうして平成23年11月末から、私と長女が岐阜に行く平成24年3月末まで家族は離れ離れになりました。
	8	経済的な損害	私も、岐阜に引越してから職を探しましたが、5か月ほど見つからず、平成24年9月に看護婦のパートの職を見つけ働き始めました。職が見つかるまで貯金を切り崩して生活をし、貯金も減りました。その頃の私の収入は、月12万円ほどです。平成27年8月にはこのパートの職を退職しました。その後、4か月くらい職が見つからず経済的にも相当苦しい状況でし
	8	経済的な損害	福島にいたころは、夫の実家に住まわせてもらって家賃もなく、子供の面倒は義母に見てもらっていたので、私は、安心してフルタイムで働くことができました。しかし、避難後は、子供を見てくれる人がいなくなったので、パートでしかくことができません。また、福島の実家には、家庭菜園があり、そこで作った野菜を食べて食費を抑えていましたが、岐阜ではそれができなくなったので食費も増加しました。
	9	経済的な損害	引越に際しては、新たに家財を購入しなければなりません。家財の購入には30万円ほどかかりました。また、長女の転校のために学用品をそろえなければならず、5~6万円を使っています。
	9	分離	岐阜への避難後、福島に残った義母にがんが見つかり手術をすることになりました。義母においても、一人暮らしの上、入院することになって大変な苦勞をしたと思います。福島で一緒に生活していれば、私や夫で、義母の入院のサポートをできたのですが、それができなくなり残念でなりません。避難後は何回か福島にとどまった義母に家族で会いに行きましたが、岐阜から福島までは自動車でも8時間以上かかりますし、交通費も高額です。現在の経済的な状況では、頻繁に行くことはできず、年に数回行くのがやっとでした。
	9	周囲への警戒心	長女は、岐阜に転校した当初、同級生から「(避難者だからと言って)調子乗ってんじゃねえぞ」などと言われ、落ち込んでいました。他にも中傷を受けていたと思います。それ以来、長女は、自分が福島から来たということと言わなくなりました。原発の避難者に対して、車をいたづらされたり、福島にかえれと中傷されたりといった話をよく聞きますので、私たちも福島から来たということは隠して生活しています。
	10	健康	2回目の検査で長女について小さな膿疱があるということがわかりました。医師はあまり気にしないで良いという話でしたが、私は非常に不安になりました。毎年、検査を受けさせようと思っています。
	10	健康	夫にも膿疱が見つかったと言われました。
	10	健康	本件事故直後、放射線の危険に対する情報がなく、夫も長女も外に出ていました。その日は雨が降って、二人はその雨にあたっています。事故直後は、食料や飲み物は路上で売買がされてそれを買うために長時間並んでいました。
	10	健康	私自身も、看護師として仕事で、患者の安否確認、避難誘導などで外で長時間仕事をしていました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	10	健康	本件事故によって、まず、安心して子供を育てられる環境が奪われました。事故後は、私たちの住んでいた地区は、いわゆるホットスポットとして線量の高い地域として知らされ、公園や学校の遊具などにも線量の書いた紙が貼られるなど、子供を外で遊ばすことができない状況でした。普通の状況であれば、子供が外で元気に遊んでいれば、親としてはこんなうれしいことはないはずです。しかし、本件事故によって、親は、逆に、子供たちが外で遊ぶことを心配せざるを得なくなったのです。おかしな状況と言わざるを得ません。
	10	喪失	私も、夫も福島市で生まれ育ちました。福島市には私も夫も友人や知り合いがたくさんいました。・・・避難により、単に、暮らす土地が変わったということだけではありません。私や夫や長女が長年暮らす中で培ってきた友人関係や知り合いの関係も断たれました。
	12	社会的世界	福島県から毎月、県政便りが送られてきており、放射能の影響がないかのような情報が出されています。しかし、事故後、行政が発表した数々の情報は、自分たちが調べた放射能や被ばくについての情報とは全く異なっており、私は行政の情報発表について非常に不信感を持つようになりました。それで、県から「安心して戻って来ていい」との話をきいても到底信じる事ができません。
	12	喪失	避難が長期間にわたり、・・・友達の関係も疎遠になりつつあり、どんどん福島との縁が切れていく感じがして、とてもさみしい思いをしています。
	12	周囲への警戒心	長女のことについても、福島出身ということで差別を受けたりしないか不安でなりません。
	7	経済的な損害	夫は改めて職を探しましたが、適当な職が見つからず、仕方なく塾の講師のアルバイトの職を見つけ働くようになりました。・・・平成26年11月ころには、この塾の講師のアルバイトも塾の都合で辞めさせられて、その後、フリースクールの講師のアルバイトの職を見つけて働いています。
36-1 (甲C36第1 号証)	5	避難時の恐怖	とにかく福島に戻るのは危険だと思い、群馬県安中市在住の友人に連絡したところ、来てもいいという事でしたので、3月13日、自動車の下道を12時間以上走り、群馬県に向かいました。・・・まさか避難期間が長期に及ぶとは思っていませんでしたし、日常とはかけ離れた体験をし、パニック状態になっていたのだと思います。
	5	避難時の恐怖	寝る時だけ、こども5人は、友人の部屋を使わせてもらうことができましたが、大人5人こども5人の計10人で、6畳の部屋で生活するのは、非常にストレスとなり、父などは鬱っぽくなってしまいました。雨風をしのげる場所があるだけでも有り難い、と皆じっと我慢していました。
	6	社会的世界	二男はまだ幼く環境の変化に慣れずふさぎ込みがちで、学校の友達の輪に入ることがなかなかできませんでした。ナーバスになっているのが一目でわかりましたが、それに対してどのようにフォローすればよいか気をもみ、私も心が痛みました。
	6	経済的な損害	また、経済的にも、生活品や家財道具はもちろんのこと、運動服・体操服、上履き、など小学校に必要な物もまた一から買い直す必要が出たため、手間と経済的負担が大きかったです。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	6	健康	私は、会社で保険、車両販売等の仕事を担当しており、これらの仕事は私がいなければ回っていかない状況でした。そのため、仕事を放棄するわけにはいかず、平成23年4月以降、私は群馬に生活の拠点を置きつつも、週3回はいわきの会社に出勤しなければならず、時には数日間滞在しなければなりません。いわきに行くことで被曝する危険があるので怖かったのですが、私がいなければ会社に大きな影響が出て、事故を起こしたお客さんにも大きな迷惑をかけますので、しょうがないという気持ちでいわきに出勤していました。ただ、いわきに戻ってきたときは、避難前のようないわきに対する愛着よりも、早くいわきから出たいという思いのなか仕事をしており、いわきに行くたびに「ああ、また放射線を浴びているんだな」という思いが強くなりました。
	7	健康	慣れない環境での生活に加え、職場まで片道3時間の通勤で、私は心身ともに疲れ切ってしまいましたが、母親がへばっているところを子らに見せてはいけないという思いから、何とか気丈に振る舞っていました。
	7	健康	平成23年5月ごろ、二男が突然、喘息発作を起こし、以降頻繁に発作が起こるようになり、何度も突然夜中に呼吸ができなくなり苦しみました。これまでこんなことは一度もありませんでした。きっと、二男は口に出さないまでも、慣れない環境での不便な避難生活にストレスを感じており、体が悲鳴を上げたのでしょうか。何度も、夜中に発作に苦しむ二男を乗せて自動車を走らせ、救急で診てもらい、その後、群馬の病院はよく分からないため、何度かいわき市に連れて帰って、よく知っている病院の先生に診てもらいました。
	8	健康	・・・名古屋市にある南生協病院で検査を受けることができると教えてくださったので、平成24年8月、さっそく子らの甲状腺の検査を受けに行きました。結果が出るまでの1ヶ月間、不安な気持ちで結果を待ちましたが、やはりというか、恐れていたとおり、二男の甲状腺に小さなう胞が3つあると言われ、経過観察で、1年毎に検査を受けてくださいとのことでした。弟の子らのうち長男ちゃんと長女ちゃんにもう胞が見つかり、長女ちゃんは、血液の甲状腺ホルモンの数値が悪かったとも言われたそうです。私は、准看護師の資格を持っており、比較的冷静に結果を受け止めることが出来ると思いますが、それでも、これを聞いて、私の心は、打ちのめされました。
	9	喪失	二男は、少し内向的な性格で、いわき市から群馬県に避難した際も、なかなか学校の友達と打ち解けることができなかったのですが、周囲の方々の温かい励ましによって、ようやく平成24年夏頃には群馬での生活に慣れていたところでしたが、慣れてきた矢先にまた、いわき市の自宅に戻ることになってしまいました。いわき市に戻ってきた後も、以前住んでいたころの友達と避難前のようにうまく馴染めず、友人を作ることができなかったため、放課後も一人で遊んでいました。何度も住む場所を変えて二男には本当にかわいそうな思いをさせたと思っています。
	10	希望	引っ越すにあたって最も大きな作業は自宅の売却ですが、幸い、2200万円で売却することができました。ですので、売却代金からローン残額及び諸経費等合計1800万円の支払をして、手元に400万円ほど残りました。ただ、一生ここに住もうと考えており、趣味のガーデニングができる庭を造るなど、この家にはこだわりを持って手入れしてきましたし、自分の力で購入した思い出のある家だったので、手放すときは、本当に辛かったです。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	11	健康	<p>いわき市の実家は、庭があつて広々としていたのに、岐阜の狭いマンションでは、いわき市の家のように開放的に遊ぶこともできず、二男にとっては住居のことでストレスが溜まっていくようで、精神的に落ち込んでいきました。岐阜に来てからは、群馬県安中市に避難していた頃のように喘息の発作で苦しむことはありませんでしたが、夜中に突然嘔吐し苦しむことがありました。そのため3回ほど救急で病院へ連れて行きました。原因は不明で、医者からはストレスからくるものではないか、と診断を受けました。二男は私に庭がなくておかしくなりそうと漏らしたこともありました。苦しむ二男を見ているといたたまれない気持ちで一杯になり、経済的には苦しかったのですが、子どもの健康には代えられないと思い、平成26年3月、岐阜市に、庭付きの家を購入することにしました。購入のために、200万円ほどを頭金にして、2000万円、35年の住宅ローンを組みました。</p>
	12	健康	<p>平成28年12月に二男が風邪を引き病院に行った際、左首筋のリンパ節にしこりがあると言われました。血液検査の結果、医師からは、「数値的には癌でないと思う。良性腫瘍か悪性腫瘍かを精密に検査するには首にメスを入れることになるからしばらくは経過観察でよい。」と言われました。本件事故がなければ、このしこりについてもそれほど気に病むことはなかったと思いますし、経過観察で様子を見ている間も気持ちに余裕があったと思います。しかし本件事故によって、二男は間違いなく通常の生活では浴びることのなかった量の放射線を浴び、甲状腺にのう胞ができ、リンパ節にしこりができているのです。平成29年1月以降、毎月1回診察を受けてしこりが大きくなっていないか診てもらっています。のう胞やしこりがいつまでも悪化しないのか、誰にも分かりませんので、経過観察がいつまで続くかも当然分かりません。というよりも、むしろ終わりはなく、今後ずっと気にしなければいけないと思っています。</p>
	13	自責	<p>父が創業した(会社)も、跡取り予定であった弟と保険や中古車販売を担当していた私がいなくなったことで継続することができなくなり、廃業することとなりました。私が、放射能の事さえ気にしなければ、父の大切な会社を続けることができるのではないか、と悩みましたが、やはり子どもたちのことを考えると、放射能の影響を気にしないことなどできませんでした。</p>
	13	決裂	<p>いわき市には、父方の親族も、母方の親族もおり、お正月やお盆には集まって、親しく交流していました。その親戚たちは、いわき市に残っており、私たちを、「いわき市を捨てた」として、白眼視しています。母によると、親戚の一部からは、私や兄や妻さん達が両親をそそのかしていわき市を捨てさせ岐阜連れきたと思われているらしく、「恨んでやる」ということまで言われたそうです。両親は、平成25年12月に岐阜市に移住してきました。私でさえ、故郷を去り、親族に誹謗されるのはこれほどつらいのに、年老いた両親の苦痛はいかばかりか、と思うと一層辛いです。</p>

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	14	喪失	<p>長男は平成26年に岐阜の女性と結婚し、現在2人の子がいますがもう1人子を望んでいます。他方、長男は岐阜に来て以降、一度もいわき市に戻っておりません。妻からは、地元に一時的にでも行くようであるなら、子供は絶対作らない、いわき市に行くならその覚悟でいて欲しいと言われているそうです。実際に、長男は結婚後にいわき市の友人の結婚式に招待されましたが、行きませんでした。当時、何の事情も知らなかった私がなぜ結婚式に行かなかったか理由を聞いても長男は教えてくれませんでした。おそらく、妻の言葉を受けて出席を断ったのだと思います。このように、・・・福島へ行くだけでも伝染病にかかるかのように恐れています。長男も妻の言葉を理解はしているでしょうが、それでも福島に対する差別的な言葉を聞いて当然ショックを受けたと思います。そして帰郷できないことも本当に辛いはず。旧友に会ったり生まれ育った土地を懐かしむこともできないのです。長男は私に、「1回はいわきに行ってみたいよなあ。」と漏らしました。私はいたたまれない気持ちで胸一杯になりました。もちろん、長男の妻を恨んでいるわけではありません。私の心にあるのは、福島がそのような恐怖の地にされたことに対する怒り、悲しみです。</p>
	15	社会的世界	<p>もし、私たちの避難が遅れていたら、放射能にさらされていたことでしょうか。東京電力の人は、社内の人間には、夜中であっても、「原発が危険である」ということを連絡したのに、どうして一般人には知らせなかったのでしょうか。</p>
	15	希望	<p>お金なんて要らないから、元の生活に戻して欲しい、というのが、私の偽らざる気持ちです。ただ、そんなこと不可能であることも分かっています。そうであれば、納得のいく補償を求めたいと思います。</p>
37-2 (甲C37第1号証)	3	喪失	<p>私と母は無職で、長男は3歳で保育園に通っていました。私も母も、地元ですから近所には多くの知人・友人がいましたし、私と同じアパートには長男と同じ年の子どもの母親もいて、近くの原っぱで子ども達を伸び伸び遊ばせることができるという生活でした。</p>
	4	健康	<p>政府は「直ちに健康に影響はない」というようなことを言っていたので、夫はそれほど心配ないだろうと思っていたようで、原発爆発後も外出したりしていましたが、私は、小さな子どもがいたので、不安で不安で仕方ありませんでした。</p>
	4	避難時の恐怖	<p>私たちが住んでいたところは、地震による被害はそれ程大きくなかったので避難所に行くことなく、そのまま住みました。ただ、食料は品薄になりましたし、水は、何回も避難所まで取りに行く生活を余儀なくされました。</p>
	5	避難時の恐怖	<p>ホテルにいるときは、今後、いわき市に戻れるのだろうか、長男への放射能の影響は大丈夫だろうかなどばかりを考える生活をしていました。長いホテル生活は、精神的・肉体的にも疲労が増すばかりでした。</p>
	6	健康	<p>いわき市に戻り、保育園は退園していませんでしたので、長男は保育園に通わせました。ただ、放射能の影響は本当に心配でした。それで、食べ物にも気を遣い、食材は宅急便で取り寄せたりしました。また、ガイガーカウンターを購入し、家の中や近所の数値を測定して、高い数値のところには近寄らないようにしていました。家の中でも、換気扇とか空気清浄機の周りは高い数値を示していました。保育園に行くときは、お迎えのバスが来るまで家の中にいて、バスが着いたら、急いでバスに乗せるということにもしていました。</p>

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	6	社会的世界	愛知県とは何の縁もゆかりもなく、知り合いもいませんでしたが、とにかく、いわき市を離れなければとの思いで、夫、長男、母、祖母と愛知県に避難することにしました。
	8-9	経済的な損害	夫は、マレーシアから戻って東京勤務中、このまま東京勤務が長く続くかもしれない可能性が高い状況で、また、子どものことを考えると、もういわき市には戻れないかもしれないと思い、平成27年7月10日、思い切って、東京にマンションを5900万円で買いました。頭金1500万円を払い、残り4400万円はローンでした。しかし、三重県四日市市の工場に転勤になるかもしれないことが分かり、平成28年3月頃、東京のマンションを5300万円で売りました。600万円の負債が残りました。このマンションには住んだことはありません。
	9	健康	愛知県に避難した後、定期的に甲状腺の検査を受けていますが、当初なかった嚢胞が見つかったとのこと。放射能がどう影響しているのかわかりませんが、今後、長男に健康被害がでるのではないかと、とても不安です。
	9	喪失	原発事故さえなければ、私たち家族と義母はいわき市で普通に生活することができていました。私も母も、いわき市で生まれ育ったのですから、多くの友達や知人がいました。夫にもそれなりに友人がいました。しかし、今は、そのような友人や知人とは連絡も途切れがちになり、疎遠になっています。突然、これまでの人間関係が失われたのです。
	9-10	社会的世界	愛知県は、縁もゆかりもなく、知人も友人もいません。近所づきあいから始め、いちから人間関係を築かなければ住みにくいのですが、今から築くことは、なかなか苦勞が絶えません。言葉ひとつを取っても慣れません。特に、年老いた母にとってはなおさらです。
	10	希望	私たちは、将来、夫は転勤で単身赴任することがあっても、私や母の生まれ育った土地であるいわき市で一緒に住み、子どもも、同じ環境で育てる予定でした。しかし、原発によってそれは叶わぬ事になりました。まさか、こんなことになるとは夢にも思いませんでした。将来設計が変更になることもあると思います。しかし、このような形で変更を余儀なくされることは、本当に不本意でやり切れない思いです。
	10	健康	現在まで避難を続けているのは長男の健康が心配だからです。もし、いわき市に戻れば、長男の体に放射能の影響が残るのではないかと。今、思えば、避難の途中で、一度いわき市に戻りましたが、それもしなければ良かったと思います。
	11	希望	放射能の影響のことを考えると、毎日、泣いていた事もあります。いらいらして息子にあたってしまったこともあります。原発事故さえなければと、いつも考えてしまいます。
38-2 (甲C38第1号証)	4	避難時の恐怖	名古屋市に着いた私たちは、合計12人で、ビジネスホテル5部屋に合計5泊宿泊しました。ホテルに宿泊中、当時まだ6か月の長女が発熱しましたが、初めての土地で、病院もわからず、とても不安な思いをしました。オムツやミルクの用意にも、とても苦勞しました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	4	分離	しかし、私の夫、姉(次女)の夫、妹(四女)の夫、私の母親、妹(五女)及び姉(次女)の義父母らは、それぞれ仕事の都合等で、平成23年3月末ころまでに、やむなく福島県内の自宅へ戻りました。一方、幼い子供を抱える私と長女、姉(次女)とその子、そして、今後出産の可能性を持つ妹(四女)は、名古屋市内に残り、親族と離ればなれで避難生活を継続することになりました。一家、親族が離ればなれになってしまうことに抵抗はありましたが、幼い子らのことを考え、そうすることに決めました。
	5	経済的な損害	私は、本件事故以前に正社員として勤務していた福島県内の会社を、やむなく退職しました。その後は、慣れない避難生活で著しく体調を崩したため、名古屋市内で再就職先を見つけることができませんでした。そもそも、避難前には得られた近所に住む実家(母親)の協力等も得られなくなったため、幼い子を抱えながらの再就職は、およそ困難でした。
	5-6	分離	私たち夫婦は、ともに福島県の出身です。結婚後は、私の実家のすぐそばにアパートを借り、同じく結婚した姉(次女)夫婦も同じアパートに住むなど、互いの実家を含め、とても仲のいい親族関係を築いていました。特に、私と姉(次女)は、それぞれ一歳違いの女の子を出産したので、一緒に遊ばせたり、互いに子供の面倒を見合うなど、親族みなで助け合って子育てをしてきました。だからこそ、いったんは、双方の実家の両親等を含む親族一同で避難を開始したのですが、夫らは、福島県内の仕事を辞めるわけにもいかず、また、母らは高齢であることもあって、結局、私と長女らだけが、名古屋市内での避難生活を続けることになったのです。
	6	分離	このような二重生活によって、経済的負担が重くなったことはもちろんですが、私たちにとっては、夫婦、親子、家族の絆を断たれてしまったことが、本当に辛かったです。
	6	分離	私は、いつも、福島県に住む高齢の母親らのことが気がかりでなりませんでした。
	6	分離	また、母親も、かわいさかりの長女(孫)との日常的な交流が断たれてしまい、とても寂しがっていました。
	6	自責	他の親族らにいたっては、避難生活が長期化するにつれ、その溝は深まるばかりでした。私は、みなを置いて逃げてきてしまったような罪悪感に苛まれ、また、お墓参りすら満足にできていないことをとても心苦しく思っていました。
	6	希望	ともに福島県出身の私たち夫婦は、一人娘の長女についても、私たちがそうだったように、自然が豊かで互いの親族も多い福島県で、のびのびと育ててほしいという思いから、本件事故前は、家族3人で(及び近隣の親戚、友人らと)釣り、バーベキュー、ドライブ等を楽しんでいました。
	6	希望	しかし、本件事故により、私たちの生活は一変しました。長女は、父親である夫や祖母と離れ、私と二人、名古屋市内のマンション暮らしを強いられ、そのため、福島県が誇る大自然の中、思い切り遊ぶこともできなくなりました。そもそも、私は、名古屋市内の避難先で自動車も所有していませんので、長女を連れて遠出するということが、ほとんどできなくなりました。
	6-7	分離	長女は、夫(父親)はもちろん、今まで毎日のように顔を合わせていた私の母親(祖母)と日常的に会えなくなったことを、とても淋しく思っていました。特に、幼かった避難当初は、たまにしか会えない夫(父親)の顔を忘れてしまい、夫(父親)が名古屋へ会いに来るたびに、人見知りから号泣し、その姿を見るたび、私と夫は、胸が張り裂けそうな思いをしていました。



原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	7	喪失	長女だけではありません。私と夫も、別居期間が長ければ長くなるほど、互いの意思疎通が難しくなり、また、それぞれ二重生活によるストレス、不便さを感じていることから、些細なことでけんかをするようになってしまいました。
	7	周囲への警戒心	私は、特に避難当初、福島県からの避難者ということで好奇の目で見られたり、長女がいわれのない偏見を持たれることを気にして、一緒に避難生活を送っている自身の親族(次女親子、四女)以外と、あまり交流が持たなくなりました。その一方で、福島県内で暮らす友人らとは、自分たちだけが福島県を捨てて逃げ出したかのような負い目があり、どんどん連絡がとりづらくなってしまいました。
	7-8	健康	福島県内に残る夫や親族の健康、そして、数日間避難が遅れたことで幼い長女に何か影響が及んでいないか、長女は一生その不安を抱えていかなければならないのかなど、私の心配は尽きることがありませんでした。そのせいで、私は、本件事故前には一切みられなかった慢性的な不眠症、頭痛、胃痛のほか、不安神経症を患い、避難生活中、ずっと通院を強いられました(後述のとおり、福島へ戻った今は、改善しました)。長女も、よく病気をするようになりました。
	8	経済的な損害	二重生活の結果、毎月、夫は、福島県から、私と長女に会うため、名古屋市内の避難先を訪れるという生活を送るようになりました。そのため、その移動交通費はもちろん、二重生活による家財道具購入代金、生活費、光熱費等の増大が、私たち一家の家計を圧迫しました。私は、幼い長女のため、食品の産地表示にもとても敏感になり、東北地方産の食品を食べないようにしました(その分、食費が増大しました)。一方、私たちと別居し、一人暮らしを強いられることになった夫は、仕事で帰りが遅いこともあり、インスタント食品に頼る生活を送るようになりました。
	8	経済的な損害	私は、本件避難にあたり、正社員として勤務していた会社の退職を余儀なくされ、その後も、上述のような健康状態であったことから、再就職できませんでした。私が、本件事故により職を失ったことは紛れがなく、その経済的損失はもちろん、勤続22年間の仕事を失ったことによる喪失感、無念さはとても大きなものでした。
	9	健康	長い二重生活により食生活が悪化したことや、名古屋へ来ることが増えて十分な休息がとれなかったことがたたったのか、夫は、平成27年9月、体調を崩し、3週間くらい入院しました。病名は、虚血性大腸炎とのことでした。
	9	健康	まだ幼い長女の健康に将来何か影響が出るのではないかと、・・・。
	9	周囲への警戒心	また、長女が将来結婚を考えた際、福島県出身ということで何らかの差別を受けないかなど、親である私たちの不安は尽きません。
38-1 (甲C38第2号証)	3-4	分離	何より妻や長女と月に何度かしか会えなくなったことが本当に辛かったので、ずっと名古屋通いを続けていました。しかし、避難当初、まだ幼かった長女は、たまにしか会えない私の顔を忘れてしまい、私が名古屋へ行くと号泣し、その姿を見るたび、胸が張り裂けそうな思いがしました。
	4	喪失	妻とも、それぞれ我慢しながら不便な生活を送っているわけですから、電話や、また会ったときに、些細なことでけんかをするようになってしまいました。せっかく何時間もかけて会いに行った挙げ句けんかになってしまうと、お互い本当にやりきれない思いをしました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	4	健康	私自身は、慣れない一人暮らしから、食生活が乱れ（これまで妻が食事の準備をしてくれていたのですが、私は自炊に慣れておらず、どうしてもインスタント食品等に頼る生活になりました）、また、元々肉体労働をしているのに、上述のとおり、週末は名古屋へ通うこととなり、十分な休息がとれないようになりました。そのような生活を4年半続けた平成27年9月、とうとう体調を崩し(虚血性大腸炎と診断されました)、3週間の入院を余儀なくされました。長女の健康を考えるとこの先もがまんして避難生活を続けるべきと思っていたのですが、これ以上家族がばらばらに生活するのは無理だと考え、また、私が倒れてしまえば家族の生活自体が成り立たないと思い、平成28年2月16日、妻と長女が、約5年間ぶりに福島県へ戻ることになりました。
39-1 (甲C39第1号証)	3-4	希望	父方の祖父は、林業に関わっており、私は祖父に連れられてよく裏山を歩き、それはとても楽しい経験でした。私は、祖父に連れられて裏山に行くのが楽しかったことや、小学校の頃、学校の裏山探検をしたのが楽しかった経験もあり、山が好きになりました。私は山好きがこうじて森林の研究がしたい、自然環境を守る仕事をしたいと思い、森林に携わる仕事を目標しました。・・・ただ、私はNGOでの森林に関わる仕事は好きだったものの前々からやはり自然に近いわきの実家に愛着があり、両親もいわきにいたので、いつかはいわき市に戻りたいと思っていました。
	4	自然的世界	食べ物も、祖父母の家から大根・白菜・ネギといった色々な野菜をもらっていらしたので、季節の野菜はほとんど買わなくてよいくらいでした。お水も水道水で大丈夫なくらいでしたし、美しい自然と豊かな恵みに囲まれた生活が私は好きでした。
	4-5	喪失	このような生活が続き、平成22年には、長女が生まれました。・・・この頃から、私たち家族は実家から車で10分くらいの借家に引っ越して父母とは別居しました。その家は古かったのですが、6部屋くらいあり広々していて、畑もありました。畑では、じゃがいもやミニトマトなどを植えていました。庭は子どもたちが走り回るのに十分な広さでした。地域の集まりについても、川の堤防の草刈りや神社のお祭りには私はよく参加していました。地域の人も多くが参加していました。こういった場でつながった地域の人とは助け合いが多く、よく野菜をもらったりしていました。地域の方は高齢の方が多く、何かと面倒を見てもらっていました。近所のおばあちゃんに子らをお風呂入れてもらうのを手伝ってもらうようなこともありましたが、近所の方が病院に連れてくれていったこともありましたが、
	6-7	分離	しかし、3月26日頃、私は、いわきでの（森林に携わる）仕事を続けたかったことや、両親のことが心配だったこともあり一旦私だけが単身でいわきの自宅に戻ることにしました。このようにして、私と家族の二重生活が始まったのです。実は私は、いわきへ行って、1年くらい経てば妻達のほうがいわきへ戻ってくるだろうと思っていました。しかし、被曝の影響が明らかにならず、妻の子どもへの健康影響が心配で戻ることにはできないという気持ちは変わりませんでした。私は別居生活で年に数回しか家族と会えず、子どもたちはたまにしか会っていないので、距離ができてしまいました。特に長女は当時1歳でしたので、私のことを誰だかわからなくなっていました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
		7 喪失	妻ともなかなか会えず、いわきに戻るかどうかということで意見が衝突し、ケンカが増えました。また、被ばくの影響に関することでもよく電話でケンカになりました。あるときは、いわきにいる私達のことを心配して妻が愛知の野菜などを送ろうか、とってくれたことがありました。私は、福島で売っている野菜や水で大丈夫だと思っていたので、そう言われてショックを受けて、いらぬ、と言いました。そうすると、妻も怒ってケンカになってしまったこともありました。このように意見の違いで言い争いになり、「離婚」という言葉が出たことすらありました。
		7 喪失	私は、故郷で良い職場環境で好きな仕事できていましたし、裕福でなくても、地域のコミュニティが好きでしたし、自然に囲まれた環境でしたので、とても気に入っていました。ですから仕事を辞めて故郷を離れることは本当につらかったです。
		8 社会的世界	私は、平成24年6月から、愛知で工事現場の測量がメインの仕事をするようになり、平日は岡崎市の(会社の)寮で生活するようになりました。仕事の内容は山を崩して高速道路などを作る仕事でした。この仕事は私が好きな森林をむしろ破壊する面のある仕事ですし、本当にやりたいことはありませんでした。私は家族のため、生活のための仕事、と割り切って働いていましたが、どうしてもやりがいや楽しさを感じることができませんでしたし、職場仲間となじめず、パワハラもあり、仕事が本当に嫌でした。
		9 健康	私たち一家は平成23年の3月15日に避難しましたが、それまでに子どもらを被ばくさせてしまったのではないかと後悔があります。これ以上の被ばくをさせたくないで、妻としては、子どもたちが成人するまでは少なくともいわきに戻ることは考えていないようです。私も同じように思っています。事故以降、子どもたちを連れていわきにも戻ることはほとんど無くなりました。一度だけ、平成25年頃だったと思いますが、妻と子どもといわきに帰りましたが、妻は2日くらいでやはり怖い、もう限界だといって子どもを連れて愛知に戻ってしまいました。子どもたちと一緒にいわきに戻ったのはこの一回きりです。
		9 健康	また、今も、既に被ばくを受けている子どもたちの内部被ばくを少しでも減らしたいという思いから、学校にも頼んで給食もなしでお弁当にしています。給食の食材も産地がわからないためです。これは学校にはアレルギーと似た扱いで許してもらっていますが、特別な扱いですので、それがいじめなどに発展することに不安はあります。
		9 周囲への警戒心	私たちの心配はあまり避難先の人には理解してもらえず、前の職場の人からも、「そんな気にしてもしょうがないじゃないの」と言われることもあり、そういったことがあり、避難先の人には安易にこの話はしないようにしています。
		10 自責	実家と離れてしまって、私の家は受け継ぐべきものが受け継がれていないのではないかと感じてしまいます。
		10 自責	また、妻が私の両親と話すのも話づらくなっているようです。母は愛知に来てくれることもあります。父は体調のこともあり、なかなかこちらに来られません。両親からは子らの写真だけでも送って欲しい、と言われていますが、私自身なかなかいわきに戻れない気まずさもあり、なかなかそういった連絡もできません。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	10	周囲への警戒心	学生時代の友人といわきに戻ったりすると話すこともあるのですが、友人から、いわきに戻っている人たちは、あえて意識しないようにしているのかもしれませんが、被ばくのことを気にする必要はないという人も中にはいます。そうするとどうしてもこの話はしないほうがいだろうという気持ちになって、距離が出来てしまいます。いつまでも帰ってこない私たちに対してよい感情を持っていないのではないかと感じてしまうこともあり、本音で話ができません。同じように、避難前に住んでいた家で仲良くなった近所の人とも気まづくなってしまう、いまではほとんど連絡もしなくなってしまうました。
	10	喪失	私は故郷にいる両親や友人らとの関係が壊れてしまいつつあることを感じており、故郷の人間関係が修復不可能になる前にいわきに戻りたいとは思いますが、子らに被ばくをさせたくないという気持ちもありますし、妻は今の所一切いわきに戻るつもりはないようですので、今後どうするかはまだ迷っている状況です。実は私だけ福島へ帰ろうかと実はこれまで何度も思ったこともあるのですが、妻にはわかってもらえませんでした。妻とは、帰還のことについては何度も話をしていますがどうしてもお互いにわかり合えない部分があり不満が残ってしまいます。
	11	希望	原発事故がなければ、私達はきっとふるさとで自然に囲まれた環境でみんなと一緒に暮らし、好きな仕事を続けていました。原発事故が無ければこんなに苦しむことはありませんでした。
40 (甲C40第1号証)	3	希望	事故が起こる前は、私は、元自宅に住み、(息子がお世話になっている障がい者施設：引用者挿入)で働き続けるつもりでした。私が死んだ後も、同協会が息子の面倒をみてくれると思っていました。同協会が、私の死後も申立人の看護を約束してくれ、また息子も、同協会の環境に適応していたためです。しかし、このような計画は、原発事故でなくなってしまいました。
	3	健康	避難中、息子は、数日間で変わってしまう避難先での新たな環境変化への適応がなかなかできなかったため、睡眠不足の日が3か月にわたり続きました。体重も、避難前は65キログラムあったのが、同じく3か月間で56キログラムにまで減ってしまいました。また、避難前には出なかったチック症状(首を上下左右に振り、爪を噛みます)も出てくるようになってしまいました。今も、このチック症状は消えていません。
	3	避難時の恐怖	原発事故で、身体に危険を及ぼしうる放射性物質が大気中に拡散され続けていることを知り、居てもたってもいられなくなりました。私は当時56歳だったため、放射線の被害はあまり受けないかもしれませんが、(知的障害を持つ)息子は20歳と若く、触っていいものとそうでないものの判断が出来ず、ダメと言われたことも勝手にやったり、不用心に放射性物質を触ったりしてしまい、被害を受けるかもしれないと考えたためです。
	4	分離	平成23年3月17日、夫とは避難について意見が合わなかったため、私は夫を残し、息子を連れて避難を開始しました。当初、韓国に避難する予定でしたが、同国は障がい者への福祉サービス水準が日本と比べてまだまだ低いため、息子を連れての避難は難しいと分かり、できるだけ放射性物質が降下していない場所に避難したいと思いました。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	6	経済的な損害	避難先までの避難では、飛行機を使ったので、私と息子の往復分で結構なお金が出て行きました。また、前述の通り、着の身着のままで出てきたので、生活できるだけの道具はほとんどありませんでした。家具や洋服、寝具はいちから揃えましたし、自動車も大垣市で購入しました。2度、いわき市に戻りましたが、持ってくるのができたのは、服や布団、思い出の品程度でした。
	6	喪失	・・・大垣市の前宅や現在の住宅の近所には、知っている人が誰もいません。
	7	経済的な損害	私は避難当時56歳で、それまでしてきた職種も障がい者の介護支援でした。息子のこともあり、やはり介護支援をしたいと考えましたが、介護支援という肉体労働について、新規で56歳の者を雇ってくれるところはなかなか見つかりませんでした。それでも必死に就職活動をして、平成25年9月1日から27年3月31日まで、岐阜県瑞穂市所在の（施設で）パート職員として勤務することができました。しかし、その後はいい職場が見つからず、パートと無職を短期間で繰り返しています。収入は、無職の時は0円ですし、パート時間も短いです。を長時間施設に預けていられないからです。現在は無職です。
	7	経済的な損害	避難前の元の自宅には、現在でも元夫が住み続けているようです。しかし、私たちは避難したため、生活費が別にかかるようになってしまいました。また、元の自宅では、近所に畑を借りて、家族3人はもちろん、ご近所にも配布できるだけの多くの種類の野菜を作っていましたが大垣市にはそれもあります。食費も当然増えました。
	8	分離	私が元夫と離れて住むようになって生じた影響は、生活費の増加と住環境の変化、私や息子が安心してお世話になる施設がなくなったことだと思ひ息子の相手をよくしてくれていたため、息子が寂しい思いをせずに済みましたが、現在は元夫がいないため、息子さびしうにすることが増えました。
	8	健康	平成26年4月19日、地元の診療所で甲状腺エコー検査を受けたところ、私はA2の判定を受けました。大きさ1.3ミリメートルの嚢胞があったためです。これが原発事故の影響かどうかは分かりませんが、年老いた私ですらこのような結果が出ているのですから、一時帰宅した際にどこを触ったか分からない若い息子に、もっと大きな影響が出てくるのではないかと心配です。
	9	健康	このような私自身の検査結果もあり、また、息子が更に新たな環境に適應するのが困難であることを考えれば、とてもいわき市に帰る気にはなれません。
	9	喪失	元自宅では畑でたくさんの野菜を作り、ご近所の方に分けたりしましたが、今住んでいるところでは、それもできません。元自宅のご近所の方々は、私や息子にとっても親切にしてくれ、話しかけたりお総菜やお野菜を分けてくれたり、野菜の作り方を教えてくれたりしましたが、現在の住宅の近所には、そのような方はいません。
	9	喪失	また、息子を安心して預けられる場所がなくなりました。以前なら、息子の施設に安心して預けることが出来ました。職員は私の同僚ですから、気心が知れていたのです。現在、大垣市にあるかわなみ作業所にお世話になっていますが、息子は未だになじめていないようです。施設の職員の方たちも、息子に親切に接してくれるのではなく、作業の指示を機械的に出したり、仕方がないので介護するような印象です。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	9	健康	息子自身も、変わってしまいました。息子は、避難前は少し手話のできたのですが、現在の生活環境では、手話で相手ができる身近な人間は私一人です。避難当初、息子は、施設の人たちに手話で話しかけていましたが、手話が通じないと分かって、他人の事に興味を示さなくなり、無気力になってしまいました。また、よく相手をしてくれた元夫がいなくなり、ふさぎ込んでいるような時間が増えました。
	9-10	健康	私は、自分の死後、誰が息子の面倒をみてるのか不安で仕方ありません。(避難前にお世話になっていた施設：引用者挿入)に通いたいと思いますが、福島原発事故由来の放射性物質の流出や放射線量の情報からすると、いわき市もまだまだ安全とは言えないため、安心していわき市に戻れずにいるのです。
41-1 (甲C41第1号証)	2	希望	私が40歳のころに、海外旅行を経て時代に左右されない生活をしたと思い立ちました。その方法として、都市部を離れた田舎で、流行のモノに左右されないシンプルな生活を、自給自足の生活を営むことを決意しました。土地を探していくつもまわってやっと福島県田村市の都路に理想の土地を見つけました。その土地は尾根の一部であり、付近の水源からの湧き水を利用でき、(天然のヤマツツジが群生し花をつけ)、尾根の上から周囲を見渡せば付近の自然豊かな景色を一望できる場所でした。周囲は静かで過ごしやすく、四季折々の景観の変わるさまを楽しみ、自給自足を基本とするシンプルな生活がここでなら実現できると思い、都路を終の棲家と定めることにしました。
	2-3	希望	尾根一帯の雑木林を含む1500坪あまりを購入し、スイスの住宅をモデルにして自らデザインを監修した家を建てました。便利だった宮城県仙台市のマンションも処分して、平成5年(1993年)に家族とともに移り住みました。移り住んだ時点で、家は未完成でしたので、日給6000円の日雇労働で時には怪我をしながらも稼いだお金を改装費に充て、自らの手で地下室やベランダ、薪小屋も設け、多くの手間と時間をかけて家を作り上げました。庭には季節ごとの眺めを考え家族の手で庭木を配置し、自給自足ができるよう畑を設け、建物内には薪ストーブや自らこだわりをもって作った家具などを揃え、イメージ通りの形になるまで20年近くかかりました。購入当初は幼木だった土地内の雑木林も、薪にできるほどに成長しました。
	3	希望	私は、厚生年金の受給資格を得るために掛け金の関係から続けていた仕事を、平成22年(2010年)11月に退職しました。借金もローンも無く、将来の年金収入が15万円になることを見越して、それに合わせて20年にわたり準備をしてきました。自給自足の生活はまさにこれから、というタイミングでした。
	3	希望	妻が60歳で定年を迎える直前、私たちの年金収入で自給自足のシンプルな生活をしながら終の棲家で暮らそうとする矢先でした。私たちは全てを失った気持ちになりました。
	4	避難時の恐怖	震災当日、頻繁な余震で、炬燵で横になる事もままならず、電気がきているのにテレビをつけることにも気が至らず朝を待ちました。普段は地震があれば必ずテレビをみる習慣ですが、余りにも強い揺れと絶え間ない余震で全く余裕がありませんでした。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	6	社会的世界	市営住宅には風呂も洗濯機もありませんでした。暑さに弱い体質もあり、銭湯通いの負担も大きく、風呂に行く回数も次第に減りました。加えて、銭湯では全身刺青を入れた複数の入浴客を目にした精神的なショックは大きく、銭湯に行くのが嫌いになるほどでした洗濯は毎度コインランドリーに行く必要があり、大変な手間でした。
	6	社会的世界	また、市営住宅の水はカルキ臭く、お茶やコーヒーの味がわからないほどで、これまでの湧き水生活とのあまりの差異に衝撃を受けました。また、私は東北生まれですので東海圏の味噌や醤油などに味覚が合わないこと、馴染みのある煎茶もなかったことも相まって、何よりの楽しみであった飲食を失うことになりそれは相当なストレスでした。
	6	社会的世界	さらに、涼しい東北との気温の違いもこたえました。私はもともと暑さに弱い体質で、寒い地域とロケーションが移住の全てでした。避難生活での疲労も重なり、人生で初めて熱中症にかかり寝込んだこともありました。
	7	周囲への警戒心	その間、福島ナンバーであることが理由か、故意としか思えない態様でドアをぶつけられるなど車に関するトラブルが絶えず、特に県営住宅に駐車していた際はボンネットをへこまされるという被害にも遭いました。被害箇所をみた警察官が、凹み方が故意によるもので、周辺に手の跡が多くつけられているから、悪戯による仕業と言われました。悪戯をされないよう、福島ナンバーのナンバープレートを取り換えなければならない事態となりました。
	7	健康	妻は、度重なる生活環境の変化、特に移転先の市営住宅、県営住宅のコミュニティになじむことが困難だったことからくる孤独感などで、平成24年6月ころには、心療内科で中度のうつ病、睡眠障害と診断されました。平成25年5月ころからは、睡眠障害の他に三叉神経痛(耳の激痛)なども併発し通院する必要が生じました。睡眠障害のせいで同じ部屋で眠ることができず、一時立入に際してのホテルなどではトイレで一夜を過ごすこともありました。
	7-8	社会的世界	自給自足に近い生活を見据えて将来的な計画を立てていたため、それが失われたことにより水道光熱費や食費などの支出が増大しています。こちらに来て皆に助けられ今までやってこられたことに感謝していますが、逆にシンプルな生活はできなくなり親戚付き合いも増え、3年間で毎年親戚の葬式1回、以前は遠いからと遠い親戚知人は失礼していましたが、お世話になった分つきあいも増え、交際費が増えました。また、以前は遠いからと遠い親戚や知人の法要や付き合いなどは失礼していましたが、移住と、世話になったことから、断れなくなりました。
	8	希望	岐阜に住居を購入したため生活の拠としては都路の不動産は必須ではないかもしれませんが、しかし、都路は言葉にきれいな多くの思いがあり、年金暮らしのできる物価の安い静かな終の棲家でした。
	8	希望	我が家には、仙台の親戚の法事に合わせて年1回立ち寄っています。車を持ち出すことはできましたが、バイクは運搬にかなりの費用がかかるため、持ち出していません。薪ストーブもそのままです。布団や衣服はカビで使いものになりません。ベランダは雪の重みで崩れかけています。
	9	経済的な損害	面会や一時帰宅のためにかかる移動時間や費用ですが、片道700キロメートルの距離を車で移動するので、休憩時間を除くと7時間かかり、到着してホテルで1泊し、翌日に帰宅するという2日の行程です。車での移動も年々大変になってきましたので、平成26年以降は、年1回の墓参りの際に一時帰宅をしています。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	9	9 自然的世界	除染の範囲は自宅周辺の平坦な部分の土壌を交換したのみで、畑、雑木林は除染の対象外でした。自宅の周囲は山林に囲まれており、被ばくの影響が見当もつかず、都路に戻ることは健康被害への不安があります。水源の湧き水の汚染は、湧き水をもはや飲料として用いられなくなったということであり、耐え難いものがあります。
	10	10 希望	確かに、年を経て長距離の移動がこたえるようになり固定資産税も課税されるようになったため負担は増すばかりですが、だからと言って処分しようにも風評被害のせいで処分もできません。東京電力や国が不動産を買い取ってくれるなど何らかの処置でもしない限りは、都路の土地と家屋を荒れるがままに放置することはできず、その管理に時間と費用を割かざるをえない心情を少しでも想像してもらいたいです。
	10	10 喪失	私は岐阜の味覚になじめなかったことから食事を食べなくなり、妻も作りたくなかったこともあります。このようなことが重なり、双方ともにストレスとなり夫婦仲が悪化し、言いたいことも言えない関係が続くことになりました。
42-1 (甲C42第1号証)	4	4 避難時の恐怖	3月14日、私達は、テレビのニュース番組で、福島第一原発が爆発する映像が流れるとともにこの爆発により放射性物質が広範囲に放出されると報道されているのを聞いて、放射線による被ばくを避けるため、福島市外へ避難することを決め、私が運転する車に子ども達3人と父母を乗せ、新潟市内へ避難しました。新潟市に親戚や知人がいるわけではありませんでしたが、とにかく福島市からできるだけ遠くに逃げたいという思いでした。何の段取りもできないまま、1台の車で逃げたので、多少の衣服以外、荷物は何も持ち出すことができませんでした。
	5	5 経済的な損害	同年3月20日からは市営住宅(静岡県掛川市)に移りました。移ったといっても、家財道具も何も無いような状態でした。取り急ぎ、こたつなどの暖房器具や衣類等を入れるプラステックケース、食器や炊飯器などの調理用品、布団などを全て買い揃えなければなりません。家財道具もそうですが、子ども達は新年度が始まりますし、二女は新1年生になるところでした。福島の小学校への入学準備は全て済ませていましたが、それも全て台無しになってしまいました。ジャージ、お道具箱、ヒ。アニカ、リコーダー等々、諸々のものを全てを、3人分、まるっと揃えなければなりません。子どもの服も、福島の自宅であれば、上の子のお古を下の子に着せることなどもできましたが、掛川に来てからは、全て買わなければなりません。
	5-6	5-6 分離	3月25日に、私だけ福島市の自宅に戻りました。勤務先の病院には多くの患者さんがいましたし、それ以上、病院や患者さんに迷惑をかけることはできませんでした。子ども達は、3月11日以降、少しも落ち着くことができないまま、知らない家に引っ越すことになり、これからどうなるんだろうと、とても不安そうでした。私の父母がいるからといって、福島で一緒に暮らしていたわけではありませんので、子ども達にとってみれば私が居なくなるというのは、心細くてたまらないことだったと思います。そんなときに一緒にいてやることができず、申し訳ない気持ちで一杯で、私自身もとても辛かったです。このときは、私が先に福島に帰って、程なく子ども達も福島に帰ってくることを考えていました。



原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	6	喪失	私は、福島に戻り、仕事に復帰しました。ですが、職場に行ってみると、一時的にでも避難したことを周りから酷く責められました。職場では反省文を書かされ、提出させられました。そうしないと職場復帰をさせて貰えなかったのです。私は、子どもの安全と健康を守らなければならないという母親としての気持ちと、その気持ちを周囲からは認めて貰えないという肩身の狭さや周囲からの冷たい号動と、仕事を休んでしまったという後ろめたさで、とても複雑な気持ちでした。とても辛かったです。
	6	分離	私は、職場復帰後も、常に上司や同僚達に何度も頭を下げて、何とか夜勤を多く入れ、月に1度は1週間近く連休がとれるように工夫し、毎月、掛川市の子どもの達のところへ行くようにしました。体力的にも精神的にも非常に辛く、大変でしたが、子ども達の健康と安全な生活を考えると、そうする他ありませんでした。授業参観や子どもの学校の行事などに合わせて、掛川市に行っていました。
	6-7	周囲への警戒心	私が掛川にいるとき、子ども達は、自宅では嬉しそうに元気に振る舞っていました。ですが、実際には、新しい学校になかなかなじみず、友達もなかなかできなかったようです。これは、後で述べるように私が福島での仕事を辞め、掛川で子ども達と一緒に暮らすようになってから、子ども達が少しずつ話してくれるようになったとです。二重生活をしていたころは、子どもなりに気を遣って、私に心配をかけないように、言わなかったようです。学校では、津波の話や地震の話になると、体験談を聞かれるようなこともあり、その度に辛い思いをしたようです
	7	喪失	特に長女は、福島で仲の良い友達がいたのに、お別れも何もできないまま知らない土地に引っ越して、新しい学校へ転校となり、ひどく動揺していました。
	7	経済的な損害	福島と掛川とで生活費が二重にかかったこと、毎月の往復のガソリン代等、二重生活のための負担は大きかったです。子ども達の食費や光熱費については、子ども達と一緒に住んでいる私の父母も多少なりとも負担してくれた部分もありましたが、それでも子ども達と一緒に暮らしていたときの生活費からすると嵩んでしまいました。
	7	社会的世界	二重生活が半年を過ぎるころから、私はそのような生活に段々と限界を感じ始めました。狭い市営住宅に子ども達3人と私の父母とで暮らすことは、どうしても窮屈で、子ども達も私の父母も、毎日のちょっとしたことにストレスを感じているようでした。
	8	喪失	福島市では、本件事故が起きる前から結婚を視野に入れて交際をしていた男性がいました。その方は、福島市内で会社を経営しており、子ども達のことでも良く考えてくれ、いずれは結婚し、福島市内で一緒に暮らすことを考えていました。子ども達にとっては新しいお父さんになる人でした。・・・中絶のことや、私が子ども達の健康を考えて福島市を離れる決意をしたこと、その方は自営業のため福島市を離れられないこと等から、私達は結婚を諦め、別れることになりました。
	8	喪失	私は、震災後もその方と交際を続け、平成24年の夏頃にはその方の子どもを身ごもったのですが、放射性物質の胎児への影響を考え、悩んだ末、中絶をしました。平成24年9月頃のことです。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	9	周囲への警戒心	新しい職場で働き始めてからも、福島市から逃げてきたことで色々和白い目で見られます。職場の同僚からは、私の話し方がどうしても掛川の方達と違うので、「何言っとるか分からん!」などと酷く冷たい言い方で言われることもあります。福島から来たことで酷い目に遭うと、とても悔しくて辛いです。ですが、子ども達の健康のためには、現状では福島に戻ることは難しいと考えています。
	9	周囲への警戒心	私自身は、今も複雑な思いでいます。こちらの職場にはなかなか馴染めることができません。何か誰かに相談したいことがあったり、たまには辛い思いを誰かに聞いて欲しいと思ったりしてこちらには親しい友人もいません。福島県に住んでいる友人と時々やりとりをしても、「帰って来ないの?」「いつ帰ってくるの?」などと言われ、どこか後ろめたいような思いがして、頼りたくても頼ることはできず、本当の気持ちを話すことはできません。
	9	喪失	上手く言葉で言えないのですが、自分と福島の友人達との関係が変わってしまっただけでなく、もっと大きな何かがバラバラになってしまった気がして、自分がどうすれば良いのか、分かりません。
	9	健康	毎日ではありませんが、今でも不安になったり悶々としたりして眠れないことが度々あり、そのようなときは医師から処方された睡眠導入剤や市販薬を服用しています。
	9-10	希望	「福島で暮らしている方もいるのに」とか「もう掛川での生活にも慣れたでしょう」などと言われるかも知れませんが、あの事故さえなかったら、このような思いもせず、私と子ども達は今も福島で暮らし、私は交際相手の方と結婚をして、子ども達には新しいお父さんができていた、そのように思えてなりません。
	10	健康	私たちは、平成23年3月14日から避難生活を続けています。本件事故から避難までの数日間、それから、私自身が福島に残っていた間、被ばくの被害を受けたことは間違いがないと思っています。将来、何らかの症状が出るかもしれないという不安は、もちろんあります。
	11	健康	私のことは、不安であっても、仕方がないと自分に言い聞かせていますが、子ども達のことは別です。他の地域の子も達に比べて福島の子も達に甲状腺異常がたくさん見つかっているという報道を耳にすると、避難して良かったとは思うものの、子ども達は大丈夫だろうか、不安を感じざるをえません。特に、長男と二女には、甲状腺に小さな嚢胞があるという検査結果が出ています。今のところは問題がないと言われていますが、今後も経過観察を続ける必要があります。
	11	健康	「今のところは問題はない」と言われても、将来はどうか佳が子ども達の健康を保証してくれるのでしょうか。将来の健康に不安を感じるのは当然のことだと思います。
	11	周囲への警戒心	私自身も慣れ親しんだ職場から新しい病院での勤務となり、私の話し方が分からないなど、些細なことを言われただけでも酷く傷ついたりしています。
	11	喪失	また、自分でも今後どうしたら良いか分からないのに「いつ帰るの?」などと聞かれることもあり、何とも言えない複雑な気持ちになります。自分の居場所がないように感じます。本件事故の前はそんなことはなかったのですが、本件事故後は、些細なことでも思い悩んで眠れないことが多くなりました。今でもどこか現実ではないような不思議な感じがしたり、ふと、どうしてこんなことになってしまったのだろうと思うことがあります。

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の類型 タグ付け	引用箇所
	11-12	社会的世界	あそこ（福島第一原発：引用者挿入）だけは時が止まっていて、同じように私自身も時が止まっている感じがしています。もちろん、毎日の目の前の生活は気ぜわしく進んでいきますが、それとは別に時が止まったままの自分がいて、うまくバランスがとれず、とても苦しいです。
	12	自責	突然、とてつもなく不安になります。そうして眠れなくなって、市販の睡眠薬を飲んで、翌朝の生活に無理矢理戻すということが続いています。そういう自分がダメに思えてきて、罪悪感でいっぱいになります。
	12	喪失	ただ一つ、確実にいえることは、福島に戻っても、前の状況とはまるで違うということです。友人関係も、職場関係も、ご近所づきあいも、前とは全く違います。もう、前のような親しい関係ではなくなってしまいました。福島に住んでいる親友とも、気まずい関係になってしまいました。かといって、ここ（避難先：引用者挿入）も自分の居場所とは思えません。まるで自分が根無し草になったような、自分自身の根っこを無くしてしまったような、そんな気持ちがしています。
43-1 (甲C43第1号証)	5	分離	3月16日昼くらいに、私、長女、長男及び義理の父は、夫の手配してくれたタクシーに乗って、自宅を出て那須塩原駅に向かいました。夫は仕事を休むことができなかつたため、朝から仕事に行ってしまうっており、私たち家族は離れ離れになってしまいました。
	5	分離	那須塩原から新幹線で東京に向かい、東京で義理の父と別れました。私たち3人は、東京で乗り換えて、その日の夜に新幹線で名古屋につき、私の実家でその夜を過ごしました。
	5	避難時の恐怖	私は、本件事故発生直後から福島市内にも放射線量が高い地域があることを聞いていましたが、実際に入ってくる情報量が非常に少なかったため、放射能に対する恐怖心が募るばかりでした。
	6	経済的な損害	現在も、夫は福島県内に居住しており、1か月に2回程度、私たちの住む名古屋市との間を往復しています。私、長女及び長男の3人は、6年近く、夫との別居生活を余儀なくされています。・・・福島と名古屋での二重生活を余儀なくされているため、食費や電気ガス等の光熱費など、本来必要ではない費用が余分にかかってしまいます。また、夫が名古屋に来たり、私たちが福島に行く際には、多額の交通費がかかってしまうため、非常に経済的負担が大きくなっています。そのため、私たちの生活は決して楽ではなく、私も節約に努めています。
	7	希望	夫の勤務する銀行が福島県内にあることから、私たちは結婚を決めたときから、将来的に県外に移住することなどは全く考えておらず、ずっと子どもたちと一緒に、福島県内に居住していくことを当然のことと考えて、そのように生活を送ってきました。しかし、本件原発事故の発生により、私たちの家庭環境及び人生設計は一変してしまいました。子どもたちの成長のことを考えると、そのまま福島県内に居住し続けることは、到底、耐えられないことでした。
7	健康	夫は、銀行員として福島を離れることができません。そのため、家族4人での平穏な生活を取り戻すためには、私たち3人が福島に行くほかは方法がないのですが、未だ、放射能に対する恐怖心からその決断はできていません。私自身は特に、子どもの受験のことや夫の両親のことなどで、日々頭を悩ませています。	

原告番号 (証拠番号)	pp.	被害の種類 タグ付け	引用箇所
	8	分離	<p>夫は、片道約7時間を費やして本件事故以来現在までの約6年間、毎月2回ほど自動車で福島・名古屋間を往復しています。このような長時間の移動において夫にかかる肉体的・精神的苦痛が極めて大きいことはいうまでもありませんし、夫が無理をしすぎて体調を崩してしまうのではないかと、福島との往復の最中に交通事故に遭ってしまわないかなど心配ばかりで、私自身も心の休まる時がありません。</p>